

の現われの奉納文

伊勢神宮の古代

## 目

次

## 推薦文

## 序 文

千年の眠をよみがえらす	小島 末喜	成田 末五郎
物部大連尾輿書（以下書を略す）	丹代貞太郎	丹代貞太郎
中臣連鎌子	中臣連鎌子	中臣連鎌子
同	同	同
藤原不比等	藤原不比等	藤原不比等
太朝臣安麻呂	太朝臣安麻呂	太朝臣安麻呂
一品舎人親王	一品舎人親王	一品舎人親王

22 21 20 19 18 18 17 15 15 9 4 1 頁

21.	20.	19.	18.	17.	16.	15.	14.	13.	12.	11.	10.	9.
同	菅原道真	同	菅原道真	同	太宰小式小野篁	同	和氣清麻呂	左衛門尉	藤原千常	弓削道鏡	同	一品舎人親王

38 37 36 35 34 33 32 31 30 28 26 25 24 頁

72.	71.	70.	69.	68.	67.	66.	65.	64.	63.	62.	61.	60.	59.	58.	57.	56.	38.	37.	36.	35.	34.	33.	32.	31.	30.	29.	28.	27.	26.	25.	24.	23.	22.	藤原忠文
宗良親王	師兼親王	同	南朝王孫	前左近中將光実	同	後醍醐天皇	同	尊良親王	同	同	同	村上義光	同	南朝師賢	藤原忠家	藤原忠舒	中納言經高	源賴光	同	同	同	秀鄉多喜能	同	同	同	平貞盛(一)原文(二)	同	同	同	平良門	平良門	小野道風	同(一)原文(二)	藤原忠文
..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..		
..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..		
100.	99.	98.	97.	96.	95.	94.	93.	92.	91.	90.	89.	88.	87.	86.	85.	64.	63.	62.	59.	58.	56.	55.	54.	52.	51.	50.	48.	47.	46.	45.	44.	40.	39.	坂田金時

89.	88.	87.	86.	85.	84.	83.	82.	81.	80.	79.	78.	77.	76.	75.	74.	73.	55.	54.	53.	52.	51.	50.	49.	48.	47.	46.	45.	44.	43.	42.	41.	40.	39.	源賴光
三条西公明	同	同	前大納言公夏	三条公冬	同	津守國貴	同	前中納言氏定	同	太宰師泰成親王	藤原長親	花山院長親	權中納言実清	同	同	宗良親王	同	藤原基綱(一)原文(二)	同	同	源賴朝	同	同	藤原淵名兼行	木層義仲	源義經	源義家	渡辺綱	同	坂田金時	源賴光			
..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..			
..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..	..			
115.	114.	113.	112.	111.	110.	109.	108.	107.	107.	106.	105.	104.	103.	102.	101.	84.	82.	81.	80.	79.	77.	76.	74.	73.	72.	71.	70.	69.	68.	67.	66.	65.	源賴光	

参考文献	184	183	153	127	124	123	123	122	122	121	121	120	118	116	116
参考文献	99.	98.	97.	96.	95.	94.	93.	92.	91.	90.	中御門宗房	同	同	同	同
参考文献								村井古巣							
参考文献								無名							
参考文献								無名							
参考文献								無名・干支							
参考文献								別							
参考文献								花押							
参考文献								二、中篇	日本古代文字の各種						
参考文献								三、後篇	日本古代文字の解説						
参考文献								後記							

## すいせん文

### 日本古代史の新たな開発

成田末五郎

(青森県文化財専門委員兼陸奥史談会長)

昭和二十年（一九四五年）八月十五日、終戦の詔書が下されたその日から、日本国民は突如として虚脱状態に投げだされた。

私は若いころから動物や植物に興味を持ち、教壇に立つこと三十年、自然科学を拠点として生きてきた人間である。終戦には私なりに大きなショックを受け、昭和二十年の春、教壇を去る決意をした。

日がたつにつれて、国民の誰もが日本歴史に疑惑の念を持つようになつた。歴史に信念を失なつたからである。この頃から日本の古代史の研究がこれまでの領域を越えて弄放した。指導者も専門家も手の施しようがないありさまであつた。

丹代氏はこの頃から、日本古代史の研究を始めたらしい。氏との出会いは今から数年前、ある研究会で氏が日本古代文字研究の一端を、披露したのを聴講したときである。

私は昭和二十二、三年頃、十和田出身の日本画家、鳥谷幡山氏の来訪を得て、茨城県磯原の竹内家文書（日本古代文字の文献）を知り、本県三戸郡戸来遺跡について説明を聞いたことがあつた。

また昭和二十七、八年、弘前市弘前図書館長時代は暇あるごとに、岩木山の周辺に考古学資料を求めて表面採取し、同三十三年退職後から五カ年は、岩木山麓の重要な地点を五十数カ所にわたって発掘したことがある。

この地点はこれまで文献には何も表されていなかつた所であるが、旧石器時代から新石器時代の晚期にわたる広範な遺跡で、大量の土石器を得た。その一部は目下、弘前考古学館に保存されている（岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書）。こうしたことから、丹代氏の古代史研究は私の最も注目するところとなつた。

氏は先きに「津軽とホツマノツタ」の関係を紹介して、古代史界に大きな衝動を与えたが、その後伊勢皇大神宮を訪ね、同所の文庫に研究の趣意を述べ史料拝観を乞うた。責任

者は丹代氏の真摯な態度に感じ、ここに入館を許されて通うこと一月余、同館の保有する古代文字を写真に納め、あるいは筆写して帰宅し、いらい二カ年にわたり解読につとめた。ついに健康を害ない。数カ月入院したが神明の守護によつて回復し、いまこれを版に興し研究者にその成果をわかとうとしているのである。

氏は先きに大学や、中央の学者博士を訪ねて意見をもとめたが、納得を得ることはできなかつた。しかし古代文字存在の新しい見方は独歩であるといえよう。

丹代氏は学歴も学殖もない。農業のかたわら、全国遍歴数回の六十九才の篤学者である。氏の熱烈な心魂は歐米流の科学文明に支配された今日の文化を洗い直して、もつと高いところに目標を置いている。そのため、日本の古代史の新たな開発が必要であるとしている。

私はその序文を乞われた。私はその任ではないが、敢えてここにこの書を広く世に推薦して序文とするしだいである。

（終）

口  
繪  
写  
真  
(話題となる四筆)

나가나나나나나나나나  
하하하하하하하하하  
히히히히히히히히히

釋迦牟尼佛

此の人は古事記の製作者故  
古事記以前に和字がなかつ  
た説は誤の証明になる。

歴史上の大事件は事実であつた証。宇佐神宮の神示を受け皇位を守つた。其の神示

歴史的な真筆に合致する

ମାତ୍ରାକାର ଶବ୍ଦରେ ପରିଚୟ

④ 平 將門

## 序文

### 日本古代文字の意義と著者の願い

日本古代文字研究家 丹代貞太郎

(東北の赤いリンゴの樹の下で)

私は昭和四十七年、八年の二年間にわたり、「古代文字」を探し求めて、全国の有名神社、仏閣を参拝行脚した。そして四十八年十一月末に、この伊勢神宮の古代文字と出会つたのである。

有名神社、仏閣の探査において、神璽（神符）などによる古代文字の発見はあつたものの、それらの片々たる存在では満足できなかつた私は、伊勢神宮文庫で九十九葉に及ぶ大量の染筆群を発見したときは、まさに「天にも昇る思い」であつた。

私は生涯の念願として文庫当局の特別許可のもとに、これら古代文字の全筆を原寸大（六尺の掛軸大）のまま、一カ月余をかけて模写させていただくことができた。そして帰

宅後、銳意これが解読につとめ、日夜寝食を忘れて二年後の昭和五十年末、ようやくその全訳に成功したのである。

神宮文庫に秘蔵された古代文字九十九葉の染筆者は約五十九名（無署名数名を含む）、そのほとんどは歴史上に名高い人物で占められている。たとえば、藤原鎌足、太安麻呂（古事記の編者）、舍人親王（日本書紀の編者）、和氣清麻呂、菅原道真、平将門、平忠盛、源頼朝、源義経、木曾義仲、宗良親王、後醍醐天皇など、皇族や天皇まで含めた史上著名人士が、いずれも古代文字で染筆しているのである。

古来より日本国民の尊崇のまとなつてきた伊勢神宮の森深く、日本古代文字の存在を証明する多数の染筆が秘蔵されていたことは、まさに驚異に価する事実といわねばならぬ。それは日本をして「漢字渡来以前には、文字のない野蕃国にすぎなかつた」と思わせたがる、多くのエセ学者たちにに対する痛烈な反証であり、日本のすぐれた古代文化を探求する上での重要な糸口ともなるからである。

齊部広成が「古語拾遺」（西紀八〇七年）の序文に、「蓋し聞く、上古之世末だ文字有らず、貴賤老少口々に相伝え、前言往行存して忘れず」と記していく、漢字による教育

を受けた学者たちの多くがそれを根拠として、「日本古代に文字なし」と主張するに至つたことは、諸賢ご承知のところである。そのため、最近に至るまで実に千余年にわたつて、「日本古代文字の存否」をめぐり、学者たちが論争を交えてきたのであつた。

しかし、その論議もそろそろ終止符を打つべき時期にきたと思われる。神宮文庫に秘められてきた九十九葉の染筆が、紛うかたなき「古代文字あり」の事実を、この上なく雄辨に物語つてくれているからである。

これらの古代文字は、神宮文庫に於て旧称を「かみのみたから」と呼ばれ、今日では「神代文字」の名称で、長い歴史の中を守られつづけてきた。現存のものは、明治初年頃に、いまままで保存された染筆を下敷きに書き写されたもので、薄い美濃紙に文字の輪郭を書きとつた中は白地の「籠文字」として遺されている。そのうち三十葉ほどは、朱または墨で籠文字の中を埋めたものである。これは、旧来のものの損壊を見越しての処置であつたと思われる。

一葉の大きさは、美濃紙を三、四枚つなぎ足したいで、ちょうど家庭用の掛軸のようなものといつたらよいだろう。長さ約一、五メーダー、巾五十センチのもの十二葉ほど

である。用いられている書体は、アヒルクサ文字（五十七点）、アヒル文字（十六点）、タネコ文字（六点）、アワ文字（六点）、絵文字（五点）、イヅモ文字（二点）、干支（四点）、宗源道文字（一点）、数文字（一点）、漢字（一点）となつてゐる。

また内容としては、十六柱の御神名を筆頭に、古事記、日本書紀から引用された詩歌や自作の和歌、あるいは叙事あり干支ありなど多彩である。これらの染筆群に目を通してみると、いろいろ興味ある点が目につくが、中でも注目されるのは古代文字から漢字時代への移り変りである。

古い時代のものは古代文字のみで書かれているが、時代が移ると一部に漢字が混つてくれるるのである。たとえば、六世紀の物部尾輿、七世紀の藤原鎌足の書には漢字は全く使用されていない。花押でさへ古代文字を用いているくらいである（鎌足）。

そして八世紀に入つても藤原不比等（署名が「ふひら」となつてゐるのは新発見）などはまだ漢字を使つていないが、同じ八世紀でも帰化人の太安麻呂や、稗田阿礼、舍人親王となると漢字で署名している。そこに、古代文字の時代から漢字時代への交替期の訪ずれが浮き彫りになつてゐる感を味わうのである。

また古事記の編さん者として、漢字専門とのみ思われる太安麻呂が、日本の古代文字を書き遺しているのも印象深いし、さらにかの有名な弓削道鏡がただ一人、どういうものか漢字だけの染筆を遺しているのも、これらの染筆群の真実性をいつそう盛り上げる感じがして、まことに感慨深いものがある。

ともあれ日本で最高の権威を維持してきた伊勢皇大神宮に於て、このような大量の日本古代文字が保存されてきた意義は重大である。それは私自身にとつて何物にも換えがたい、大きな価値のあることはもちろんだが、他の多くの古代文字研究者に対しても、百万の味方を得るにもひとしい価値を与えると信ずるのである。願わくば、日本古代文字の存在に否定的な学者諸先生がたもその結論を一度保留のうえ、本書の古代文字にじっくりと目を通していただき、細部を十分ご検討いただいて論を展開されることを望みたいのである。

## 千年の眠をよみがえらす

「天あも降り日の宮」 座主宮司 小 島 末 喜

丹代氏は私の出版した荒深師著「道ひらき」の神道書二十種を読んで居られた畏友である。同氏は青森県の六十九才の老農家で此の幻の書の全貌を明かにする、偉業を成し遂げた。「神宮に長年に亘る神代文字がある由、みたいものだ」は古代研究家の夢だつた。

私は、丹代氏のその畢世の研究の成果を整理し、私のかねて研究してきたところを加えて、共著として発刊の労を執つた次第である。

同氏の研究は染筆の模写が多く、その白地の籠字（縁をえどる文字）を見た所が、「読者をして实物を見る如く安心させるには写真に如かず」と考えた私は、昭和五十二年写真屋を帶同して神宮に二度撮影に行つて感激にふるえ撮影原稿とした。そして奉納染筆を保存の為の裏打費用を奉納した。

实物はボロボロになつているのも多く「今にして裏に新しい裏紙を当てねば将来長く保

存出来ないと心配していたので、これなら長く保つから有難い」と神宮側から感謝された。

昔は一般人よりの供物は禁止された程に厳しかった神宮を尊んだ時代に偽の奉納文を奉る事はあり得ない事で、これから見てもこの奉納文はホンモノである。唯、「当時の物ソノママでない」と言うなら、古事記だつて江戸時代の初期に名古屋の真福寺から唯一冊発見されたのが今に至つてゐるのである。これも本物でないと見えようか。然しあくまで紙は違つても原文と内容さえ同じ物であれば価値は同じである。

此の書も千年前の紙は、破れに破れて、百年位に一度誰かに別紙に写し書かれてきたので、現在の物は明治初年頃、新しい紙に写されたものである。

これによると、唯驚くのは「平将門や坂田金時は東国の無学の武将」とのみ思つていたのに、古事記に出る「仁徳天皇の女性關係迄」よく知る位、古代の事を知つていた事である、金時が知つていたのは、主人の源頼光が（資料を深く調査するに）大経済学者で且、大資産家であつた事実があり、「渡辺の綱」と共に古代文字を勉強させられたからであるというのはあり得る事である。漢字渡来後でも古代文字をかく多くの人々が知つていた事実は各方面からの論議を呼ぶ貴重な発見である。

又、稗田阿礼の男女が分らなかつたのが此の書の勢により男であり（二十八才）且、彼が古代文字を書いた事は「上古に文字なし」を覆すと共に、古事記の序文の正しさを語る貴重な発見である。

神宮文庫は内宮と外宮の中間、その大通りに面した独立家屋である。（写真参照）

神宮文庫目録を閲覧したが、二十五万点の中には昔の有名人の日記等埋もれた資料が新発見されて、「歴史の宝庫」であるから此の発刊を機に篤志家は将来続々と資料を求めて行くのがよいであろう。閲覧撮影自由。

何故漢字全盛の時代にわざわざ判り難い古代文字を使つたのか。私が聞いた恩師の靈言によるとこれは日本の神代の神々は、外来宗教と外来文字を嫌われたが故に、神前への奉納文は神の好まれる和文字にしたと察せられる。

日本古代史の泰斗、吾郷清彦先生は拙宅に昭和五十二年来宅され「伊勢神宮古代文字は素晴らしいものだから早く世に出して下さい」と私にすゝめられた。

筆者の年代順は

上限は物部尾興（六世紀）

下限は村井古巣

今より一四〇〇年前

一二〇〇年間のもの

何故古代文字は圧迫されたか。

理由

家康の頃、神主が社を建てられずに慶光院という神宮寺の尼が伊勢神宮の資金を集めて社を建てたことは有名である。全国の八幡宮の神体には「釈迦像」が多い。かく日本人特有の排外思想による儒学の隆盛と仏教の宗教攻勢により（徳川氏が保護した等）お経の漢字は榮え、神道は圧迫され、神道と一体の和文字は根絶やしされたのである。神道の神前祝詞さえ使用するのは漢字丈である。此の出版が世の起爆薬となる事を期待する。

### 「古代文字は何故必要か」

日本文化は、応神天皇の御代、漢字、漢書を輸入し、次に仏典が入つて仏教が伝来し、キリスト教が入り、明治時代に西洋文明が入つて現在の繁栄の基となつたといふ。

然る故、日本精神も、日本をおおつた論語、孟子、朱子学により武士道は肉づけられ、「誠の道も、礼義の道、仁の道」も昔から我々は支那から教えられた事になる。情ないではないか。

之では日本は、科学のみに止まらず、日本精神迄、輸入物になる。然らば、漢書以前日本に個有の精神は無かつたか。否。記紀共に漢字で書かれているが、「神武天皇の即位」に、「一七九萬年前より正しきを養い：云々」とあり、祖神を尊び祀る等日本個有精神はあつたのだ。之を知るには、漢書以前の日本の古書（ウエツフミ等）を知れば分る。それは古代文字で書かれている。それを解読出来ねば役に立たぬ。その故に「伊勢神宮にあるぞ」という事で、神代文字偽造論を吹きとばして、此の文字の真実なるを世に認めさせねばならぬ事になる。「之で日本は個有精神ある国になる」此の為の本書である。

私がこの書を出版するのは私が建し申した「天降り日の宮」の出典が古代文字で書かれているから、出典「ウエツフミ」の真実性を立証するにある。

本書で何故「神代文字」は用いないか。記紀で神武以前を神代としたのは間違いであります。「天孫降臨は靈体で行はれ一七九万年前で、靈体神が現身を持ち給うた初は火火出身命」と塩土翁神は申された。考古学が戦後発達し、十万年前も人類の世であり、神代でない。故に「火火出身命時代たる七十万年前迄」は古代文字でよい事になる。

尚、伊勢神宮文庫長より本書出版の正式許可書を頂いた事は之を弘めよとの神意とはいされる。

私は、マヤ文明とインカ帝国にある古文字が此の書と似てゐて日本から渡つた事を調査する為、五三年二月同所に渡る。

神武天皇の皇兄が御毛入野命が熊野で暴風にあはれてアメリカに行かれたと我道ひらき会の靈言にある。世界の人類は日本から渡つたのであり、日本天皇が世界の天皇であつたという靈言がある。

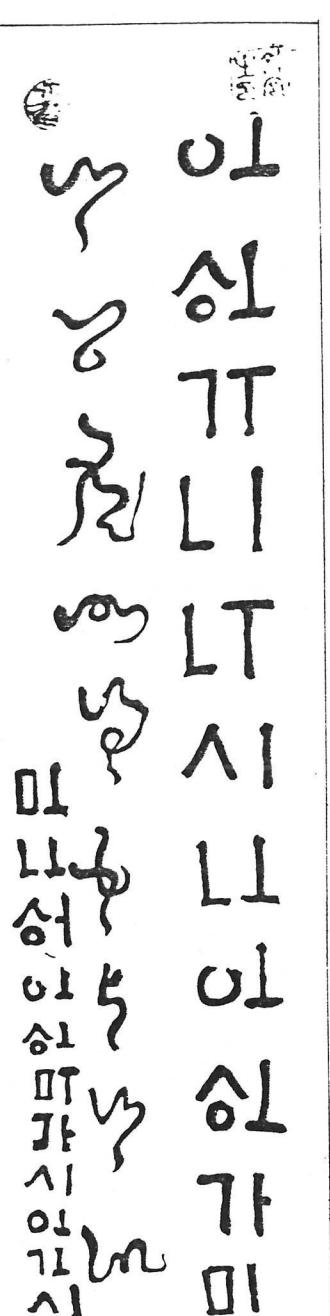
(終)

## 前 篇

### 奉 納 文

神宮文庫所蔵の旧称「かみのみたから」（現・「神代文字」）九十九葉の写真を紹介し、それにおのの「ひらカナ」による読みと漢訳を添え、さらに染筆者または染筆内容についての解説を加えるものとする。

(1) 物部大連尾興（ものべおおむちおこし）（一五三〇一）



「おほくにぬしのおほかみ」（大国主大神）

二行目（アヒルクサ文字）

「すせりひめのみこと」（須勢理昆売命）

三行目（アヒル文字）

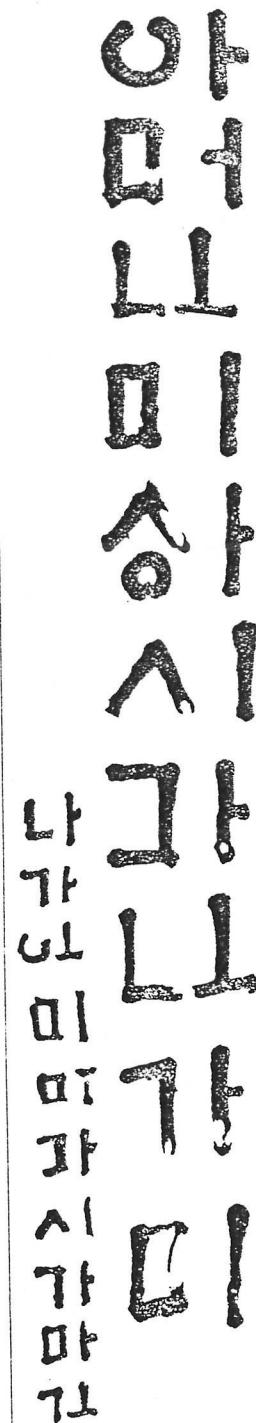
「ものへおうむらじをこし」（物部大連尾輿）原文には（のが一字足りない）

① 物部氏は大伴氏と共に、神武天皇東征いらいの武門の名家である。「日本書紀」によると、欽明天皇の壬申の年（五五二）に百濟の聖明王から、釈迦の仏像と經論が送られたと記されている。このとき蘇我稻目そがのいなめはこれを受け入れて仏像の礼拝を主張したのに対し、大部族の統領たる物部尾輿は日本古来の神々の怒りにふれるとして反対した。のち渡病の流行を機に、物部尾輿の手によつて、寺は焼かれ仏像は廃棄された。伊勢神宮に奉納されたこの古代文字の染筆は、尾輿が仏教調伏の祈願のためのものだつたかも知れぬ。物部氏は後にわが国初めての仏教取捨に際し、蘇我氏と争い破れた。

② 大國主大神||「すさのをのみこと」の御子が六代続いてすべてこの称をもつて呼ばれる。意は「地上の大王」となる。

須勢理昆売命||「すさのをのみこと」の姫神

(2) 中臣連鎌子なかとのむらじかまこ（六一四一六六九）



アヒル文字

「あめのみはしらのかみ」（天御柱神）

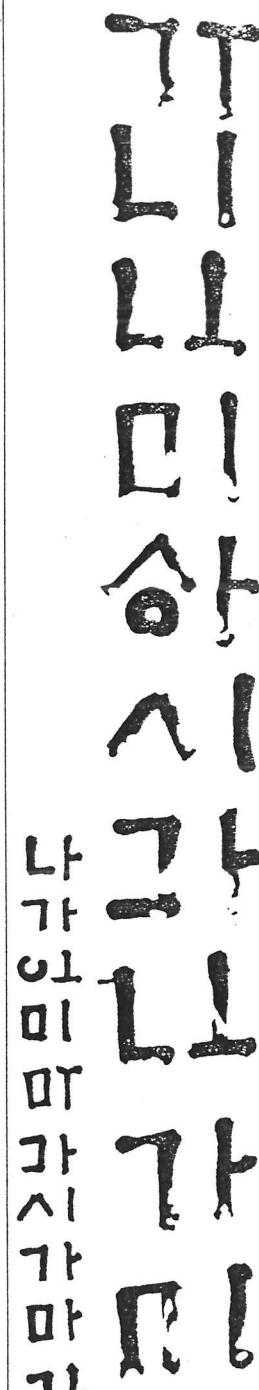
なかおみのむらしかまこ（中臣連鎌子）

① 中臣連鎌子はのちの藤原かまたり鎌足かまたとされている。推古天皇（三三代）二二年に生まれ、長ずるに及んで尽忠の志高く、なかのおおえのみこ中大兄皇子と共に専横の蘇我入鹿父子をたおした事件は史上に知られる。藤原氏の中祖である。（此の六代子孫にも一人鎌子がある）

② 天御柱神、国御柱神は旧官幣大社龍田神社（奈良県）の祭神として有名である。創建

は前一世紀の崇神天皇時代とされている。

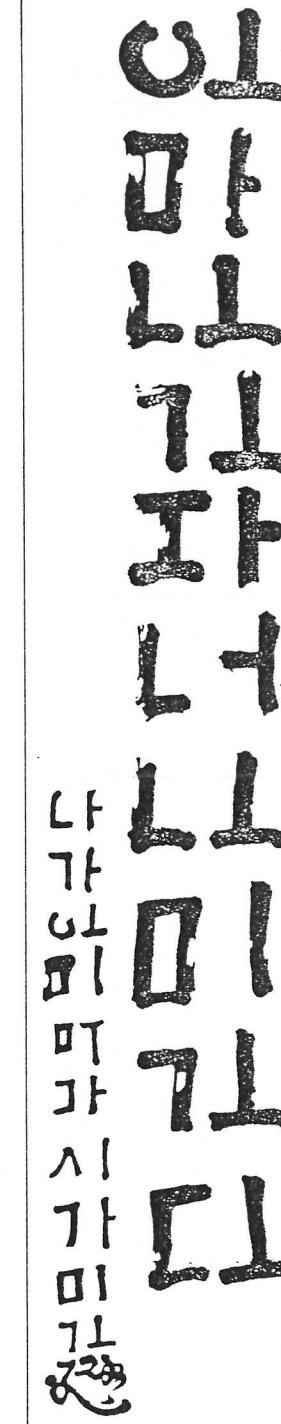
(3) 中臣連鎌子



アヒル文字 「くにのみはしらのかみ」 (国御柱神)

「なかおみのむらしかまこ」 (中臣連鎌子)

中臣連鎌子



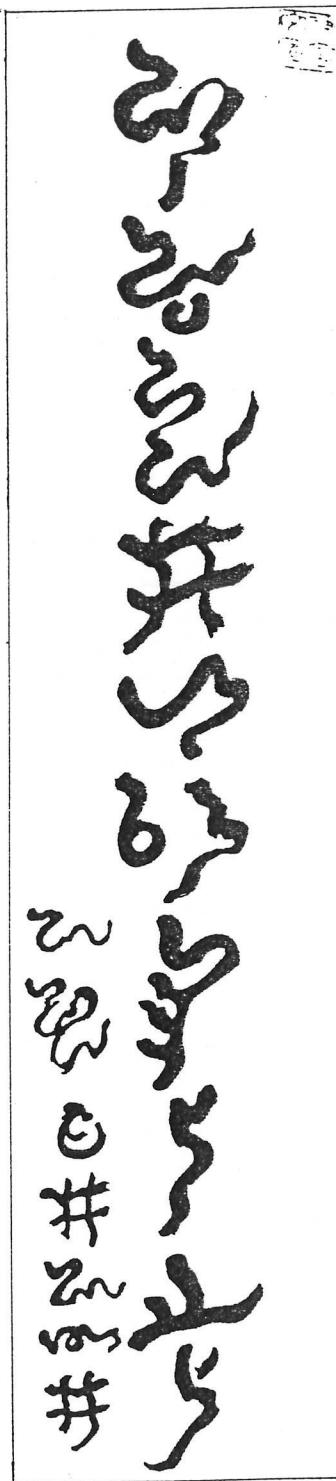
アヒル文字

「あめのこやねのみこと」 (天児屋根命)

なかおみのむらしかまこ (中臣連鎌子)

天児屋根命は天孫降臨の三供奉神の一柱。藤原鎌足は天児屋根命の子孫とされているので、みずからのお祖神を祀つたものでもあろうか。

(5) 藤原不比等 (六五九一七二〇)



アヒルクサ文字

「あまでらすおほみかみ」 (天照大御神)

ふしほらふひら (藤原不比等)

(6) 藤原不比等



アヒルクサ文字

〔月夜見力社〕

（前歴不詳）

の大宝律令の制定に功があつた。父と共に、摂政関白家としての子孫繁栄の基礎を築いた人物である。なお、従来の歴史では不比等は「ふひと」と呼び慣わされているが、ここでは古代文字をもつて「ふひら」と書いている。これは注目に値することで、もしこの書が偽作なら、このようにわざわざ一般の慣習に逆さからつた書きかたをするわけがない。不比等

自身の手になることを功を克して説明するやうのといふ  
「つきよみ」を間違つて書いたものであろう。後に吾郷先生が神字彙（文献表）によりよが  
太明正安麻呂（一七二二）  
おおのあそんやまとろ

(一) 五言律詩

太朝臣安麻呂

アヒルクサ文字

「またあかあし　みへのまかりなして　いたくつかれたり　とのりたまひきかれそこを  
みへといふ」（また吾が足、三重の勾まかりなして、いたく疲れたり、とのりたまひき、かれそ  
こを三重といふ）

アヒル文字

「やまとほこあまつみしろとよくむなりひめみこと」（大和穂子天津御代豊くむ成昆壳命）

つちえのさる（戌申）和銅元 十月記太朝臣安麻呂

「古事記」の中の日本武尊やまとたけるのみことの一節である。「わたしの足は三重にねじ曲げたモチのようになつて、ひどく疲れた」とおっしゃった。そこでその地を「三重」というの意味。「大和根子天津御代豊国成昆壳天皇」とは、四三代元明天皇のことである。太安麻呂は人も知る「古事記」（和銅五年）の編さん者である。彼は中国より帰化した漢学者で、古事記のもととなつた「帝紀」「旧辞」を解読できないため、稗田阿礼ひだのあれという通訳者を必要としたのであつた。このことは「古事記」の序文で安麻呂自身が書き記していることである。安麻呂の読み得なかつた文字が、日本固有の古代文字であつたことは論をまたない。

(8) 一品 舎人親王いつばん とねりしんのう

ノアヌルニミタクメリツハヘトミタクシテ  
ソレモニタクムタクムタクムタクムタクムタクム  
ノアヌルニミタクメリツハヘトミタクシテ

【品舍人親王】

アヒルクサ文字

「いのちのまたけむひとはたたみこもへくりのやまのくましかはをうつにさせそのこね」

（生命の全けん人は 畠薦たたみこも 平群の山の 熊白櫛が葉を 髪華うずに挿せ その子ね）

一品 舎人王

舍人親王は天武天皇の皇子の一人であり、元正天皇の養老四年（七二〇）に「日本書紀」

の編さんを完成したことは周知のことである。

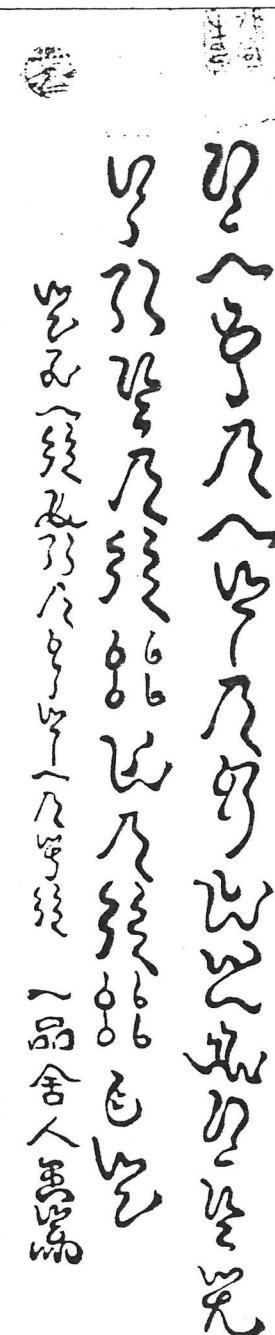
この歌謡は「古事紀」や「日本書紀」に出てくる 日本武尊やまとたけるのみこと のうたつたもので「大和は國の真秀まほ ろば畠たたなづく青垣山籠こもれる 大和しうるはし」の一節につづく部分である。

兄の大確命おうすあなごとを殺したために、父君・景行天皇（十二代）の勘気にふれた日本武尊は、西國の熊襲くまそらの討伐を命ぜられる。それを果たして帰ると、さらに東國の蝦夷平定を命ぜられた。

そして尊は東国平定を終わって帰還の途中、伊吹山の難に遭われついに能褒野三重県・鈴鹿に倒れた。もはや命も絶えんとするとき、恋しい故郷を夢幻のうちに口誦さんだのが、

この前後の歌である。舍人親王は、当時の日本武尊を偲んで、ここに由緒ある古字で染筆したのである。

(9) 一品 舍人親王



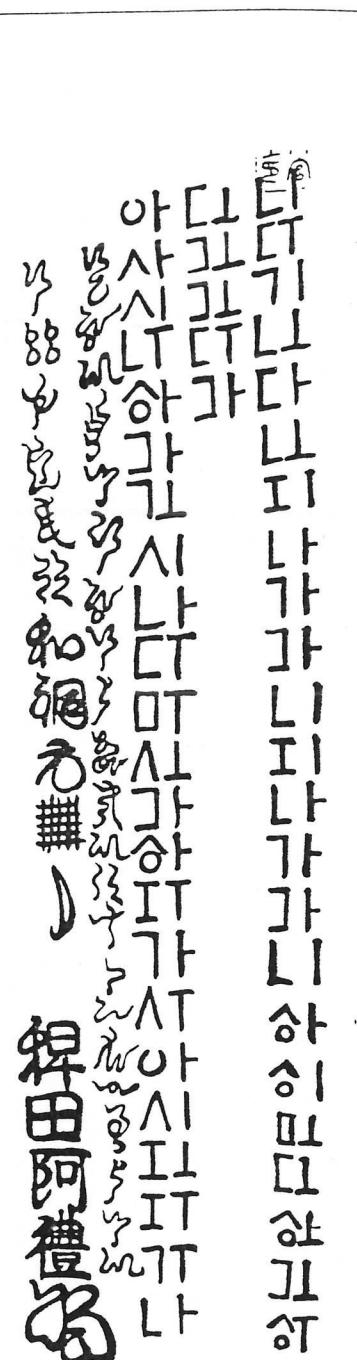
アヒルクサ文字

「おとめのとこのへに わかおきしつるきのたちそのたちはや」（乙女の床辺に 吾が置きし剣の太刀 その太刀早や）

「やまとたけるのみことのうた」（日本武尊の歌） 一品舍人親王

日本武尊はいよいよ死期が迫つても忘れられないのは、尾張の宮路姫のところに預けてきた。かの草薙剣である。早くその剣を持参せよ……とうのである。

⑩ 稗田阿礼（六四七一七一四）



アヒル文字

「なつきのたのいなからに いなからにはひもとろふとろろつら あさしぬはらこしなつむそらはゆかすあしよゆくな」（なづきの田の稻稈に いながら 稲稈に這いもとろふ葛 浅篠原腰泥む 空は行かず 足よ行くな）

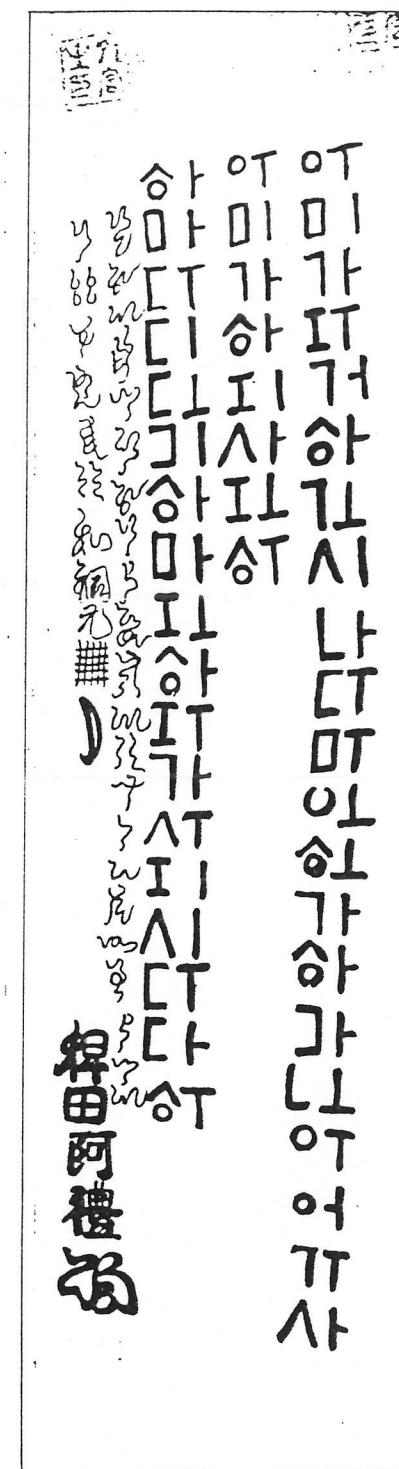
アヒル草文字

「やまとほこあまつみしろとよくになるひめみこと」（大和穂子天津御代豊国成昆壳天皇）  
「つちのへさる」（戌申）和銅元刀稗田阿礼花押

この歌は次項の歌と共に、前出の舍人親王の書いた歌のつづきの部分にあたる。日本武尊の計報に、后や御子たちは能褒野に駆けつけた。しかし彼らが到着したときは、尊の亡骸はすでに田んぼの中の墓に埋められていた。

悲嘆の涙と共に、后は稻がらに足をとられつつ墓の周囲を這いまわるようにして、口ずさんだのがこの歌である。このとき日本武尊の御魂は、白鳥と化して墓から飛び去った。これを見た后たちは妾らは空は飛び得ずと、泣きながらそのあとを追うのであつた。

(1) 稗田阿礼



「うみかゆけはこしなつむ おほかはらのうえくさうみかはいさよふ はまつちとりはまよはゆかすいしつたふ」（海処行けば腰泥うみがむ 大河原の植草 海処がはいざよふ 浜千鳥浜よは行かず石伝ふ）

アヒルクサ文字

「やまとほこあまつみしろとよくむなるひめのみこと」（大和穂子天津御代豊くむ成昆夷天皇）

「つちのへさる」（戊申）和銅元年 稗田阿礼

これまでご紹介した太安麻呂、稗田阿礼の染筆の年を見ると和銅元年となつてゐる。

この年は「古事記」が朝廷に献上された、和銅五年をさかのぼる四年前である。そして、彼らの書はアヒル文字、アヒルクサ文字の古代和字二種と漢字を混えて書かれている。

古代和字で書かれた文書を、阿礼の通訳を通して漢文訳していくた安麻呂は、みずからも古代和字を身につけていったことであろう。それが、これらの染筆文字となつて現われたものと解される。

天平神龍元年  
三月  
道鏡法師

応神天皇 御姿図



天平神龍元年三月

大政大臣 道鏡法師

在於彼寺經律論並章疏傳  
等之目錄是上

右被今月六日內宣傳

件經律等目錄暫時

令請者今依宣旨

差堅子上名麻呂

充使令奉請具狀

故牒

道鏡 上君麻呂を東大寺一切經司所につかわし、經律論と卓  
トめたもの。大抵の畠書を除いて、道鏡の自筆。奈良・正倉

弓削道鏡はその専横によつて史上に  
名高い。称徳女帝の寵によつて、つい  
には法王の地位につき、天皇にもひと  
しい待遇をうけ、その権勢は朝野を覆  
つた。のちに宇佐八幡の神託と称して、  
天皇の位にのぼることを望んだが、和  
氣清麻呂の受けた宇佐八幡の神託によ  
り、その野望を断たれたのは有名な事件  
である。

神宮文庫の所蔵する「かみのみたか  
ら」なる九十九点の日本古代文字群の  
中に、この道鏡の書いた漢字のみの書  
がただ一点混つてゐるのである。そし  
てその筆跡は、歴史書などで紹介され

る正倉院所蔵の道鏡の筆跡と一致していれば神宮文庫所蔵が真筆であることを証明している。紅一点ならぬ漢字一点が、他の古代和字の真実性を、一段と浮き彫りにしていることは注目されるところである。

添付の道鏡の書は、奈良正倉院所蔵品である。その署名と本書の古代文字の署名とを比較してみていただきたい。正倉院には一万二千点の物がある。

(13) 左衛門尉 藤原千常

さと止みやせたん止ひみれにやうりふア  
止み色ひるや井もみれむ自と止めぬ  
ほく井やけぬいの井みすへどもれぬるよ  
壁聞藤原千常謹書

「こはあかみこころそ かれおほたたねこもて あかみまへお まつらしめたまはは  
かみのけをこらす、くにたひらきなむとのりたまひき」（斯は吾が御心そ 故 大田田  
根子命もて 吾が御前を祭らしめ給はば 神の氣起こらず 国平らきなん と詔り給ひき）

縦五位下 左衛門尉 藤原千常謹書

藤原千常なる人物については不明である。この一文は「古事記」の崇神天皇（10代、BC 93）のくだりにある、大物主の大神のお告げの言葉を書いたもの。崇神天皇の御代に国内悪疫の大流行で、おほみたから（国民）が大部分も死んだ。天皇は心配され斎戒沐浴なさつて、神意を伺つたのである。

大物主神は「吾が子孫の大田田根子命もて吾を祀らしめよ 然らば国は悪疫はおさまり、  
平らかにならん」と仰せられた。ここから旧官幣大社大神々社（大三輪神社）の創建となつたのである。

(14) 和氣清麻呂（七三三一七九九）

디한타미안나리다만파도나타(아가고타)가  
이스(이스)트타나-이스(이스)트나-이스(이스)트나-이스(이스)  
코(코)트타나-이스(이스)트나-이스(이스)트나-이스(이스)  
아(아)트나-이스(이스)트나-이스(이스)  
아(아)트나-이스(이스)트나-이스(이스)

「とうつみおやのみたまよよのおやたち うからやからのみたまにのほりて かえり  
ことまをしひのわかみやにとどまりき」

「わけきよまろふみ」

（遠つ御祖の御魂 世々の祖達 親族家族の御魂 天に上りて言申し 日の若宮に止まり  
き うからやから）

（和氣清麻呂記）

（15 和氣清麻呂）



和氣清麻呂

「わかみかとは あめつちはしめよりこのかた きみとやつことさたまれり」（吾が朝がみが

廷は天地の始めよりこの方 君と臣民と定まれり）「和氣清麻呂」花押

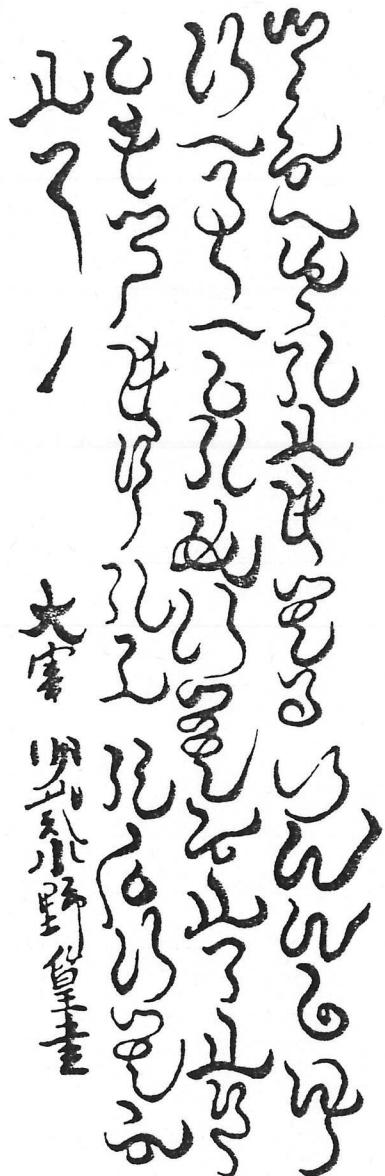
称徳天皇の命により、道鏡が天皇の位を望んだのにについて宇佐八幡の神意を伺うため清  
麻呂は豊前に下向した。清麻呂の至誠神に通じてか、一丈余り（3m余）の神のお姿が現  
われ給い、このお告げがあつた。

「日本は天地始まつてより、天皇と臣下の別は嚴然としている」とのご神意である。  
神意のままを天皇にお伝えした清麻呂は、道鏡の怒りを買ひ、その名も別部穢麻呂と改  
められ、大隅の国（鹿児島県）に流罪となつた。しかし、道鏡失脚後は召還されふたたび  
忠勤に励んで各種大臣に就任し、後世から大忠臣として尊崇をうけたことは周知の通り。

（16

太宰小式

小野篁



太宰小野篁

「やまとのかさしぬを ななゆくをとめとも たれをしまかむ かつもいやさきたてる  
えをしまかむ」（大和の高狭地野を なな行く乙女共 誰をし求かむ 数もいや先き立  
てる兄をし求かむ）

「太宰小弐 小野篁」

小野篁は、嵯峨天皇の御代のすぐれた漢詩人の一人として名高い。この文は古事記から  
の引用で神武天皇が大和地方を平定したあと仲人役の久米命の案内で、皇后を選びにいが  
れたときの情景である。

大和の高狭地野を並んで行く数人の乙女の中の誰がお気に召しましたか」という大久米  
命の問いに、「一番先に立っているすぐれた娘を妻にしよう」と天皇が答えたのである。

(17) 太宰小弐 小野 篁たかひら

天長九年十一月太宰少弐小野 篁

「あめつづちとりましとと なとさけるとめ」「おとめにたたにあはむと わがさけるとめ」

(天地ちどりましとと 何ど開ける利目)

(乙女に直に会わんと 我が開ける利目)

天長九年十一月太宰少弐小野 篁

古事記の中の前項のつづきの部分である。天皇のご意志を伝えに行つた。

久米命の大きな奇目を見て、乙女はおどろき「天地の千人に勝ぐれたあなたはなぜそん  
なに目が大きいのですか?」とたずねた。久米命は「あなたを探し出そうと思つて、目が  
こんなに大きくなつたのだ」と答えたのである。

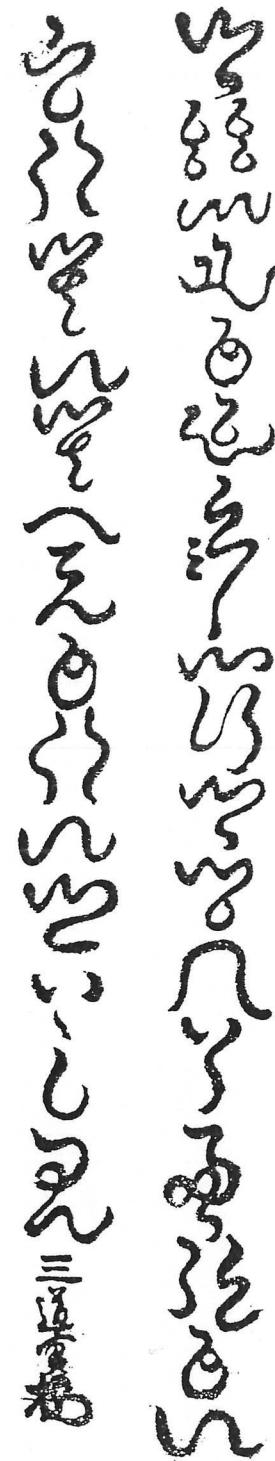
(18) 菅原真道すがはらまみち（八四六一九〇三）



そして五十六歳のとき、左大臣藤原時平ときひらと並んで右大臣となつたのである。当時までに学者出身で大臣に進んだのは、道真のほかに吉備真備きびのみまきだけだつた。

しかし道真は右大臣就任後間もなく時平のざん言にあい、醍醐天皇の命で九州太宰府に左遷され、わずか一年後に憤死した。

(21) 菅原道真



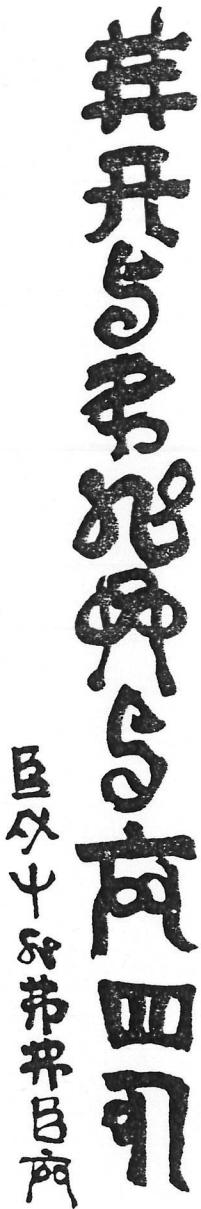
「こちふかは◎にほひおこせよむめのはなあるしなしとてはるなわすれそ」（東風吹  
かば 勻いおこせよ梅の花 主人なしとて春な忘れそ」

「三道真 梅」

これは天下に有名な和歌である。

道真の死後、時平以下何人が早死にしたり雷に打たれて死んだり、また世間ではひでり長雨がつづいたりしたことが、いつしか菅原道真の靈の仕わざということになり、その怒りを鎮める意味でのちに道真の靈を北野天神に合祀するようになつた。やがて太宰にもその天神が勧請かんじょうされ、数十年後には道真に対し太政大臣の称号がおくられた。後世道真是学問の神として、全国各地の天神様に受験生の参詣が絶えないのは、ご承知の通りである。

(22) 藤原忠文（八七三一九四七）



イヅモ文字

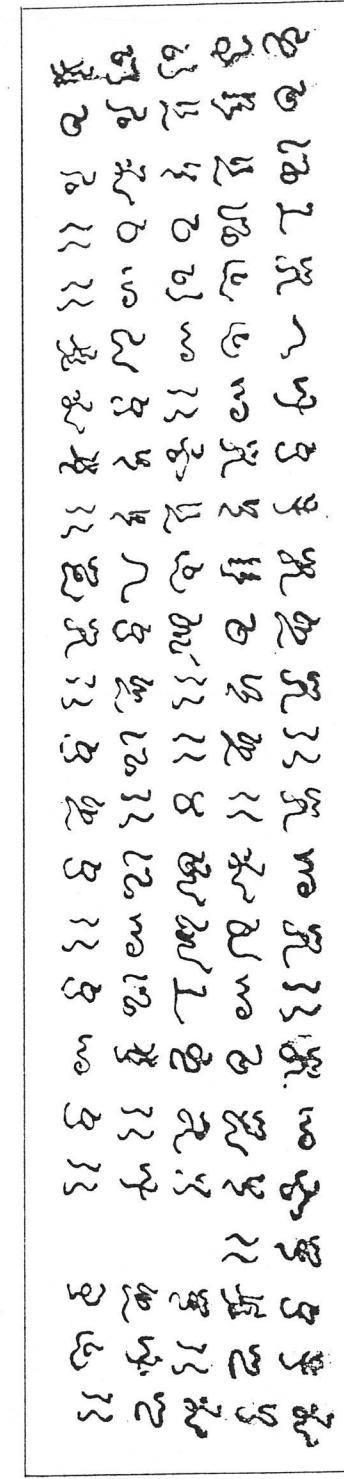
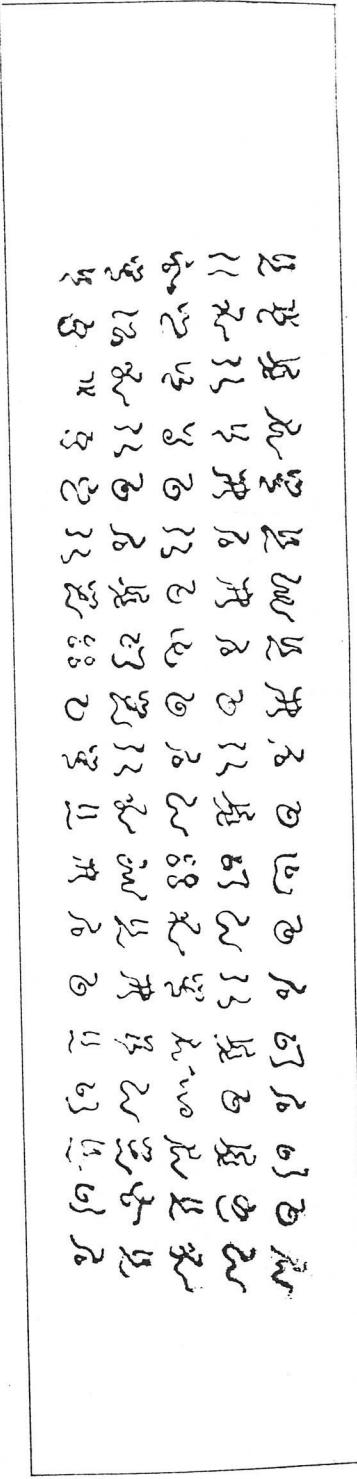
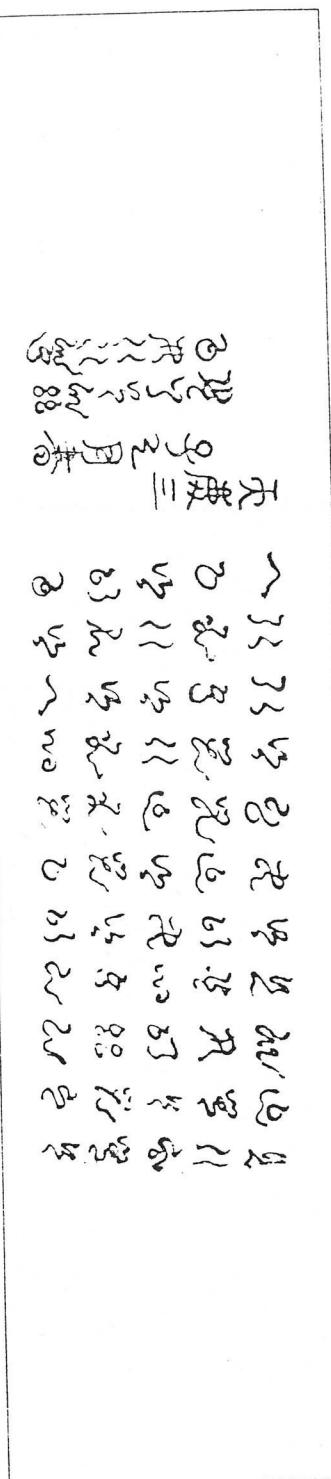
「あまのうすめのみこと」（天宇受命）

「ふしはらたたふみ」（藤原忠文）

藤原忠文は平安朝期の公卿である。参議藤原技良の三男に生まれ、十七歳で内舎人として勤務、以後累進して朱雀天皇（六十一代、九三九年）天慶二年に参議を務める身となつた。時に平将門の半乱が関東に起り、征東大将軍としてただちに出発したが、現地到着前に鎮定されたので引き返した。

また天慶四年、関西方面で藤原純友が半乱を起こした。藤原忠文は征西大将軍に任じられ出發したが、このときも到着前に賊が平定され中途より帰還した。こうしたことから、忠文は二回も出陣しながら一片の論功行賞にもあづからなかつた。その死後、不祥事が相次いだため、「悪靈民部」として人々に恐れられた。

(23) 藤原忠文



「かむかせの

いせのくに  
まきむくの  
ひしりのみ  
やたけのね  
みやまさ

はほつえは  
おへりほつ  
らははしも  
へのこかさ  
こをろこを  
ともこをは

うた」（神風の伊勢の国  
三重采女歌）

みへうねめ  
やはあさひ  
のひてるみ  
やゆうひの  
ひかけるみ  
ねはるみや  
やほによし  
いきつきの  
とひなへ  
やにおひた  
てるももた  
るつきかへ

えはひなを

はあつまを  
おへりしつ  
はなかつえ  
ふらはへし  
つたまうき  
ふらははあ  
つけのえの  
にうきしあ  
ふらおちな  
つさひみな  
あやにかし  
こしたかひ  
のみこと  
のかたりこ

みへうねめ  
やはあさひ  
のひてるみ  
やゆうひの  
ひかけるみ  
ねはるみや  
やほによし  
いきつきの  
とひなへ  
やにおひた  
てるももた  
るつきかへ  
えはひなを  
はあつまを  
おへりしつ  
はなかつえ  
ふらはへし  
つたまうき  
ふらははあ  
つけのえの  
にうきしあ  
ふらおちな  
つさひみな  
あやにかし  
こしたかひ  
のみこと  
のかたりこ

（以下漢訳）

纏向くの

聖の宮は

根垂る宮

朝日の  
夕日の

日照る宮

根蔓る宮

檜の御門

日翳る宮

い杵築の宮

真木栄さく

木の根の

竹の根の

新嘗屋に

八百丹よし

根蔓る宮

百も足る

木の根の

根蔓る宮

百も足る

八百丹よし

い杵築の宮

上つ枝は

木の根の

竹の根の

中つ枝は

八百丹よし

根蔓る宮

下つ枝は

木の根の

竹の根の

上つ枝の

八百丹よし

根蔓る宮

中つ枝に

木の根の

竹の根の

中つ枝の

八百丹よし

根蔓る宮

天慶三 子辰月書

木の根の

竹の根の

「さぬき

木の根の

根蔓る宮

（讀岐 藤原忠文）

木の根の

竹の根の

この歌は、古事記の雄略天皇の項に出てくる、三重の采女の歌つたもの。天皇が長谷の  
楓の大樹の下で酒宴をされたとき、伊勢の三重から出た采女<sup>うねめ</sup>が酒盃<sup>さかずき</sup>を捧げた。ところが楓

の葉が落ちて、酒盃に浮んだのに気づかなかつたため、天皇はその采女を打ち伏せ、御刀でその首を斬ろうとされた。采女は「私を殺さないで下さい。申し上げることがござります」と言つて捧げたのが、この歌である。天皇は之で機嫌をなおされ、采女を貰めてたくさんの中品物を下さつたのである。

(24) 小野道風（八九六一九六六）

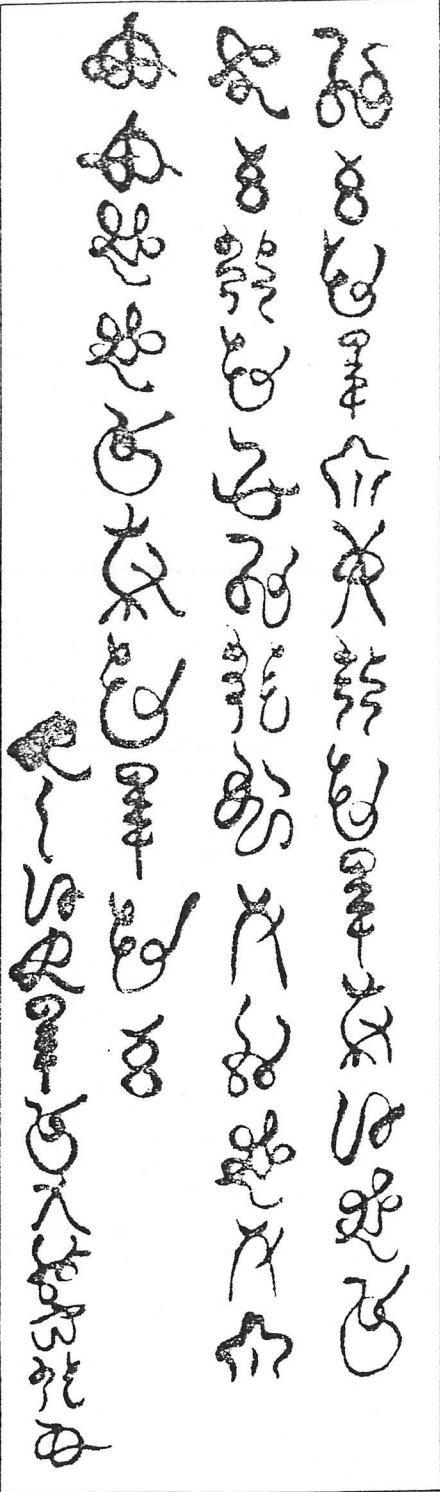


タネコ文字

「くにの そこたちのかみ」（国底立神）  
「おのみちかせ」（小野道風）

小野道風は小野妹子の遠孫で、一族には学者が輩出している。前出の小野篁もその一人である。平安前期の「三蹟」の一人として、その流麗な平がな書きは、天下を風靡した。「國の底立神」は古事記ではなく、書紀には「國の常立神」の別名となつてゐるが、これは豊雲野神の神々の世の末に地球の地殻を成して固まつた地球の初めの祖神である。

(25) 平滝口将門（一九四〇）



タネコ文字

「このみきは わかみきならす くしのかみとこよにゐます みはたたす すくなみきみ

の」（この御酒は 吾が御酒ならず 神酒かみの司 常世に坐す いはたたす 少名彦神の）

「たひらのたきくちまさかと」（平滝口将門）

天慶二年（九三九）から三年にかけて、関東一円を席捲した平将門の半乱は史上に名高いが、その将門も若い一時期を京都に過ごしたことがある。当時最高の権力者・藤原忠平を頼つて、禁裡きんりの衛士（御門番）として二年半勤めたのである。彼はこの間に認められて、武士として名誉な清涼殿の東北の滝口を警備する役に廻されている。書の署名に「平滝口・將門」とあるのは、そのためであろう。

彼は故郷の茨城に帰るに当つて、忠平から相馬御厨みやりやの下司げすに任じられた。「御厨」とは、伊勢神宮の神領及び屯倉を司どるところである。彼はその感謝の意味も含めて、帰郷の途次に伊勢神宮に参拝し、この書を奉納したのである。

なおここに書かれた歌謡は、「記紀」の神功皇后の項にある。皇后が朝鮮平定から凱旋され、宮中で大祝宴を催したとき歌われたものである（次項の歌も同じ）。「この酒は、常世の国においでになるお神酒みきの司神、厳かに立つていらつしやる少名彦神が、お造りになつた」との意である。

(26) 平将門



タネコ文字

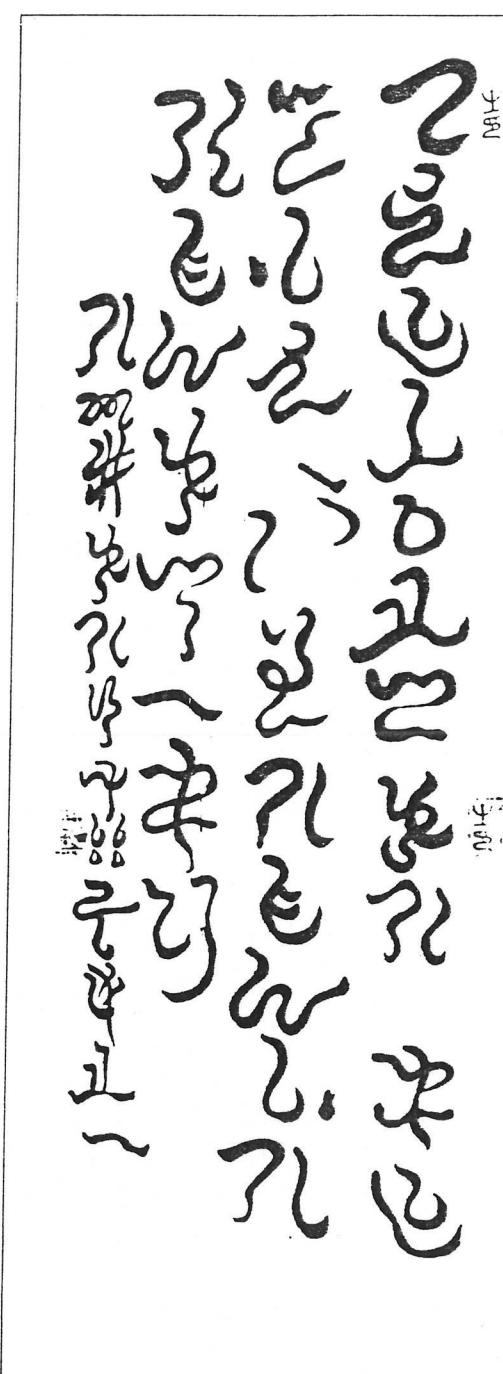
「かむほきほき くるほし とこほきほき もくほし まつりこしみきそ あさすおせ  
ささ」（神 寿はき寿はき 狂はるほし とこ寿はき寿はき もくほし 奉はりこし御酒ぞ あさず飯  
せ ささ）（平滝口将門）

前項につづく神功皇后の御歌である。

「これを捧げれば神もよろこび給い、もろもろの邪氣をはらう故に、長寿にも通じる靈薬である。さあ、繰りかへし繰りかへし、飽くほどゆつくりこのめでたい御神酒を召し上が

りなさい。さあさあ、充分に間をおかずお飲みなさい」というふうに解せられる。

(27) 平将門



アビルクサ文字

「よそにても かせのたよりに われそとふ 猛たはなれたる はなのやとりき」

「たひらのたきくちまさかと」

（よそにても 風の便りに われぞ問う 枝離れたる 花の宿り木）

（平滝口将門）

平貞盛の妻が将門軍に捕えられたとき、将門は彼女をあわれんで衣一襲きぬひとときをさね与え、この和歌を贈つたことが、中山茂著「真説・平将門」に紹介されている。氏の著書には「われは問う」となつてゐるが、この染筆には「われぞ問う」なのでそのままにしてある。

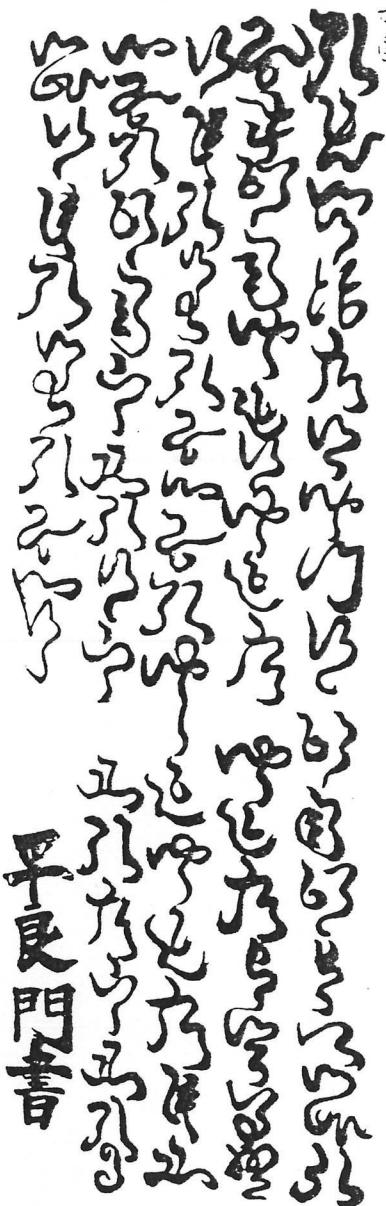
将門の和歌の返礼として貞盛の妻は

「よそにても 花の匂いの 散りくれば 吾が身わびしと おもほえぬかな」と贈つてよこしたそうである。

なお、平将門といえば、戦いしか知らぬ叛乱の荒武者のように、世間では考えられ勝ちである。しかし前記の「記・紀」からの引用といい、また自作のこの和歌といい、そして、タネコ文字、アビルクサ文字などの古代文字を心得ていた点など、ひとかどの教養人であることが察せられるのである。

此の奉納文が真実性のあるのは、此の伝記からも立証出来るのである。歴史では反乱した」となつてゐるが、神と朝廷に忠誠であり、此の書より反乱は嘘と判る。将門の祟りがあるのは口悔しいからで当然である。

(28) 平良門



平良門書

「たけうちのすくねをおほおみとしたまい おほくにをくにのくにのみやぬしをさためたまひ またくにくにのさかひまたおほあかたをあかたのあかたぬしを さためたまひき」

「平良門」

(武内宿禰あがたを大臣おほきにとし給をくにい 大国おほくに小國をくにの國の宮主をくにを定め給をくにひ また国々の境 また大縣おほあがた小縣あがたの県主をくにを定め給をくにひき)

(平良門)

この一文は、古事記の「成務天皇」の項にあるもの。平良門よしがたは平将門の子といわれ、その物語りは淨瑠璃や歌舞伎に脚色されている。

(29) 平良門



平良門

「いつまでもよにありあけの かひもなくて つきもいるへに かきりすなあれ」

「やつしらすきるにてしむ」 「平良門」 (吾鄉先生は八州統やつすべる二弟者にてしやと訳した。)

(何時までも 世に有明の 甲斐もなくて 月も入る辺に かきりすなあれ)

(翻訳 不明)

(平良門)

(30) 平貞盛（一九四〇）

平貞盛（

କାନ୍ତିର ପଦମାଲା  
କାନ୍ତିର ପଦମାଲା

「やましろにいしけとりやまいしけしけ」

「あがむうつまで」の「うつまで」は、うつの「うつ」と「まで」の「まで」を意味する。

(山背に  
い及け鳥山  
いしけしけ

吾が思う妻に  
いしき会わんかも

奇しき因縁を感じないではいられまい

でも、うものである。

天皇二二年に「八田<sup>やた</sup>皇女<sup>ひめみこ</sup>を妃<sup>ひ</sup>に入れたい」と皇后に相談したが、受け入れられなかつた。そして九年後、皇后が宮中を留守にしたとき、天皇は八田皇女を姫とした。これを聞いた皇后は宮中に帰らず、山背<sup>やましろ</sup>に向かつた。おどろいた天皇は、ただちに鳥山<sup>ねとり</sup>という舍人<sup>ねどり</sup>に「早く山背に行け、吾が心情を伝えて、いとしい妻を連れもどすように」と皇后のもとへ急がせたのである。

(31)

「つきねふややましろかわを みやのほりわかのほれは あをによしならをすき をたて  
やまとをすき わかみかほしくにはかつらき たかみやわかへのあたり」

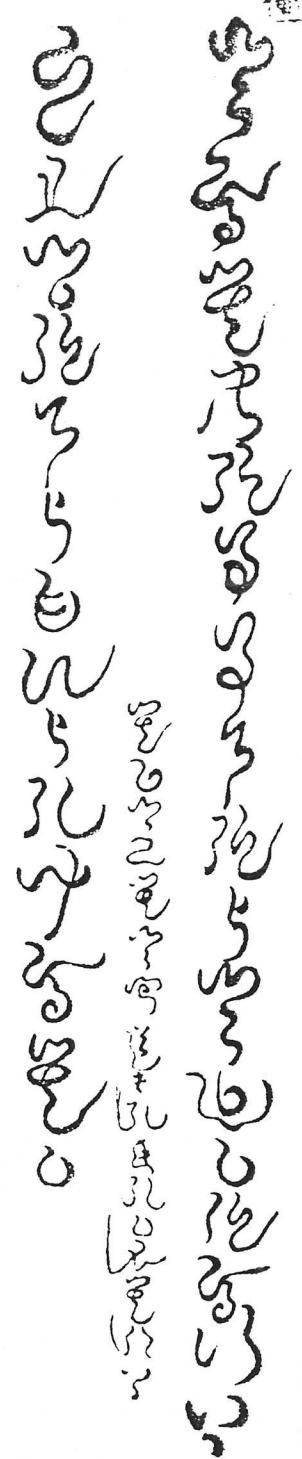
「しゆこゑしやう へいのさたもりしるす」

(次嶺径や 山背河を宮のぼり、我がのぼれば 青丹よし 奈良をすぎ 小楯 倭をすぎ  
我が見か欲し国は葛城 高宮 我が家のあたり)

(徒五位上 平貞盛記す)

仁徳帝が八田皇后と戯れていると聞いて怒った磐之姫皇后は、父母のいる故郷へと船を  
向けた。そしてこのように歌つたのである。「山背河をのぼれば うるわしの奈良を過ぎ  
青山の囲む大和を過ぎ わたしの見たい 葛城の高台の御殿 わが家のあたりにきました」

(32)  
平貞盛



「やましろの つつきのみやにものまおす あかせをみれば なみたくましも」

「しゆこゑしやう へいのたたもりしるす」

(山背の 简城の宮に物申す 吾が兄を見れば 涙ぐましも) (徒五位上 平貞盛記す)

皇后はその後、都に還つたが天皇とは別居して简城の宮に住んでいた。天皇は「口持の  
臣」を皇后のもとにつかわした。しかし皇后は会おうとせず、臣は「ご返事を聞くまでは」  
と、雨の降る庭先に朝まで坐つていた。

そのとき、皇后の侍女だった臣の妹の国依姫が、悲壮な兄の様子を見かねて皇后に申し

上げたのである。「皇后様 兄があまりにも可哀そうです」。事情を知つて皇后は、臣に返事を与えて帰したのである。

(33) 秀鄉母多喜能

—やまとこのたけちに こたかるいちのつかさ にひなへやにおいたてる  
つまつはき そのはのひろりなすそのはなのでりいまたかひかるひのみこに  
たてまつらせ ことのかたりこともこをは はひろゆ  
とよみき

天慶二年四月 しもつけのけのくにまもる ふちはらひてさと  
（大和の この高市に 小高る 市の高処 新嘗屋に 生ひ立てる 葉広 斎つ真椿

其の葉の 広りなす 其の花の 照り坐す 高光る 日の御子に 豊御酒 献らせ 事の語  
(り言もこをは)

(天慶三年四月) (下野の国守る秀郷母多喜能記す)

この歌謡は前記の藤原忠文の引用した「詰絶」の文書に基づくものである。一方で、藤原秀郷（田原藤太）のことと、平将門を討つた功績により下野武藏の国守となつた。

この歌謡の内容は、三重の采女が雄略天皇に斬られるところを才智によつてのがれ、祝宴は再びたけなわとなつたので、皇后若草壁王が天皇を讃えて歌つたのである。

「高光る日の御子」すなわち天皇に、「喜びの御神酒を早く早くさし上げなさい」と皇后がはしゃいでいるところである。

(34)

秀鄉母  
多喜能

原之子也。其子曰平叔，字子安，有文才，善属文，著《孝子传》。

ももしきの  
おおみやひとは  
うつらとり  
ひれとりかけて

けふもかも  
さかみつくらし  
たかひかる  
ひのみやひと

このかたりこともこをは

しもつけのくにまもる  
ふちはうをはう  
ひてきよ  
まほ

百しきの大宮人は

مکالمہ  
دعا

今日  
一

事の語り言葉を以て

(元慶三生四月)

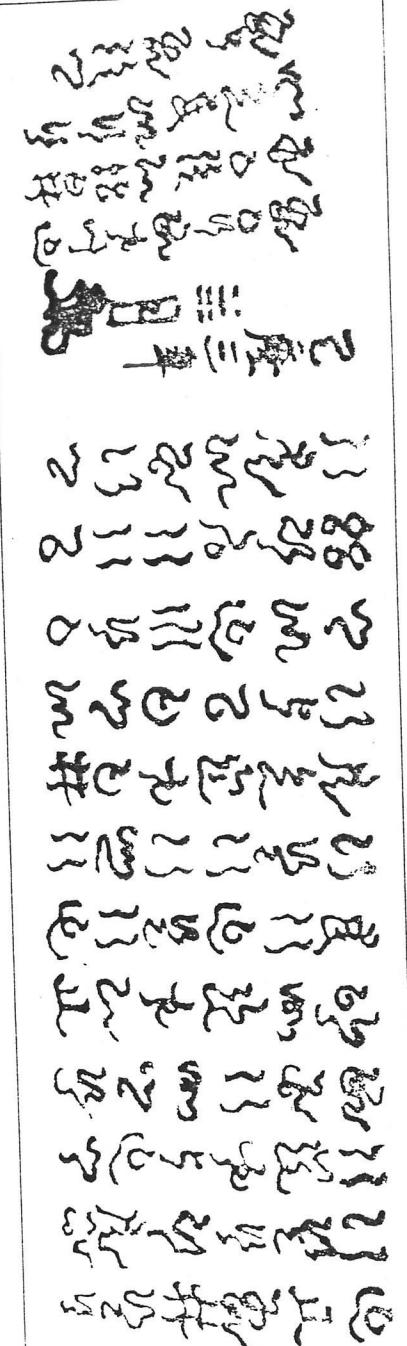
卷之三

この歌は、前記の皇后の天皇讃歌にこたえて、天皇がみずから治世をたたえたものである。「都の人々は今や平和そのものにして、鵠鴨のように美しい着物を着て、色とりど

の櫻桜を交錯させ、往々リ一株より

藤原秀郷（生没年未詳）

-58-



またいましの なくゆゑはな  
すめはもとよ りやおとめあ

にそとひた  
りきここにこ  
ふとるいまと  
す

まへはあかむ  
しのやまたお  
もきぬへきと

ろちともとし ことにきてく  
きなるかゆえ にくとまを  
そのかたちは いかさまにか  
あかかかちな してみひとつ  
たそのみにこ けまたひすき  
をやををわた りてそのはら  
ちあえたたれ たりとまをす

ととひたまへ  
にかしらやつ  
おひそのなか  
をみればこと  
ことにいつも

はそれかめは  
をやつありま  
さたにやたに  
ことにいつも

### 「天慶三年三月花押」

しもつけのくにまもる ふちはらひてさと つつしみしるす

(亦 汝の泣く故は 何ぞと問い合わせへば  
此所に高志の 八俣の遠呂知とも)

今ぞも来ぬべき 時なるが故に

その形は

身一つに頭八つ

其の長さ谷八谷

血相え爛れたり

(天慶三年三月 花押)

(下野国守る 藤原秀郷 謹み記す)

これは記紀にある、須佐之男命のヤマタノオロチ退治の一節である。

藤原秀郷は下野国（現在の栃木県）の住人で、もとは俵藤太秀郷と名のつていた。犯罪

者を捕える押領使の役をしているとき、平貞盛と組んで将門を滅ぼし、下野・武藏両国の国司、鎮守府將軍となつた。琵琶湖畔の三上山で百足退治をした英雄として、歌舞伎などで上演される人物である。

この一文の日付が「天慶三年三月」となつてゐるが、前出の母親・多喜能の日付は四月である点とくらべると、秀郷のほうが早くから神宮奉納のために、この書を用意をしていたことが察せられるのである。

(36) 俵藤二宗郷



「あめのいはとわけのみこと」

「たはらとうしむねさと」

(天岩戸別命)

(俵藤二宗郷)

(37)

俵藤二宗郷



「ゆみやのおほみかみ」

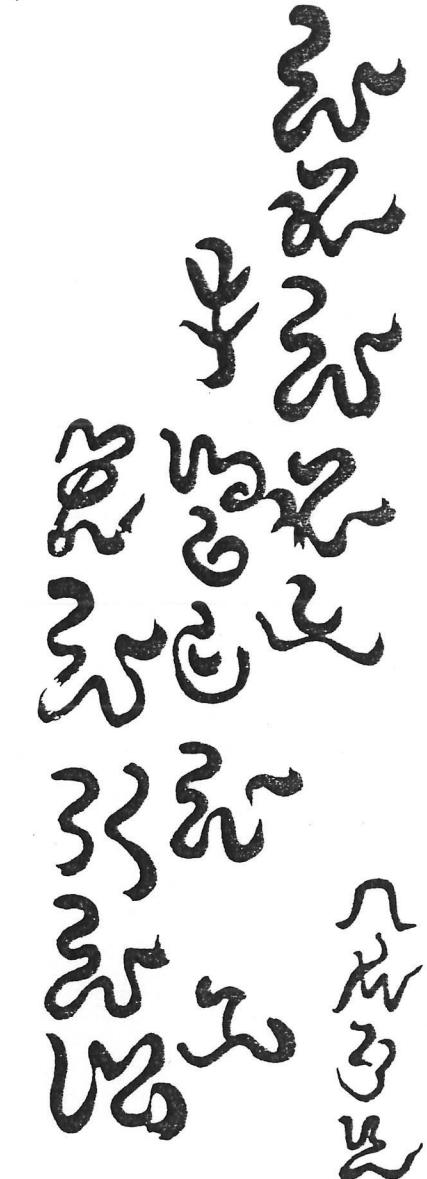
「たはらむねさと花押」

(弓矢の大神)

俵藤二宗郷については伝記不明である。藤原秀郷が俵藤太を名乗つていたことを考へる

と、あるいは兄弟かとも思われる。御存知のかたのご指導をいただければ、幸いである。

(38) 源頼光（九四八一—〇二一）



「よりみつ」

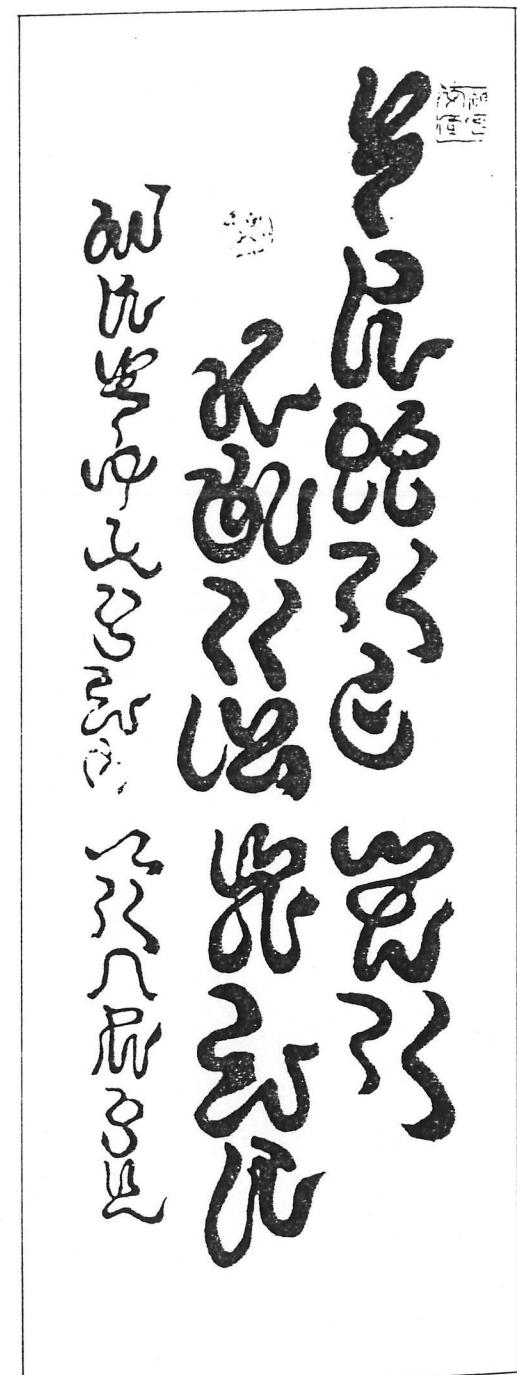
「なかなかにいひもはなてしなのなる」

（頼光）

（仲々に 言ひもはなてしなのなる）

(39)

源頼光



「きそちたはしのかけたるやなぞ」

（ふそうくに みなもとのよりみつ）

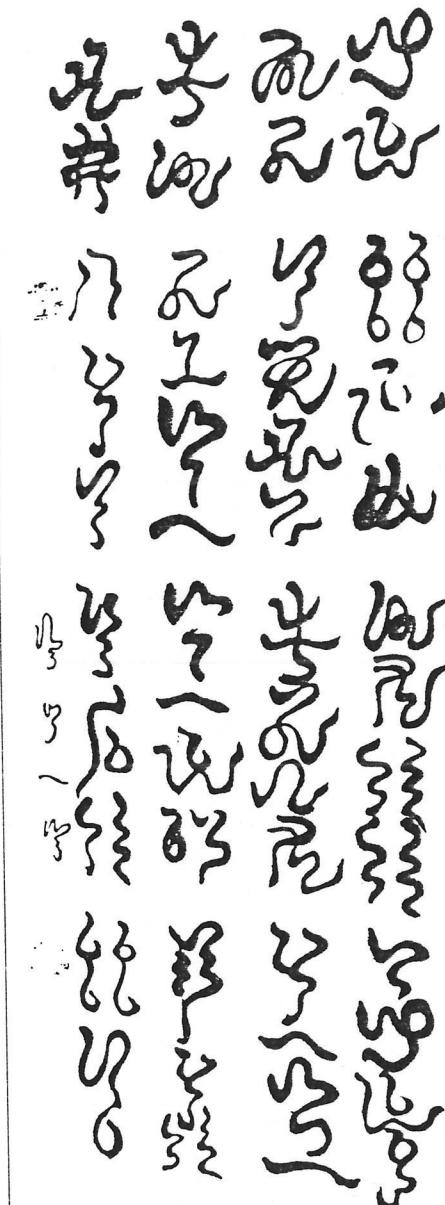
（木曾つた橋の懸けたるやなぞ）

（扶桑国 源頼光）

源頼光は清和源氏の直系で、驍勇をもつて知られる。大江山の酒頭童子の征伐の伝説や

(40) 土グモ伝説で有名である。

坂田金時（一一〇一〇一）



「くにちにけなりたたすくに みなまつしかも しまよりみとせと しままでことごとに  
おほみるからのみつきえたちをも」

「きむとき」

（国ちにけなり 正す國 皆まつしかも 今より三歳というまで 事毎に おほみるから  
の 途消えたちをも）

（金（公）時）

（41） 坂田金時



（41） 坂田金時

「をることのりたまひき」

「治安元年八月十八日」

「さかたきむとき書」

(居ること宣り給ひき)

(治安元年八月十八日)

坂田金時は源頼光の家来で、四天王の一人として有名。正式には「公時」で金時は通称。幼名は金太郎、足柄山で育つた話はよく知られる。その童姿は五月人形に今も残る。

この文の漢訳を試みたものの、何とも意味不明で後味が悪い。専問家のご指導をいただければ幸いである。

(4) 渡辺繩 (九五三一〇三四)

「おまではこのちつなきやすまなれとゆくてはつなもたのみすくなや」

「みのもとの  
わたなへのつな」

(原  
度  
刃  
網)

渡辺綱も源頼光の四天王の一人。頼光に従がい、京都の北、市原野で鬼同丸を、また大江山の酒顛童子そして羅生門の鬼を退治した伝説がある。

(43) 源義家（一〇三七—一〇六）

「とかぬゆみ  
はなたぬやにているときは  
あたらぬまでも  
はなれさりけり」

「みなもとのよしき」原文には特に（いがない）

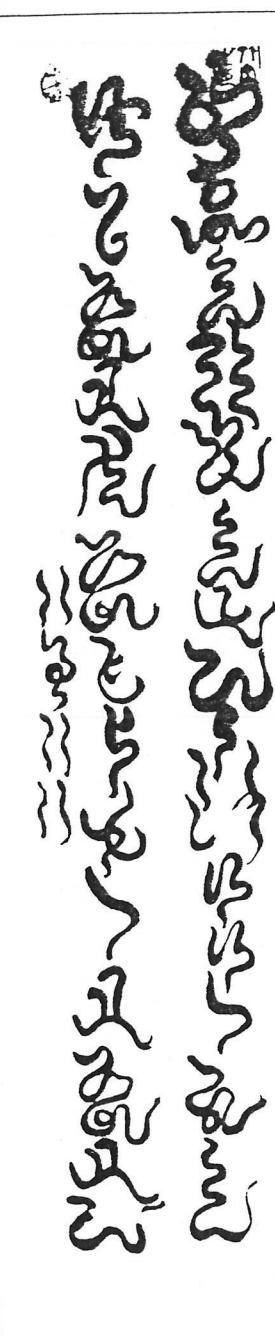
（解かぬ弓 放たぬ矢にて射る時は

当たらぬまでも 放たれざりけり）

（源義家）

義家はのち八幡太郎義家ととなえ、騎射で秀でた勇武の人として名高く、和歌にも長じた。前九年の後に、父頼義と共に陸奥の阿倍貞任を討ち、鎮守府将軍となつた。またのちに後三年の役を鎮定し、東国に源氏勢力の根拠を固めた。義家の子孫は清和源氏の正系として、頼朝を出した。

(44) 藤原為忠（一一三六）



「おもひきるへきに なみたのつつむまで うれしかりしは みのむかしかな」

「ためたた」

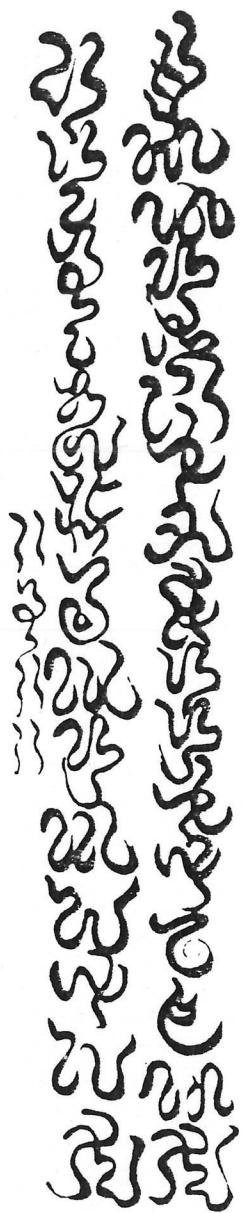
（思ひ切るべきに 涙の包むまで 嬉しかりしは 身の昔かな）

（為忠）

この歌は「新葉和歌集」第十八巻に収められている。ただし一般市販書には、初句が「思ひいづる袖に」とある。いざれが正しいものか、今後の大分の判断に待ちたい。

(45)

藤原為忠



「ほとときす をのかさつきのくれはとり あやめもしらぬ ときとなくなり」

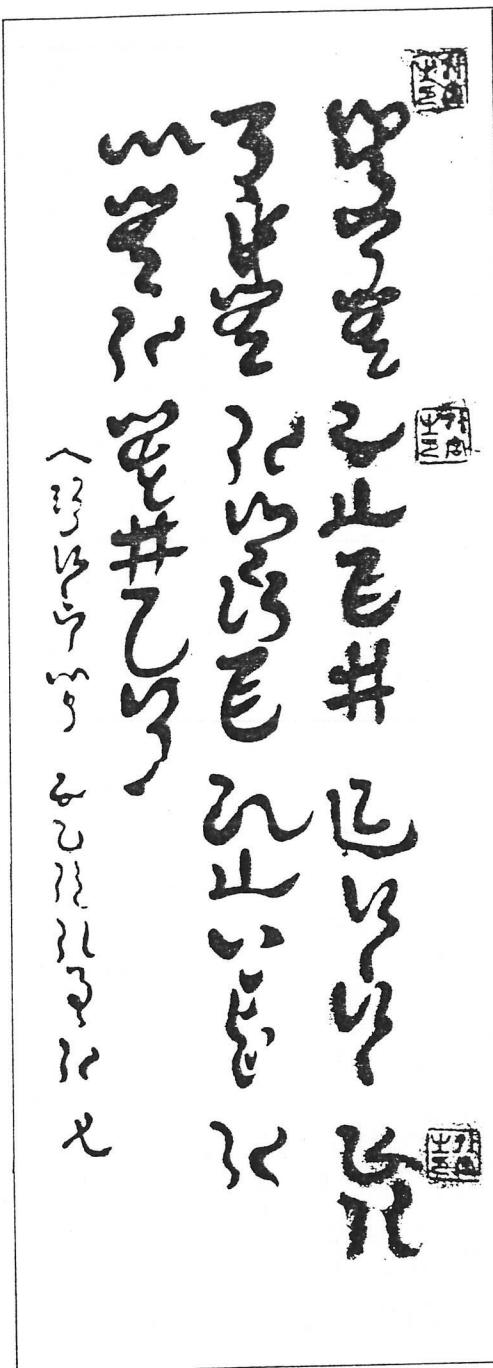
「ためたた」

(時鳥 己が五月の くれは鳥 あやめも知らぬ 時と鳴くなり)

(為忠)

「新葉和歌集」第三巻に収められている歌である。藤原為忠は、平安末期の廷臣で歌人であつた。勅撰「金葉集」には九首があげられており、「為忠朝臣集」は今日も遺つてゐる。子の為業は、著名な「大鏡」の作者に擬せられてゐる。

(46) 藤原為教 (一一一七一一二七九)



「うすしまかはらに つづけるむさしのわ おはなかすみの ふしのしられす」

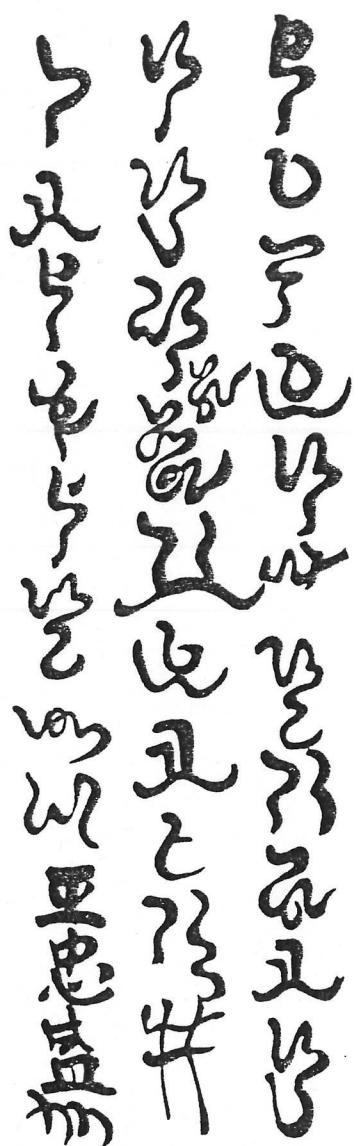
「とほつあふみまもる ためのり」

(白島河原につづける武藏野は 尾花霞みの 富士の知られず)

(遠つ近江守る 為教)

藤原為教 (あめのり) は鎌倉の歌人。為家の次子、為兼の父。右兵衛督 (うひょうえのかみ) (長官) であつた。

(47) 平忠盛 (一〇九六一一五三)



「みもすにきくや たまかききき あましかにかはるらむ かみのみやひと」

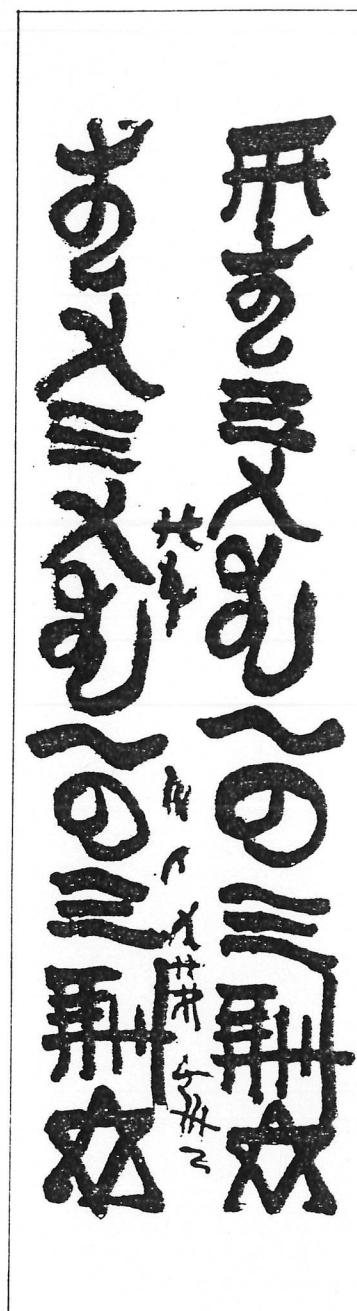
「平忠盛 花押」

(みもすに置くや たまかき置き あましかに變るらん 上の宮人)

(平忠盛 花押)

残念ながら漢訳不首尾のため、文意不明である。平忠盛は平氏の直系であり歌人である。白河法皇の寵姫をゆずられたが、その女性がすでに妊娠していて、生まれたのが平清盛といわれる。忠盛の詩歌は「金葉集」や「忠盛朝臣集」に多く出ている。

(48) 木曾義仲 (一一五四一一八四)



宗源道文字

「たかむすひの みこと」

「みなもときそよしなか」

宗源道文字

「かむみむすひの みこと」

(高皇產靈之命)

(源木曾義仲)

(神皇產靈之命)

実をいと「みなもときそ」(アワ文字)の文字の読みかたには、余り自信がない。

木曾義仲は、木曾山中で育てられたのでこの称があるが、源の出である。俱利加羅峠の奇襲で史上に名高い。京都に入つた義仲は、みずから征夷大將軍を名のつたが、武運つたなく義経軍に敗れた。

高皇產靈尊と神皇產靈尊は、記紀所載の宇宙の陰陽神である。

(49)

源義経（一一五九一一八九）

りとおゆひあらひあらひあらひあらひ  
そひあらひあらひあらひあらひあらひ  
申ひあらひあらひあらひあらひあらひ

「うねひやま ひるはくもとふゆうされは  
かせふかむとそ このはさやける」

「義経 花押」（アワ文字）

（ぬねび  
傍山 昼は雲とふ夕されば

風吹かんとぞ 木葉さやける）

（義経 花押）

義  
經  
花  
押

義経二書中の義経署名

上図は世界文化社刊「日本歴史シリーズ」に源平盛衰記にのせてある義  
経の真筆で伊勢の文庫書と同一なる  
のを読者は確かめられたい。此の書  
の眞実性を記す。

(50)

源義経

「さるかはよ くもたちわたり うねひやま このはさやきぬ かせふかんとす」

「みなもとのよしつね」花押

(アヒル草文字)

(さゐ川よ 雲たちわたり 袋傍山

木の葉さやきぬ 風吹かんとす)

(源義経 花押)



義経二書中の署名

一四七頁にアワ文字一覧表をのせたが、  
解説は仲々難しい。之と前項の二歌共、  
神武天皇の皇后の御歌として古事記に  
ある。

(51) 藤原渕名兼行(一紀一一九七年)



「やくもたつ いつものくには あかしつまりますくに あおかきやま めくらしめて  
たまおきて まもると まおしたまひき」

「ふちはら ふちなかねゆき ふみ」(古代人のデザインに御注意あれ)

(八雲立つ 出雲の国は 吾が鎮まります国青垣山めぐらしめて 魂置きて守ると

申し給ひき)

この染筆は、大国主神への讚歌とでもいべきものであろう。渕名兼行については不明

である。

(52) 源頼朝（一一四七一一九九）



「あまつひつきのみこと」

「みなもとよりとも」

（天津日継尊）

（源頼朝）

(53)

源頼朝



「ひつきみこと」

「みなもと よりとも」

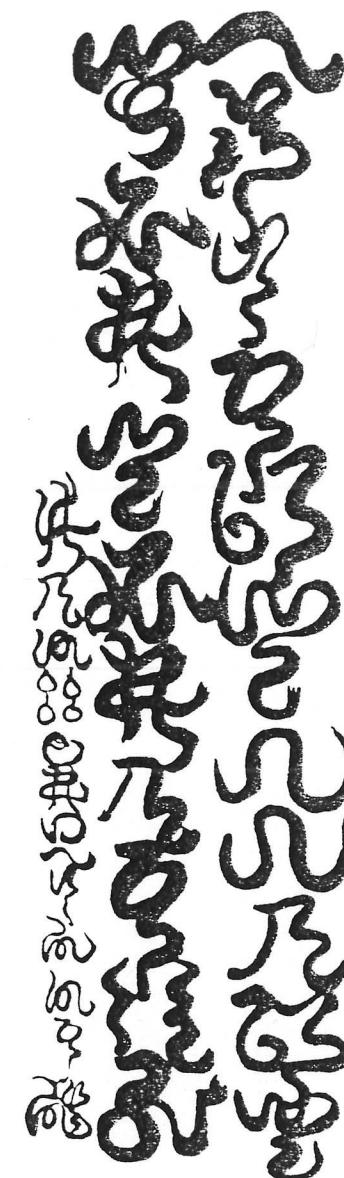
（日継尊）

（源頼朝）

源頼朝は鎌倉幕府の初代将軍であり、武家政治の創始者として朝廷にかわって政治の大権を握った彼であるが、天皇に対する忠誠心はなお失なつていなかつたのであろう。

(55)

藤原基綱



「とほきみおや よよのおや うからやから のみたま」

「さのふちはらもとつな ふみ」

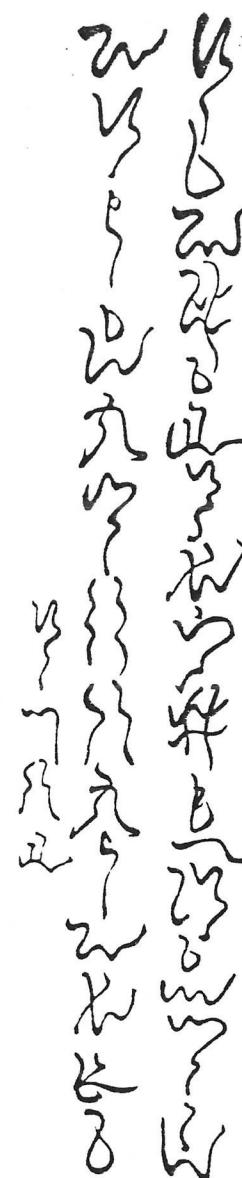
(遠き御祖 世々の祖 親族 家族の御魂)

(佐野 藤原基綱)

これは先きの和氣清麻呂の染筆と同文で、前句のみを書いている。

(56)

藤原經高 (一一八二一一五八)



「つれなさも かきりあらはと おもふやそ なほみにのこる たのみなりけり」

「つねたか」

(情れ無さも 限りあらばと思ふやぞ 尚身に残る 頼みなりけり)

(經高)

前中納言經高は南朝の人々の「新葉和歌集」(宗良親王撰)の歌人として知られる。(次)

嵐吹く 軒の板間に埋れて 木の葉にもらぬ 時雨哉

冬枯の梢の雪の 朝ぼらけ 青葉交らぬ 花かぞ見ゆ

(57) 藤原忠舒ただのぶ（一一八七一）

ひへすくみかみひくみひく  
もくひゆひくみひくみひく  
続四之上 忠舒

「おとめのいかくるをかを かなすきも いほちもかも すきはぬるも」

「徒四位上 忠舒 花押」

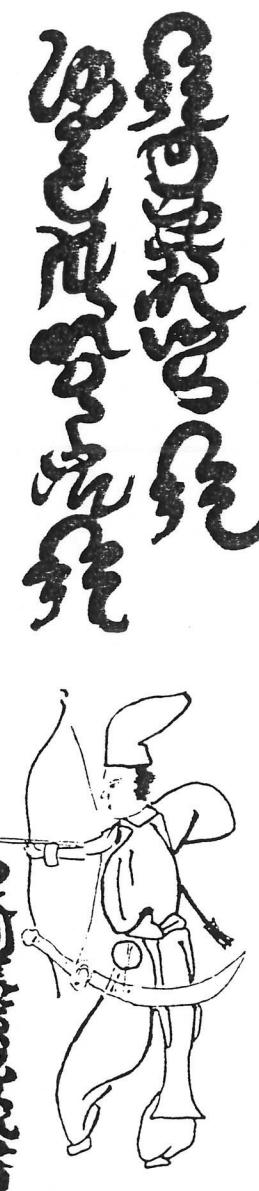
（乙女のい隠る岡を 金鋤きも 五百箇もかも 鋤き撥はぬるも）

（徒四位上 忠舒 花押）

これは、古事記所載の英遇のきこえ高い雄略天皇の慕情歌である。天皇がかつて、春日に評判の美女・遠杼姫おどを、貰い受けに行つたときのことである。天皇の一行と途中でバッタリ出あつた遠杼姫は、事情をきかされ恥かしさの余り、近くの岡に隠れて出てこない。

そこで天皇は、「鋤の五百丁もあればよい。この岡を全部堀り返しても、あの娘を探すのだが……」と歌つてゐるのである。

(58) 藤原忠家（一二二八一一二七五）



「たわらとうた ひてさとすかた」

「足利藤原忠家書」

（俵藤太 秀郷 姿）

（足利藤原忠家書）

藤原忠家は九条家、父は関白藤原教道である。三男として生まれたが、宗家を継いで摂

政関白太政大臣となつてゐる。

(59) 花山院師賢かざんいんしもんかた（一三〇一一一三三一一）



「ひとやりのみちとは しらぬこひの やませかこころより まよひそしつつ」

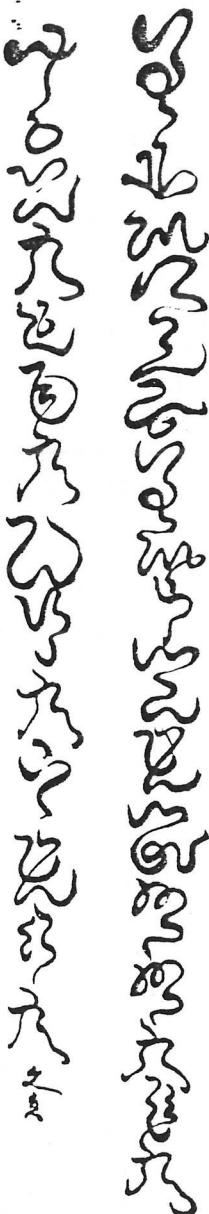
「もうかた」

（火と槍の道とは 知らぬ恋の 山背やまぜが心より 迷いぞしつつ）

（師賢）

崇峻天皇（三十二代）が蘇我馬子そがうまこに弑せられて、皇継者なく推古天皇が即位したが、天駒山に脱がれたが、己れのため騒乱を起こすは不本意として、一族23人の子女と共に自殺した。そのことをこの歌は「王よそれはあなたの迷いである」というのである。

(60) 花山院師賢かざんいんしもんかた（文貞）



「つかふとて まつふみわけし ここへの くもゐのにはの ゆきのあけほの」

（文貞）

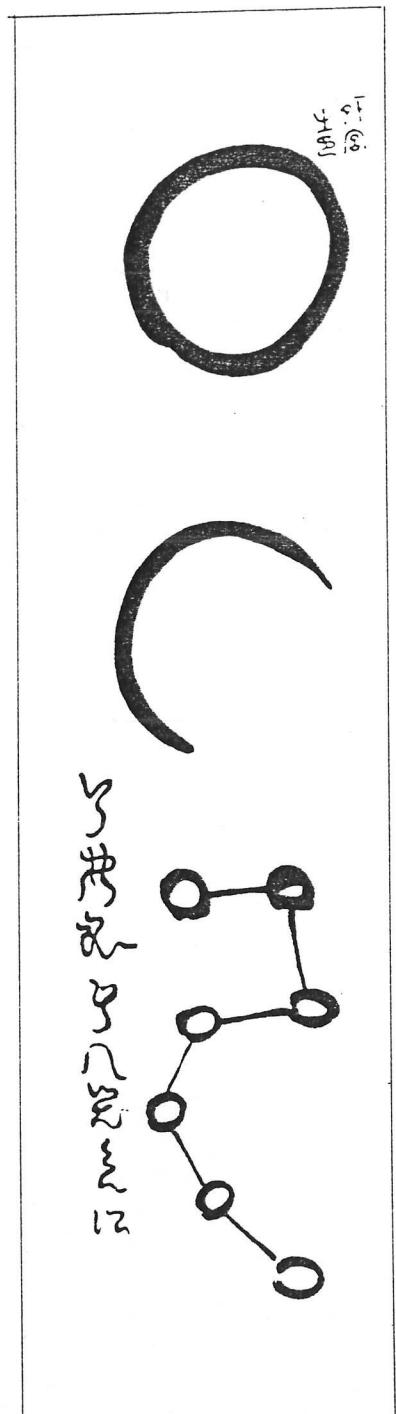
（仕ふとて 先づ踏み分けし 九重の 雲井の庭の 雪の曙）

（文貞）

後醍醐天皇が北条幕府に包囲されたとき、京都を脱出できたのは、この花山院師賢が身

を賭して身代りとなつた功による。師賢は幸いその場は逃れたが、のちに捕えられ出家して「文貞」または「索貞」と号した。配流の地、下総に客死したのは三十二歳のときである。死後、太政大臣を贈られている。

(61) 村上義光（一一三三三）



絵文字

「日 月 七星」

「むらかみよしてる」

（村上義光）

(62)

村上義光



絵文字

「鏡 剣 勾玉」 「むらかみよしてる」

（村上義光）



絵文字

「鏡 剑 勾玉」 「むらかみよしてる」

（村上義光）

未 申 酉 戌 亥 卯 辰 巳

よしてる

村上彦四郎義光は一身を犠牲にして、後醍醐天皇の皇子・護良親王をお守りしたことで、後世にその名を残している。吉野山の藏王堂が敵に包囲されたとき、親王の御道具を身につけて敵前に現われ、「我れこそは親王護良である」と大音声おんじょうをあげ、腹真一文字に搔き切り、腹腸はらわたを櫓やぐらの上に投げつけ、大刀を口にくわえて伏した……と「太平記」に描かれて

（64） いふ  
 錦倉宮の持林 木々に神有  
 尊良親王（一三一一一三三七）

ప్రాణికుల విషయమే అన్ని విషయముల నుండి ఏకమైన విషయముగా ఉన్నదని ప్రాణికుల విషయమే అన్ని విషయముల నుండి ఏకమైన విషయముగా ఉన్నదని

० ज्ञानो विद्या विद्या विद्या विद्या ५

（吾が心 千々に碎けて散る玉は もの思ふ時の 涙なりけり）

（ 極 ）

五  
二  
一  
三  
四

「かせにのみまかせるふねのかちおたへつみによるへもしらぬこひかな」  
(風にのみ委せる舟の 梶をたへ 遂に寄る辺も 知らぬ恋かな)

親王は南朝の後醍醐天皇の皇子として、多くの逸話が伝えられているが、特に北陸の金崎城陥落のときのご最後は痛わしい。新田義貞の子義顕や恒良親王と高師泰軍に囲まれた

尊良親王は、三ヶ月の籠城ののち義顕と共に壮然な自刃をとげたのである。並みいる三百余人の将兵も共に、腹かき切つてこれに殉じたのであつた。

前項の「わが心……」の歌は「新葉和歌集」に収録されている。

(66) 後醍醐天皇（一二八八—一三三九）

미이타길[나이사]상[하]가코[시이]길[하]고[리]  
이[하]시[하]길[하]나[하]사[하]미[하]고[리]

다가하[리]

「みやこたにさひしかりしを　きもはれぬ　よしののおくの　さみたれのころ」

「たかはる　花押」

（都だに寂しかりしを　氣も晴れぬ　吉野の奥の　五月雨の頃）

「尊治<sup>たかはる</sup>　花押」

日本の歴代天皇のうち後醍醐天皇ほど、有<sup>う</sup>為<sup>い</sup>転<sup>ん</sup>変<sup>へん</sup>のご生涯を送られたかたも少ないのである。

御製は吉野の行在所におられたときの作で、「新葉和歌集」に収録されているものであ  
う。北条幕府の討伐計画、隠岐への島流し、幕府滅亡と京都へのご帰還、建武の天皇親政、再三にわたる京都脱出、最後には吉野山に脱がれて吉野朝廷を立てられる。ここに南北朝対立の時代が始まつたのであつた。

御製は吉野の行在所におられたときの作で、「新葉和歌集」に収録されているものであ

(67) 後醍醐天皇

미이타길[나이사]상[하]가코[시이]길[하]고[리]  
이[하]시[하]길[하]나[하]사[하]미[하]고[리]

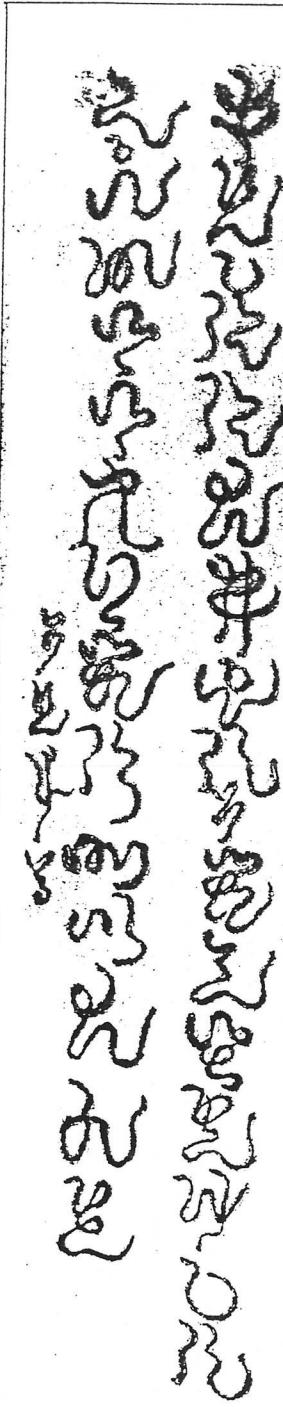
다가하[리]

「ここにても　くもゐのさくらさきにけり　たたかりそめの　やととおもふに」  
(此所にても　雲井の桜咲きにけり　ただ仮りそめの　宿と思ふに)

(尊 花押)

この御製も「新葉和歌集」に収録されている。吉野の行在所に於て、近くの世尊寺にある桜の花をごらんになつて、お詠みになられたものである。天皇の御製は数百首に及ぶが、「露の身を 草の枕に置きながら 風にはよもと 頼む果かなさ」などと詠まれておられることは、後世の涙を誘うばかりである。

(68) 藤原光実 (一一三〇〇一)



「いつもたそらにのみして うきくもの まよふこころおしるひとそなき」

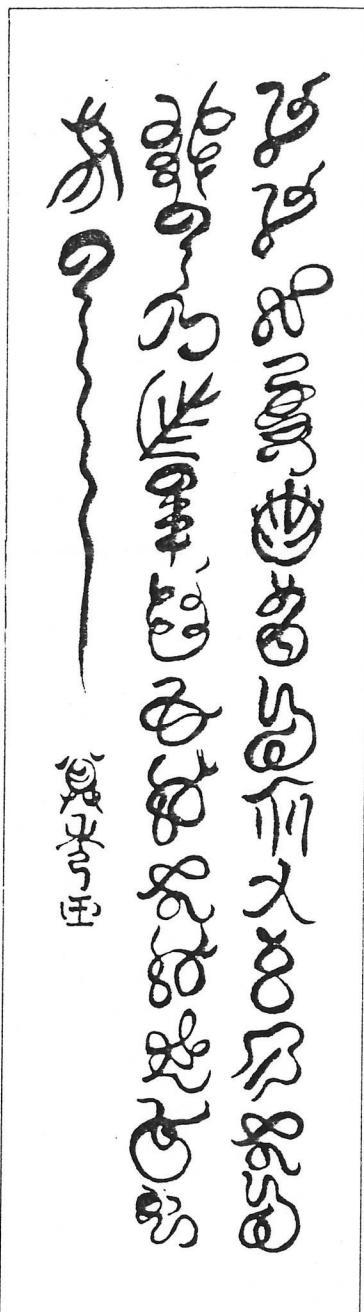
「みつきね」

(何時もただ 空にのみして 浮雲の 迷う心を知る人ぞなき)

(光実)

光実の歌は「新葉和歌集」に数首出ているが、第二十巻に「吹く風も 早や治まりぬ  
今年より千代を重ねよ 九重の花」というのがある。

(69) 南朝王孫 (一一三〇〇一)



タネコ文字

「ここをもて あめつちのはしめより おほきみと ましますくになり」

(花押)

(此所をもて天地の初めより 大君とまします國なり)

(尊秀王)

先きの和氣清麻呂の文面と同じもので「大和の国は、国のはじめから大君が統治する」といふてゐるのだ」という意味である。

(70) 南朝王孫



タネコ文字

「かむながら あかこ しらすへしと ことよさし たまひき」

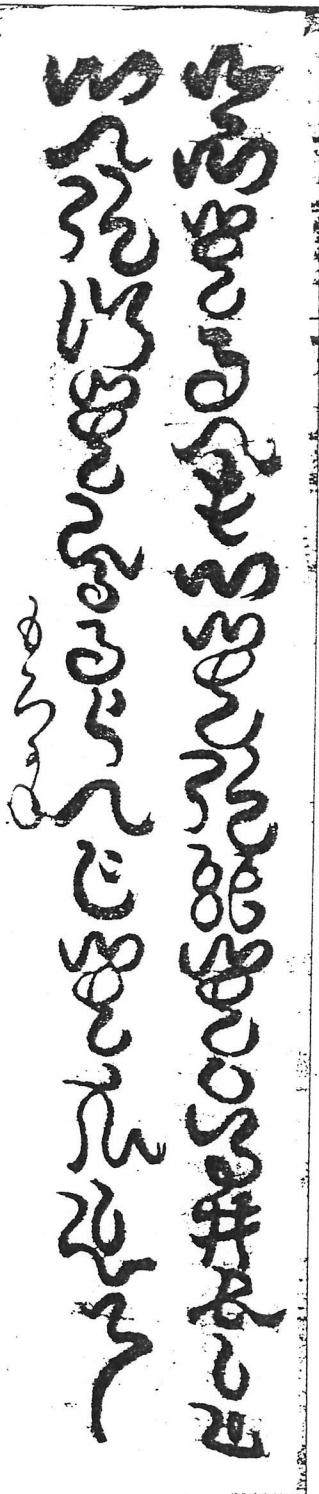
(花押)

(神ながら 吾が子 治らすべしと 言依さし 給ひき)

(尊秀王)

染筆者は南朝の王孫の故に尊秀王と思われる。神宮古字には南朝系が多く、之を終りとする。

(71) 師兼親王 (一一三〇〇一)



「こゝしぬと、いひしのちしも つらければ ひとのおしまぬ みとはしりにき」

「もうかね」

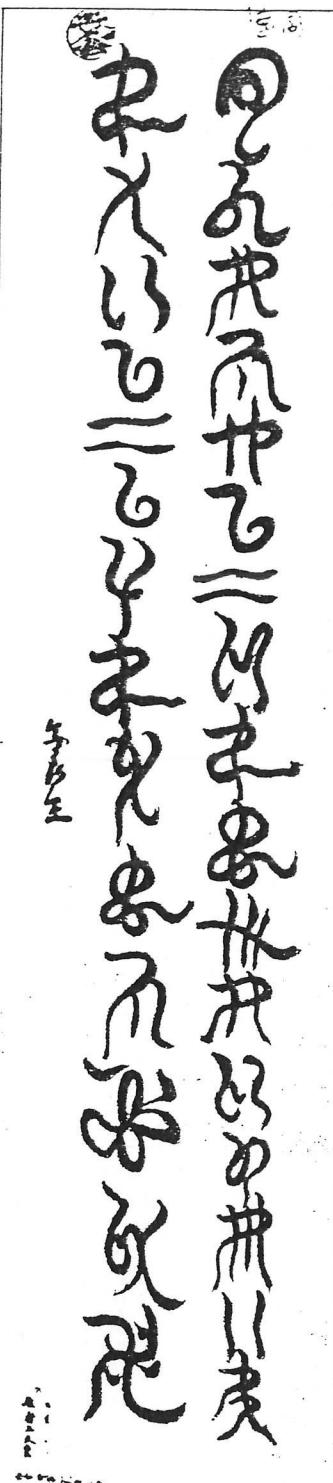
(恋しぬと言ひしのちしも つらければ 人の惜しまぬ 身とは知りにき)

「師兼」

師兼親王とは正二位權大納言・春宮大夫、藤原朝臣師兼である。後醍醐天皇時代の歌人

で、「新葉和歌集」には二十四首も出ている。その中に「君のため民のためぞと思はずば、雪も螢も何か集めん」というのがある。まことに奥ゆかしい限りである。

(72) 宗良親王（一一三一—一三八五）



アワ文字

「われはかり まつこひしなは こむよにも ひとをまつまや ひさしかるべき」

「宗良王」

（吾ればかり まつ恋しなば来世にも 人を待つ間や 久しかるべき）

宗良親皇は、後醍醐天皇の皇子として、南朝方のために各地で戦われた。また歌人とし

て「新葉和歌集」を選進なさつた。

(73) 宗良親王



アワ文字

「みにあまる けむりはかりと をもふなよ なきてそふしの ねにたてぬへき」

「宗良」

（身に余る 煙ばかりと思うなよ なきてぞ富士の 嶺にたてぬべき）

この歌は、住吉における三百六十回御歌合せ会の席上の詠進歌である。当時の公卿殿上人たちは、つねに集会の席を設けて、こうした歌合せを催した。この作品も「新葉和歌集」に収められている。宗良親王は二条正統派の歌人としても有名で、その著書「季花集」に

は千首も収められている。

(74) 宗良親王



アヒルクサ文字

「あきかせに まよふむらくも もりかきてつらきとこらし おほそらのつき」

「中務 宗良親王」

(秋風に 迷ふ叢雲 もり欠きて つらきとこらし 大空の月)

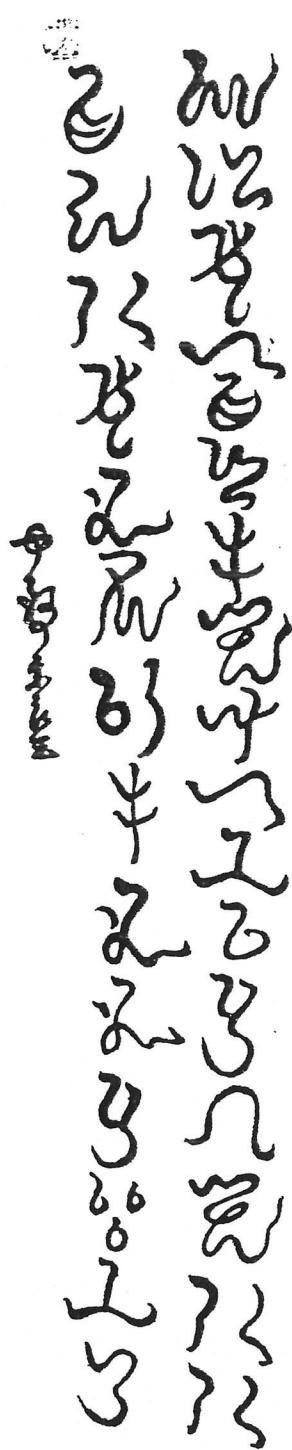
(中務 宗良親王)

この歌、征東大將軍として武藏国に下つたとき、将卒に示されたもの。なおこのほかに  
「君がため 世のため何か惜しからん 捨てて甲斐ある 生命なりせば」

などの有名な歌を陣中で詠じていられる。

親王は幸いにも南北朝の戦乱をくぐつて、七十四歳の宝寿を保たれた。

(75) 宗良親王



「ふるさとは こゝしくとも みよしのの はなのかりお いかかみすてむ」

「中務 宗良親王」

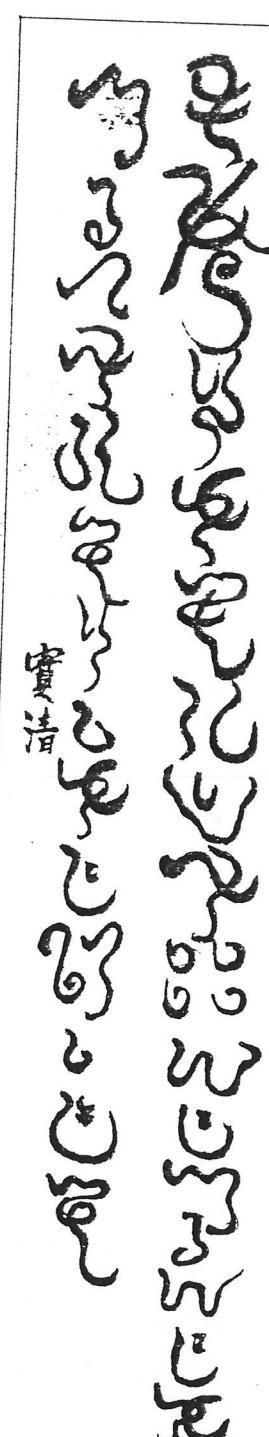
(故郷は 恋しくとも み吉野の 花の盛りを いかが見捨てん)

(中務 宗良親王)

久々に京都の大納言藤原為忠より、「帰るさに 早や急がなん 名にしおふ 山の桜は

心止む」という歌の便りがあつたので、そのご返歌がこれである。この作品も「新葉和歌集」に収められているが、この歌集は建武三年長慶天皇の倫示を受けて、宗良親王が撰したものである。北朝の勅撰和歌集に対し、これは南朝方の人々の歌を集めたものであつた（二十巻、千二十首）。

(76) 三条西実清（一三六九—一四〇三）



「いけみつの したにくちなは ねぬよはの ねぬよくるしき ものはおもはし」

「実清」

（いけみきの 下に朽ちなば ねぬ夜半の 寝ぬ夜苦しき ものは思わじ）

実清の父は藤原公時、三条西家を称した祖である。実清はその二代目、中納言従三位に

叙せられたが、わずか三十四歳で亡くなつてゐる。

(77) 藤原長親（一一四二九）



「ほのかなる やみのうつつの ひとこえは ゆめにまさらぬ ほととぎすかな」

「なかちか」

（ほのかなる 間の現つの一聲は 夢にまさらぬ 時鳥哉）

（長親）

従一位右大臣、藤原長親は、南北朝時代から室町時代にかけての廷臣であり、歌人である。同家は、祖父の師賢などに見られるように、累代南朝方に仕してゐた。

この歌は、時の関白家に於て、第三百回の御歌合せ会の席上、「時鳥、出」の題のもと

に詠じたものである。「新葉和歌集」に収録されている。

(78) 藤原長親



「このきみと わけてそあふく くもゐまで いきのほるへき そののくれたけ」

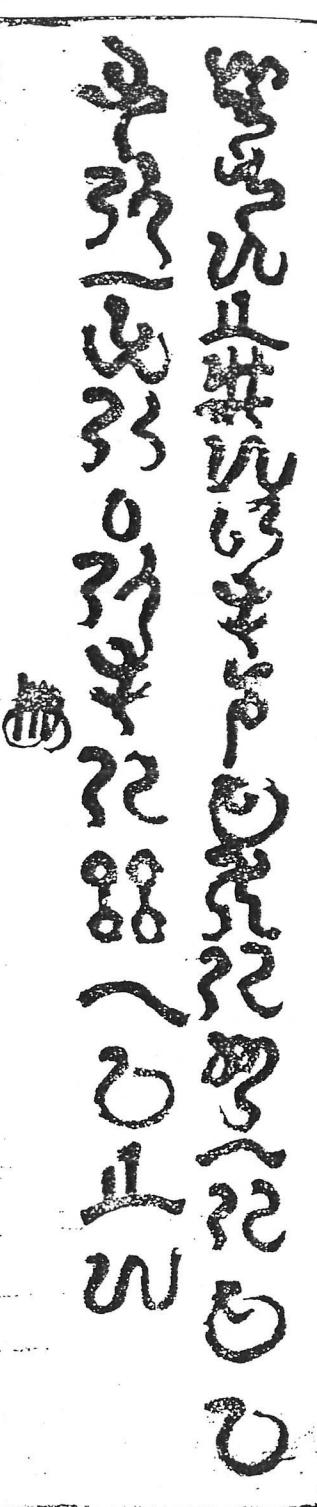
「なかちか」

(此の君と 別てぞ仰ぐ 雲井まで 生きのぼるべき 園の異竹)

(長親)

長親は右大臣当時、南北朝統一に尽力していたが、和が成立して帰京したのを期に、出家して白河に隠生した。「明魏」を称し「耕雲」と号して、「耕雲口伝」「耕雲千首」「摘題和歌集」など、多くの著書を残し、八十余歳の長命を保つた。

(79) 泰成親王

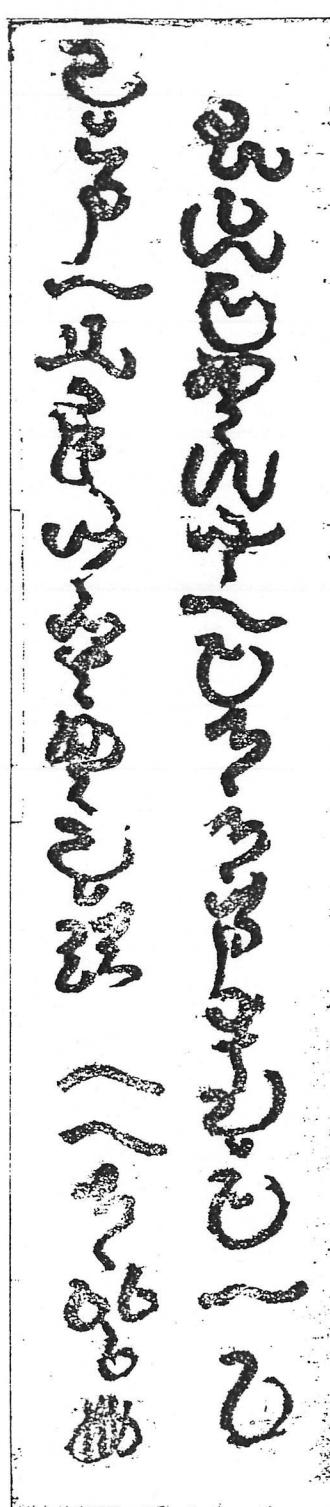


「うきながら なほいつはりのことはも あるよにたゆる いのちともかな」「やすなり」  
(憂きながら なほ偽りの言の葉も ある世にたゆる 命とも哉)

(泰成)

(80)

泰成親王



一とそにはやなくとはかせり　こまはよも　まつよかせねし　やまほとときす「  
「花押」

一  
花押

(外に早や 鳴くとは聞きつ 今はよも 待つ夜重ねし  
山郭公)

秀成亲王は後村上天皇の皇子であるが、伝記は不明。前項の歌は「新葉和歌集」第十四卷、この項の歌は第3卷に収録されている。

CT CT CT  
TI TI TI  
LI LI LI  
TO TO TO  
LA LA LA  
IT IT IT  
TO TO TO  
SI SI SI  
CT CT CT  
TI TI TI  
AT AT AT  
LA LA LA  
IT IT IT

「つれなさのほとをしらせてありあけのつきにもなかぬほとときすかな」

「うしさた」

(情れなさの 程を知らせて 有明の 月にも鳴かぬ 時鳥哉)

(82) 前中納言 氏定

「たなはたの  
あまのはころも  
きてもまた  
かへるうらみの  
かつやかさねむ」

(七夕の 天の羽衣 着てもまた  
かへる恨みの 数や重ねん)  
(氏定)

(五)

氏定の伝記は不明だが、前中納言はある。前項の染筆は、「新葉和歌集」第三巻に、この項の歌は第四巻に収録されている。

(83) 津守国貴

アローナロロロロロロロロロロ  
オラヘナヒタヒトヒトヒトヒトヒト  
〔國貴〕

ヒフミ文字（タテ組）

「のかれても またよはへなむ みやまへの あらしにいほの あれまくもおし」

「國貴」

（のがれても 又よばへなん 深山辺の 嵐に庵の 荒れまくも惜し）  
津守国貴については不明であるが、この歌は「新葉和歌集」第十八卷一二一三番歌として収録されている。

(84)

津守国貴

アローナロロロロロロロロロロ  
オラヘナヒタヒトヒトヒトヒトヒト  
〔國貴〕

「きみをいのむ みちにいそけは かみかきに はやときつけて とりもなくなり」「國貴」  
(君を祈ん 道に急げば神垣に 早や時告げて 鳥も鳴くなり)  
この作品も「新葉和歌集」第十一卷五九九番として収録されている。

三条公冬（一三九〇—一四五九）

(85)



絵文字

「ひと とり うま むし」

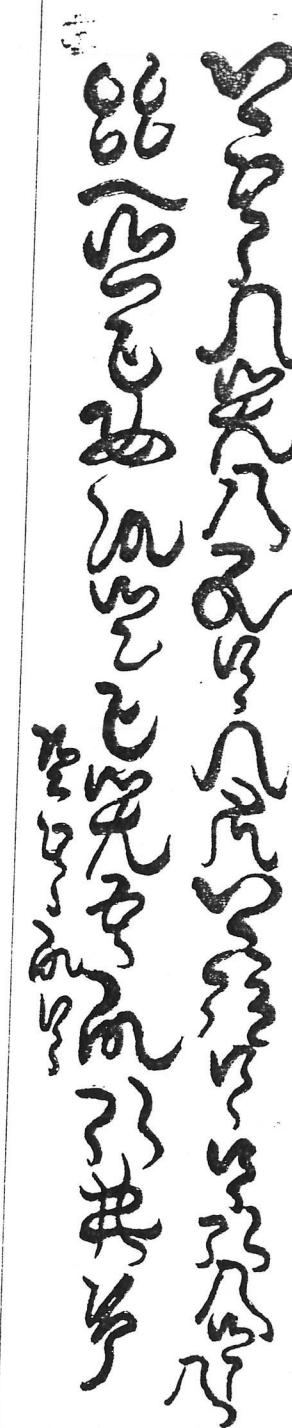
「きみふゆ」

(人 鳥 馬 虫)

(公冬)

この絵文字については、前記のように読んでみたが、なお研究の余地があると思う。公冬は三条家十七世孫である。従一位右大臣に昇進した室町初期の廷臣であり、歌人としても有名である。

(86) 橋本公夏 (一四五四一一五一)



「すみよしのまつよりすたつ つるのこの ちとせはけなき はしみなるらむ」

「きみなつ」

(住吉の 松より巣立つ 鶴の子の 千歳は 今日ぞ 初めなるらん)

(公夏)

いま住吉の松の木に育つていてる鶴の子も、もはや巣立つほどに大きくなつた。今日はこの子がやがて、千年を生きる初めの日なのだ。

(87) 橋本公夏



「あふことの うれしきにさへ さきたつは うきにもおちし なみたなりけり」

「きみなつ」

(逢うことの 嬉しきにさへ 先き立つは 憂きにも落ちし 涙なりけり)

「しばらくぶりの人と逢えるのが嬉しいはずなのに、涙が先に立つ。悲しいにつけて嬉しひにつけ涙がこぼれるとは、われながら年老いたものだなあ」というのであらうか。

(88)

橋本公夏



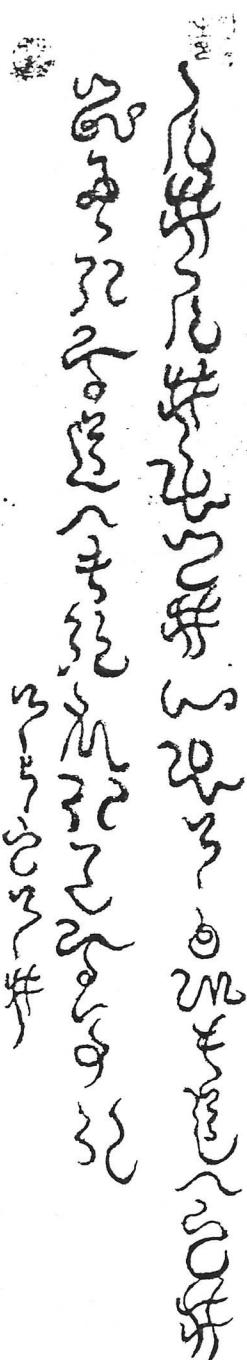
「あふとみる おみしをいまは たのむかな やみてうつつの つらきあまりに」

「きみなつ」

(会うとみる お主をいまは 頼むかな 病みて現つつの つらき余りに)

「公夏（きみなつ）」は、室町時代の廷臣、橋本公夏である。橋本家は藤原鎌足を大祖とする北家・藤原氏の曾孫である閑院家の分流で、公夏の父は大納言実郷公である。

(89) 三條西公明（一五五五—一五八七）



「えらえらに わらひにきはふいへと あらしめたまへと じのりたてまつる」

「きみあきら」

(えらえらに 笑い脇はう家と あらしめ給へと 祈りたてまつる)

(公明)

「家族が朗らかに笑い脇はうような たのしい家庭にさせていただけますよう お祈り致します」という意味であろう。

公明は、室町時代から安土桃山時代にかけての朝臣で、内大臣の位だつた。幼名を公光と呼び、のちに公国とも称した。父は内大臣実枝で、和歌通で一家を成していった。

(90) 中御門宗房（一五三六—一五九三）

なかみかどむねふさ

火を點かずひへるかと見ゆま

アワ文字

「いつよりか をとろかされし とりのねお ねさめのとこに まねてきくらむ」

「むねふさ」

（何時よりか 驚ろかされし 鳥の音を 寝覚めの床に 真似て聞くらん）

（宗房）

(91)

中御門宗房

世々を経し 吾が家の名の 惜しければ 惜しからぬ身を 捨てぞかねぬ

「よよおへし わかいえのなをしければ をしからぬみおすてそかねぬる」

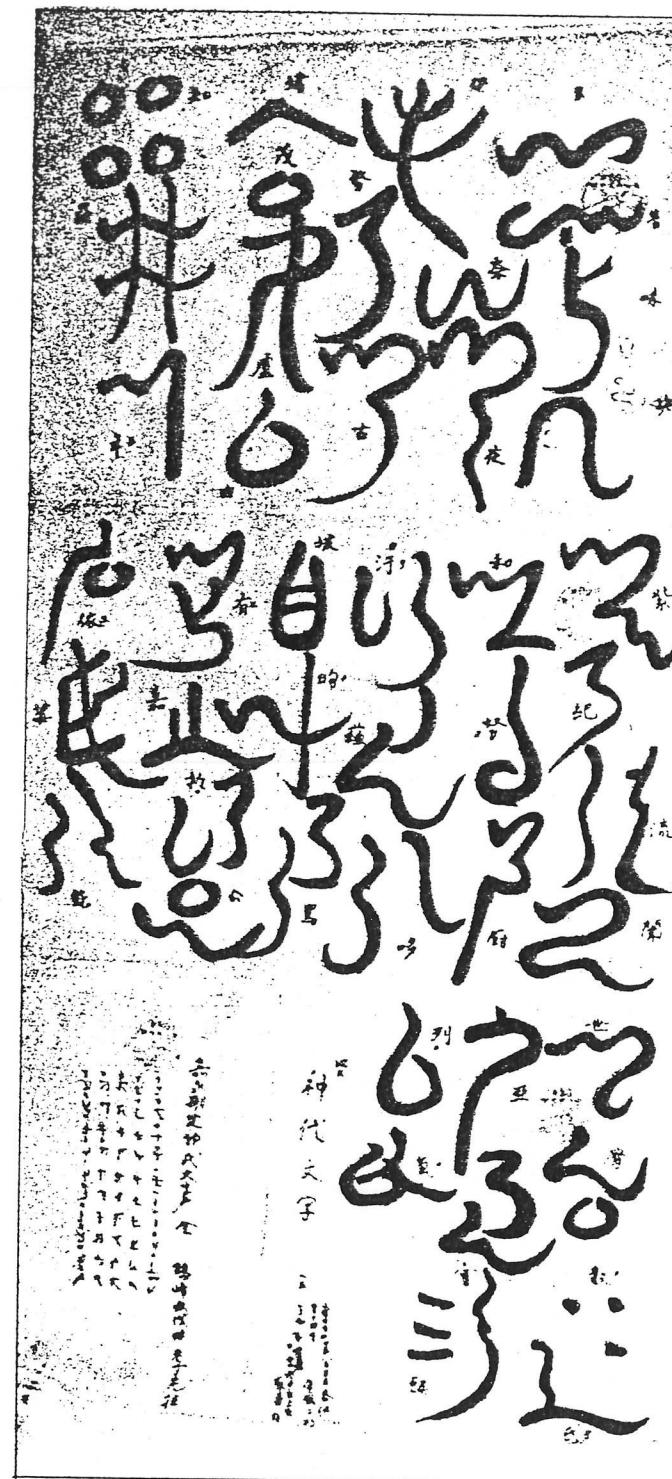
「むねふさ」

（世々を経し 吾が家の名の 惜しければ 惜しからぬ身を 捨てぞかねぬる）

（宗房）

中御門宗房は、前項の橋本公明と同時代の人で、正二位権大納言に昇っている。もと飛騨  
鳥井雅教の子で初名は宗房、のちに宗満と名のつた。文学者でもあつたので、その作品は

「慶安手鑑」に出ている。藤原氏。



ひ（不明）ふ（普）み（昧）よ（与）い（伊）む（務）な（奈）や（夜）こ（古）と（堵）  
も（茂）ち（知）ろ（廬）ら（羅）ね（年）し（柴）き（紀）る（流）ゆ（由）ゐ（不明）  
つ（厨）わ（和）ぬ（努）そ（蘇）を（汙）た（多）は（坡）く（眴）め（罵）か（嘉）

う（有）お（於）え（依）に（爾）さ（婆）り（）へ（）て（氏）の（能）ま（摩）  
す（数）あ（亜）せ（世）ゑ（会）ほ（舗）れ（列）け（氣）

天明四年 甲辰八月吉旦 「神代文字」全

皇大神宮に奉納

京都 勤思堂

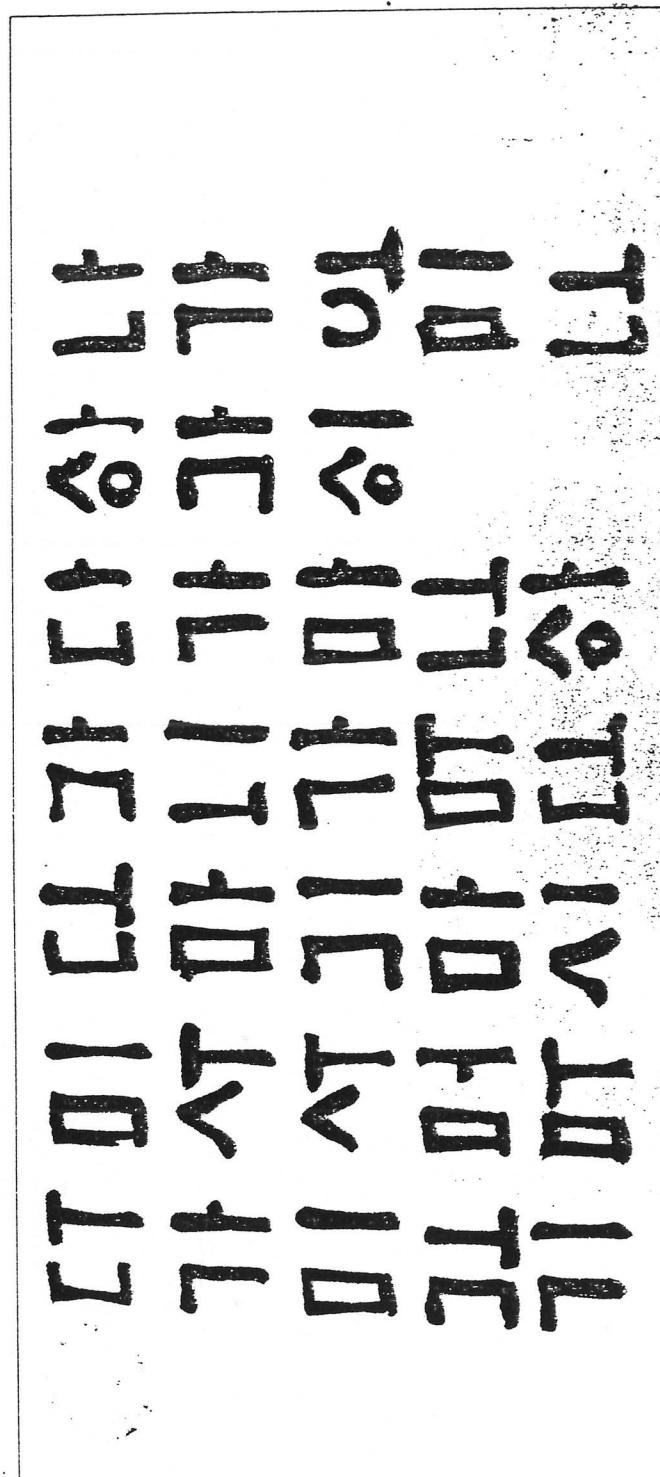
村井古巣 敬儀 拝

これはアヒルクサ文字により古代挾詞を書いたものである。一般には「ヒフミヨイムナ  
ヤコトモチロラネシキルユキツワヌソヲタハクメカウオエニサリヘテノマスアセエホレケ」  
の四十七音字であるが、この染筆ではどうしたものか、「リ、ヘ」の二文字が脱けていて  
四十五音字になつてゐる。

村井氏は京都の名家で、珍本稀呂を多く蔵し、神宮文庫に奉納したと記録されている。

(93)

無名



ヒフミ四十七音字

「なかおみのはらひ　たかまのはらにかむと　とまります　みすすめむつかみろき」  
(中臣の祓ひ　高天原に　神とどまります　みすすめむつ　神呂基)

(94)

無名



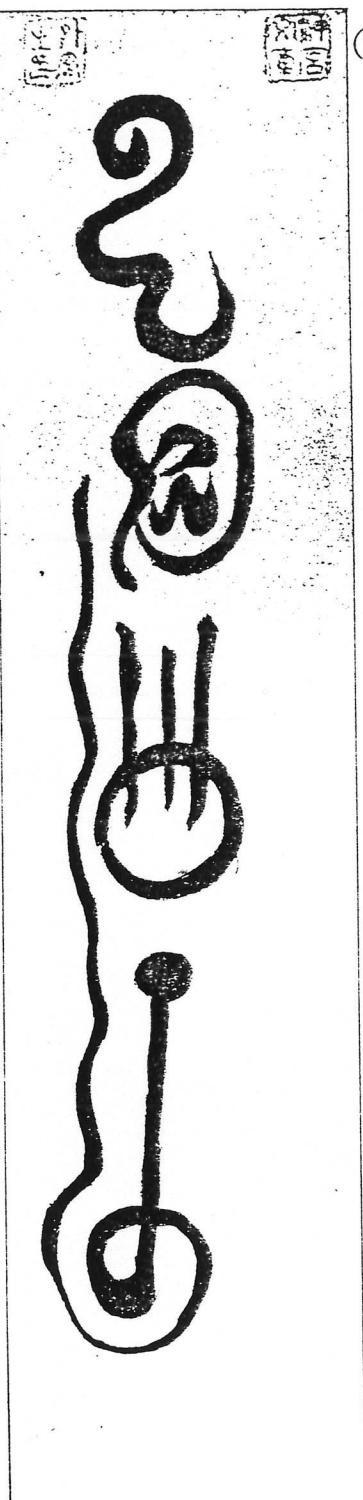
イヅモ文字

「あまつこやねのみこと」

(天児屋根命)

(95)

無名



「あめちち」と吾郷清彦先生は訳した。

(96)  
無名（干支）



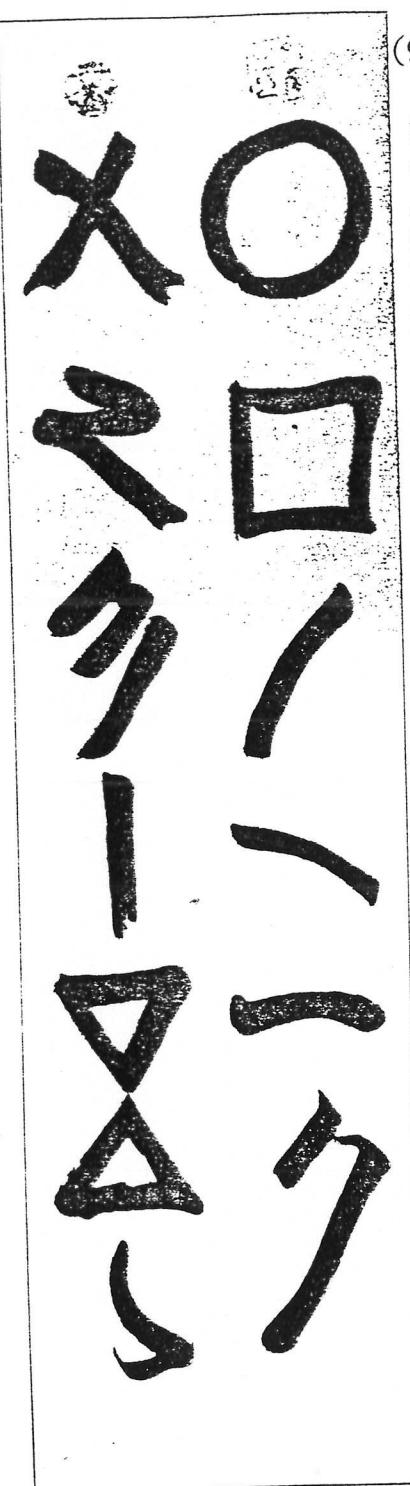
(97)  
「子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申酉 戌 亥」  
無名（干支）



(98)  
「子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申酉 戌 亥」  
無名

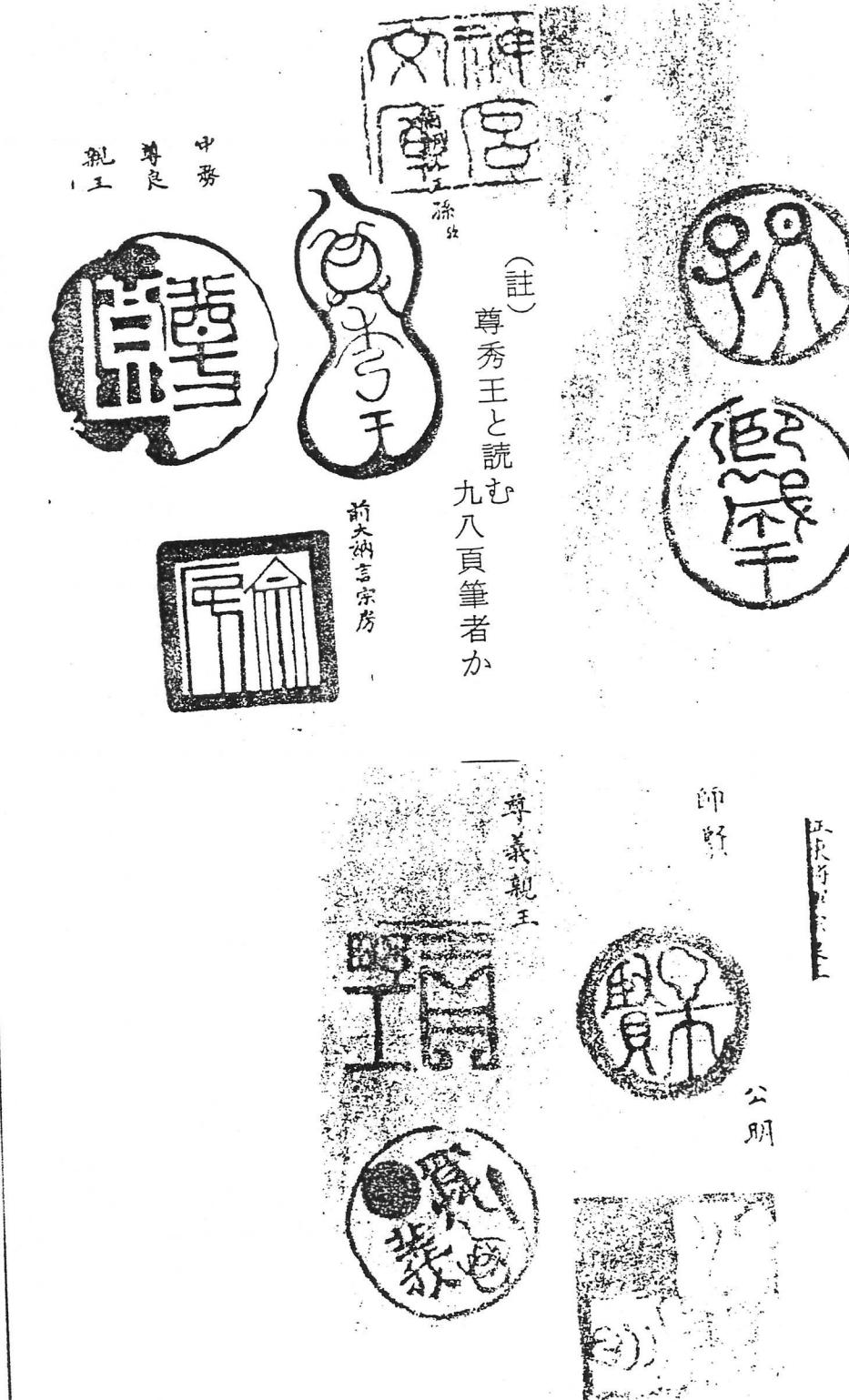


(99)  
無名（数文字）



「子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申酉 戌 亥」

## 後龜山天皇御璽



## 中 篇

### 日本古代文字の各種

丹代貞太郎

#### 古代文字について

古代文字一般について述べることは、それだけで一冊の本を要することで、もとより私の任ではない。しかし、古代文字に初めて接するような読者のことと考えて、ここでは古代文字の定義、種類、実例などについて、ごくかんたんにふれてみたいのである。

古代文字第一の研究者である吾郷清彦氏の「日本神代文字」（大陸書房刊）では、古代文字（氏は古代和字と呼ぶ）を定義して「古代和字とは、その発生、渡来のいかんを問わず、上・古代から中世にかけて、漢字渡来以前に、もっぱらわが民族に使用された文字をいう」とある。簡明かつ正確な定義と思われる所以、私もその説に従うこととした。

種類については同書において、アヒルモジ、アヒルクサ文字、アナイチモジ、ホツマモジ、アワモジ、タネコモジ以下三十二種類の実例をあげている。また関係各書にあげてある古代文字を、抜萃し重複を除いて合算すると、實に八十種にのぼる古代文字があると指

摘している。

読者はわが国だけでこれほど多種類の古代文字のあることに、あるいは不審の念を懷かれるかも知れない。しかしそれは、わが国の歴史をたかだか二千年、三千年として教えてきた、従来の誤まれる歴史概念によるものであることを知つていただきたいのである。

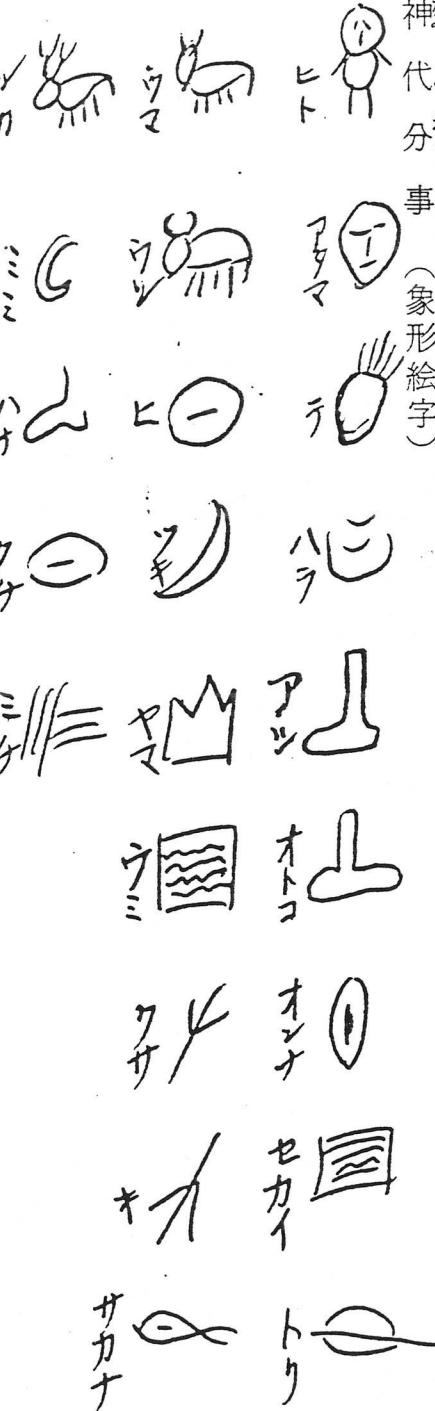
日本の歴史は、実に数万、数十万年の長きにわたつてゐることは、最近しきりに発刊されはじめている各種「超古文書」を見ても、また発掘される超古代遺物からしても、もはや否定し得ない事実であることを、日本人は新たに認識しなければならないのである。そしてその観点からすれば、このように多数の古代文字の存在することは当然のことであり、むしろ逆に多数の古代文字の存在によつて、日本歴史の古さが省みられることに思いを致すべきではなかろうか。

古代文字の実例については、ここに多くを並べることはいたずらにはん難を加えるのみであるし、本書本来の趣旨でもない。そこで、本書の染筆に用いられたアヒル文字、アヒルクサ文字、タネコ文字、アワ文字、イツモ文字に加えて、多少の参考ていどものものをご紹介しておきたいと思うのである。

### (1) 神代分事（象形絵字）

日本象形文字のうちの「神代分事」である。日本国内には、多くのこのような象形文字が伝わつてゐる（岩間尹著「開闢神代暦代記」より）。同書によれば、富士山麓の旧神社

神代 分事  
（象形絵字）



の伝承を徐福が編さんした。俗に「富士古文書」といわれるものにして、富士山麓の宮下家に伝わる処から宮下文書とも云う。

### (2) ヤマダイ国 象形絵図

近年発刊された「東日流三郡誌」（市浦役場発行）所載のもの。ヤマダイ国王、安日彦及長髓彦王の伝承の中での象形絵図が発見された。

ひ ま な さ あ  
 ハ ム ナ サ ア  
 事 人 月 火  
 事 人 月 火  
 う う  
 ト ト  
 川 川  
 か か  
 の の  
 木 木  
 い い  
 は は  
 た た  
 か か  
 え え  
 そ そ  
 く く  
 ひ ひ  
 月 月  
 日 日

(3) トヨクニ文字

神 月 祈 王 天  
 生 月 冬 星 月 日  
 産 月 沼 地 魂 雲  
 佐 月 海 云 草 雨  
 痴 月 土 雨 木 风  
 傷 月 火 雷 虫 山  
 走 月 水 春 鱼 川  
 若 月 夏 鳥 海  
 教 月 死 秋 獣 人

ヤマダイ国絵図

この文字は日本の秘められた古文書である「上記」(一一一三)の記録用文字として用いられた。この文字は「象形神名」といわれるもので、文字発生の第一段階のものといえる。九鬼古文書にも、第二次に簡易化された仮名文字が用いられている。トヨクニ文字は、山嵩により伝承されたので、俗に山嵩文字とも呼ぶ。

(4) エジプト象形絵字



エジプト象形絵字

エジプト古字は日本の豊國<sup>トヨクニ</sup>文字と類似している。徳政金吾氏の「古代埃及と日本」では、エジプト文字が日本に渡来したように考えられている。しかしこれは、日本の歴史がせいぜい二、三千のものという誤った前提からくるもので、事実は逆である。

(5) ツガル木樵絵字

津軽地方の木樵たちのあいだで、古くから用いられた絵文字である。

(6) 津軽結繩法

これは古代ツガル地方の原住民とされるツボケ族やアソベ族が使用した。津軽にはこれらの民族の名残として、ツボケ住居跡やツボ貝村が遺つており、また噴火以前の岩木山をアソベの森国といつていた。

(7) インカ結繩法

日本のそれと似ているが、古代ペルーすなわちインカ帝国のキープのアルファベット。

米国インディアン結繩符号

アメリカ・インディアンの間で、現在もなお用いられるという。

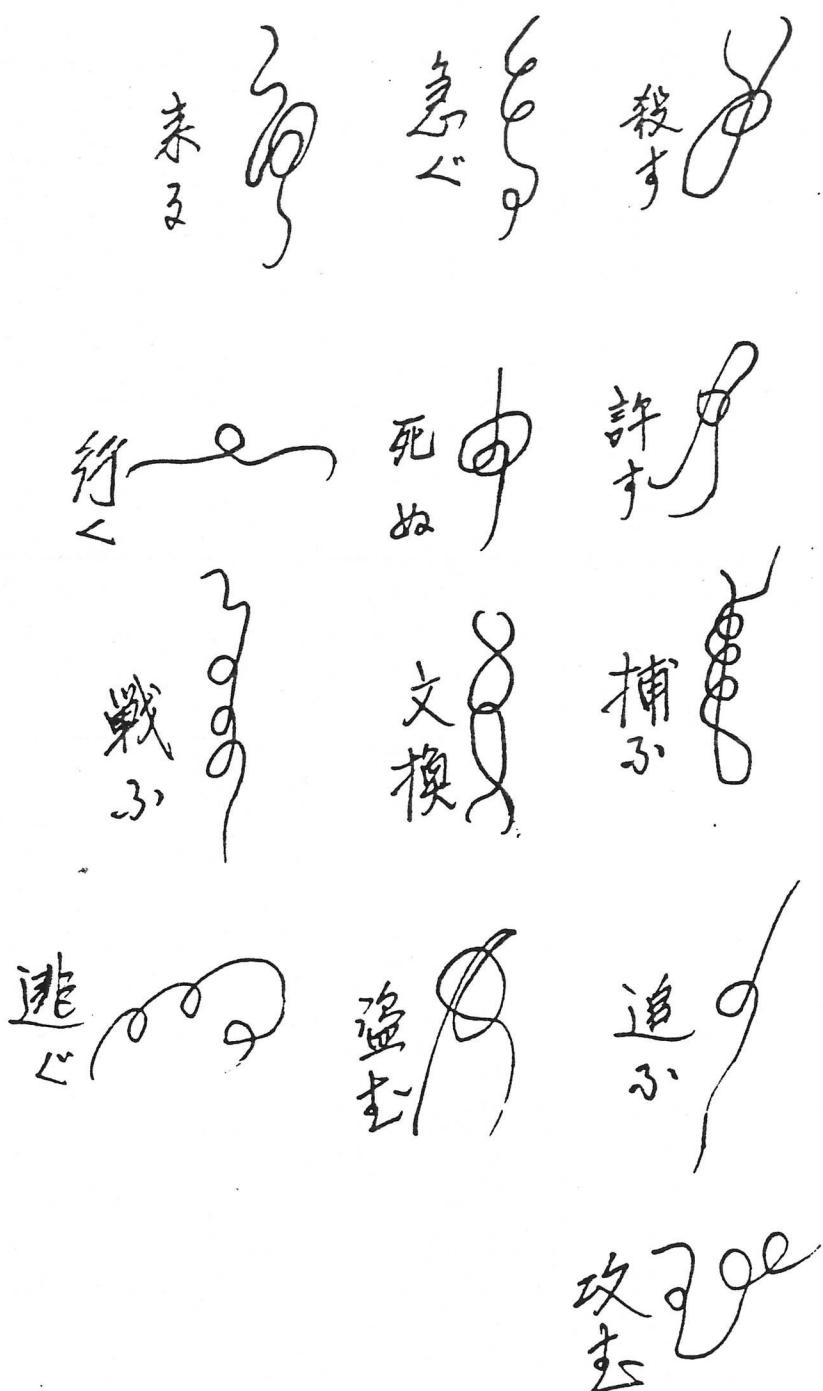
ツ カ ル 木 橋 絵 字



兔 の 耳  
の  
片  
か  
ま  
さ  
か  
り  
利  
鳥  
同  
鷹  
片  
の  
羽  
羽  
耳

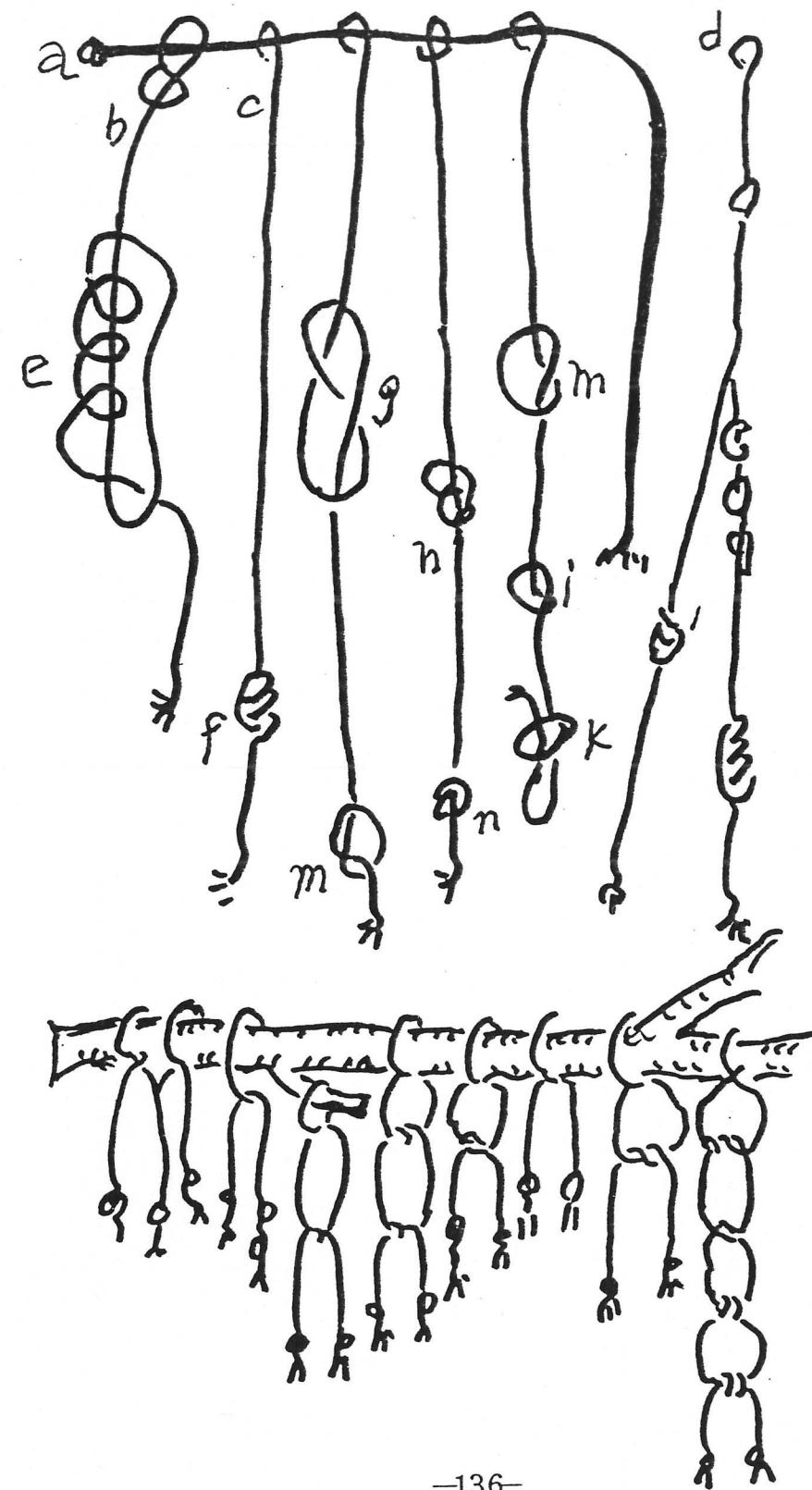


人  
ちよんな袴ま  
きたで（急坂）  
くら…越し等…  
いぬとがた（菱形）  
沢 越え  
はらで（腹当て）  
からかさ  
ひやく…で汲む…  
なんべ（食事係）  
次のなんべ



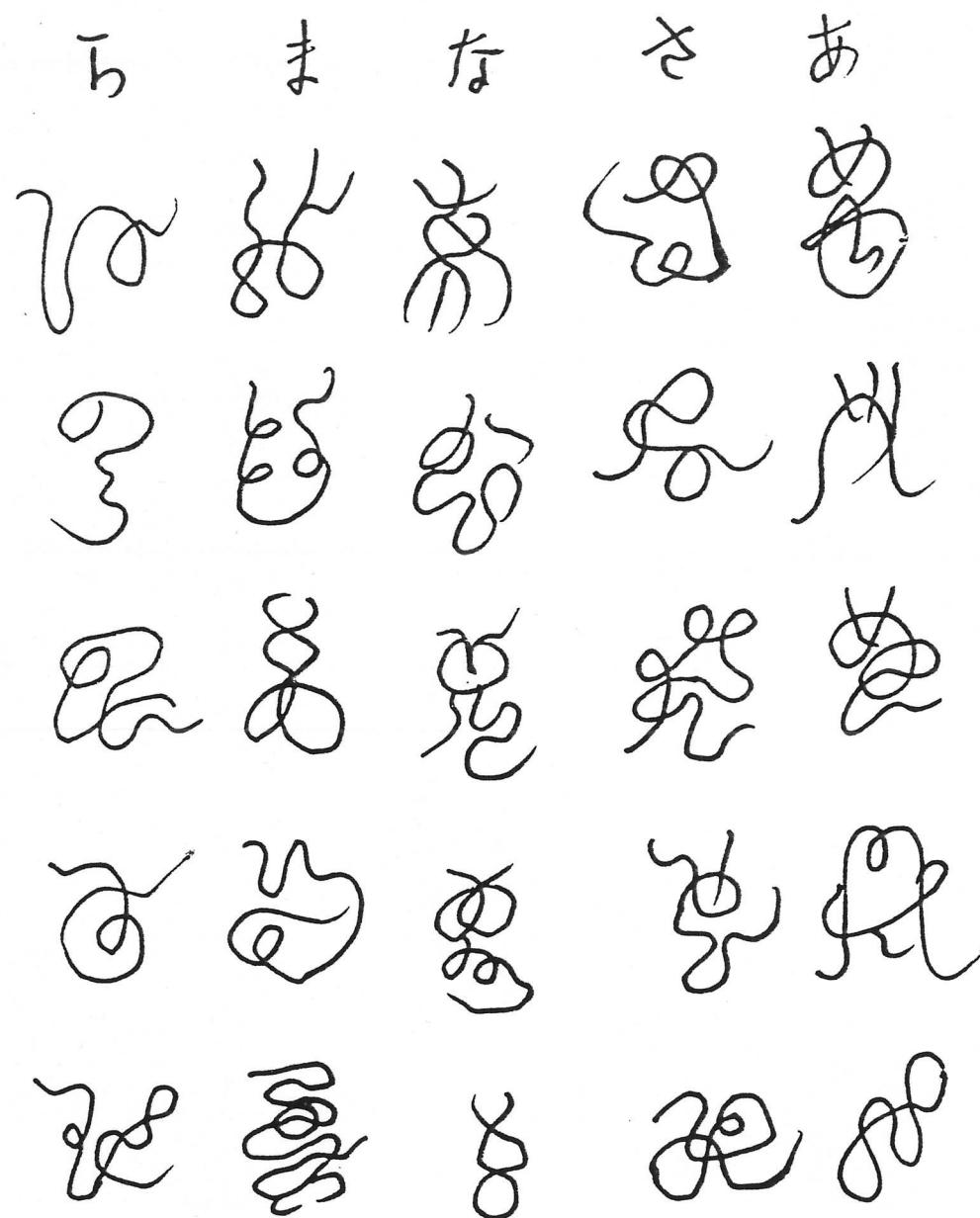
津軽結繩法（青森県市浦村誌より）

インカ結繩法、米国インディアン結繩法、日本古文書「サガラ文書」



(8)

タネコ文字（各行毎に次頁参照して下さい）





### タネコ文字

古代より文字は結繩法や象形形絵図から発達していることは、世界的に共通している。日本でも、結繩法の存在が認められる以上、文字への発達は不思議でない。このタネコ文字は、そのパターンを伝え、数字を除いてほとんど結繩法そのものである。

### (9) ヤマダイ象形文字

前記の東日流三郡誌に紹介されている文字。すでに解読済みである。

### (10) アイヌ石器文字

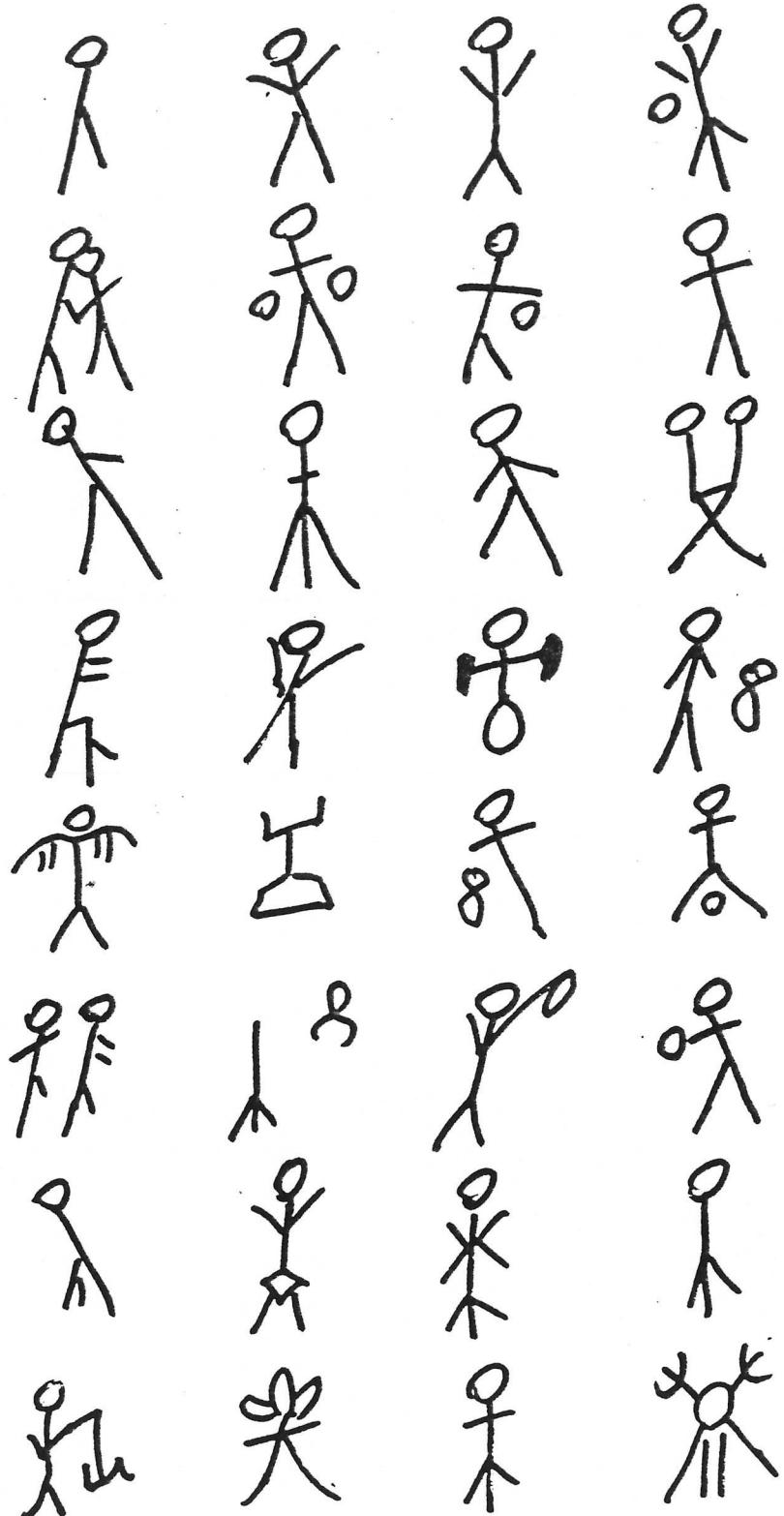
北海道で発見された石器にきざまれた文字。まだ解読不明である。

### (11) インダス文字

日向数夫氏編「古代文字」所載の古代インド文字で、まだ解読不明である。頭部の○印は筆者丹代が附けてみたものである。

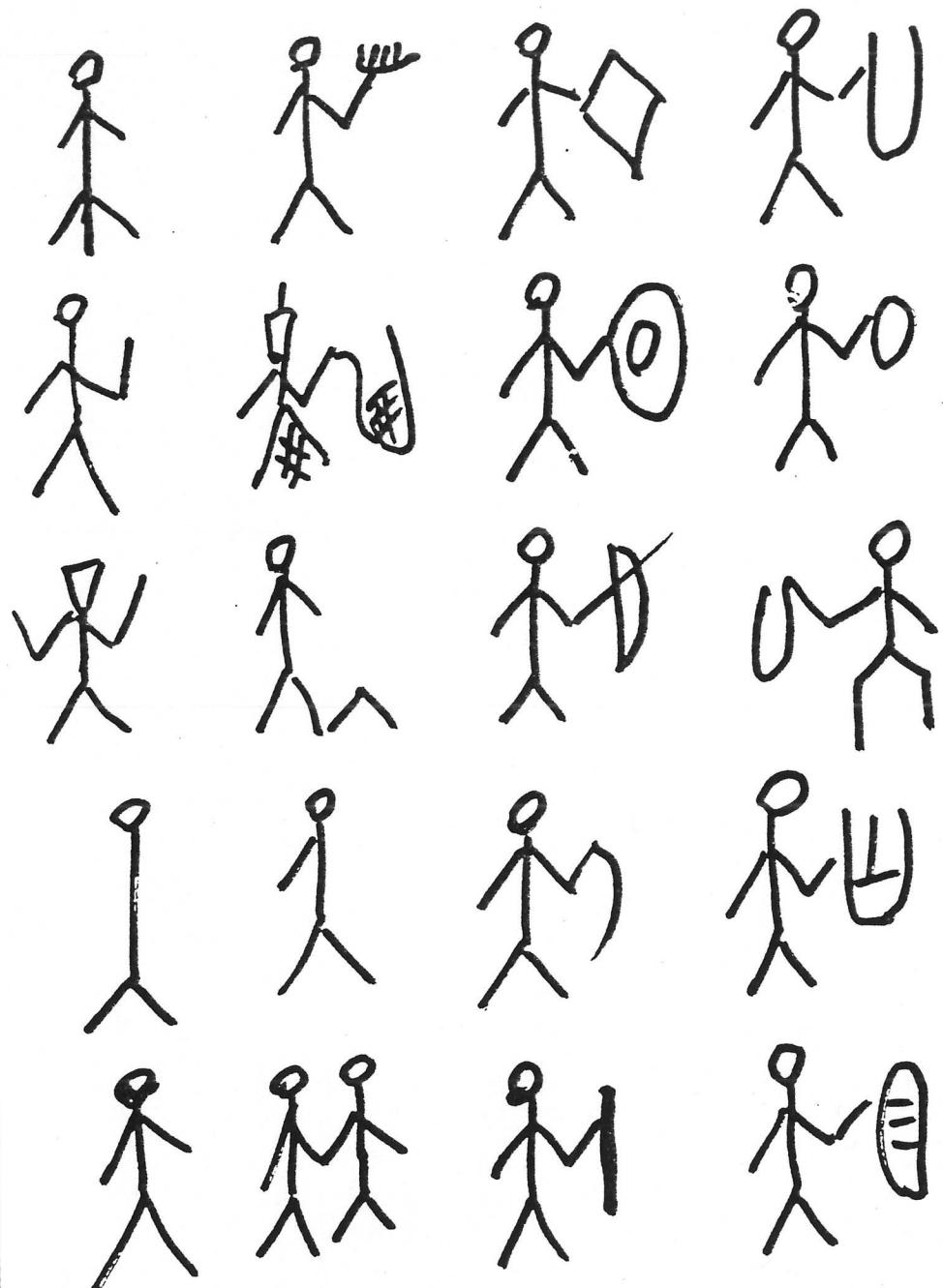
### (12) モソ文字（中国）

この象形文字も日向氏「古代文字」の所載である。漢字の象形文字より以上に、古代的象形が見られるという。解読済みである。（以下四図の内外国を比較見当されたりし）





モ  
ソ  
文  
字



イ  
ン  
ダ  
ス  
文  
字

(13) アヒル文字(五十音順)

## アヒル文字（五十音順）

트	트	나	사	나
과	마	나	사	나
기	미	니	시	비
기	叮	니	시	비
거	며	너	서	비
그	묘	고	신	비
아	묘	하	타	가
이	피	시	디	기
어	피	히	티	기
어	퍼	히	더	기
이	미	히	디	기

アヒル文字

アヒル文字は、対島国・阿比留家で秘蔵され伝えられたので、この名称となつた。日本古代文字の代表とも見られるものである。

日本原住民たる肥人族の文字として、別名に肥人書とも呼ばれる。なお、アヒル文字を見て、これは朝鮮の「諺文」おんもんと似てゐるから朝鮮渡来と考える人がいる。

しかし、事実は逆で、諺文はアヒル文字を参考にして作られたのである。くわしくは後述するのでそちらでご理解いただきたい。

アヒルクサ文字（阿比留草文字）は、いわゆる「薩人書」<sup>サツヒトフジ</sup>と称するものである。平田篤胤はこの書を、アヒル文字の草書体と誤解したが、最近の研究では別種の文字と判断されている。これも日本古代文字の典型的なものである。

(1)

アワ文字は阿波の国、大宮八幡の所伝なり、と平田篤胤は「神字日文伝」に述べている。また落合直澄の「日本古代文字考」にも同様のことが述べられ、アワ文字の分布と名称の

由来を説いている。

## アヒルクサ文字「五十音順」

A grid of 20 pairs of handwritten Japanese characters (hiragana and kanji) for comparison. The characters are arranged in five rows and four columns. Each pair consists of a hiragana character on the left and a corresponding kanji character on the right. The pairs are:

- Row 1: ラ (ラ), マ (マ), + (カ), オ (オ), ア (ア)
- Row 2: ん (ン), ル (ル), レ (レ), ハ (ハ), ニ (ニ)
- Row 3: ワ (ワ), ヲ (ヲ), ョ (ヲ), ヲ (ヲ), ワ (ワ)
- Row 4: ァ (ア), フ (フ), ッ (フ), ヲ (ヲ), ブ (ブ)
- Row 5: イ (イ), ユ (ユ), ベ (ベ), ハ (ハ), カ (カ)
- Row 6: ヌ (ヌ), チ (チ), ミ (ミ), フ (フ), ツ (ツ)
- Row 7: ド (ド), ハ (ハ), ム (ム), フ (フ), ド (ド)
- Row 8: ハ (ハ), ナ (ナ), ハ (ハ), ナ (ナ), ハ (ハ)
- Row 9: ハ (ハ), ハ (ハ), ハ (ハ), ハ (ハ), ハ (ハ)

アワ文字「五十音順」

ア 水 あ ひ ま ひ か く く く く く  
タ も る い ま い ま い ま い ま い  
シ も る い ま い ま い ま い ま い  
リ ち や み る い ま い ま い ま い  
マ ル ト レ い ま い ま い ま い  
チ ち や み る い ま い ま い ま い  
ラ ち や み る い ま い ま い ま い



A vertical column of handwritten Korean characters, likely Hangeul, is shown on the left. To its right are five columns, each labeled with a circled number from 1 to 5 at the top. Each column contains several rows of cursive Hangeul strokes, demonstrating a fluid writing style. The characters in each row appear to follow a similar structural pattern, possibly representing a single word or phrase written in different styles.

神社御神璽例

月山神社

吉野神宮

宇佐神宮

「あまたらすおほかみ」（天照太神）

「すかはらまみち つつしみしるす」（菅原真道 謹み記す）

(19) 菅原真道

天 照 太 神



「つくよみ みこと」（月夜見命）

「すかはらまみち つつしみしるす」（菅原真道 謹み記す）

染筆者の署名にご注意いただきたい。「すかはらまみち」とある。「道真」と名のるほ  
か「真道」ともいふまた次項にあるように「三道実」と書いたこともあるのだ。

これらの書が後世の偽作なら、このようなまぎらわしい操作はむしろ避けて、一般に通

りのよい「道真」の署名を統一するのが、普通であろう。また書の内容にしても、二百年  
前に藤原不比等（六五九—七二〇）が献上したご神名と偶然ながら全く同一なのである。  
偽作だつたら、わざわざ同一のものを選ぶまいと思われる。

(20) 菅原道真

天 照 大 神

「さくらはな ぬしをわすれぬものならば ふきこむかせに ひとつてはせよ」（桜花  
主を忘れぬものならば 吹きこむ風にひとつてはせよ）

「三道実 桜」

菅原道真は、三代にわたる学者貴族の家柄の出である。十一歳で漢詩を作るほどの才能  
に恵まれ、宇多天皇の引き立てを得て異例な昇進を果たし、三十五歳で文章博士となつた。

貴な格の神社ほど、古代文字の御神璽が用いられている。脈々として伝えられてきた古代文字の存在は、とうてい否定し得るものではないのである。

なお、御神名に用いられている文字は、(一)から(四)まではアヒルクサ文字、(五)はアヒル文字(タテ組み)である。

#### 龍体文字

(19) 「あめつちわけかみ」と書かれた龍体文字。青森県にある。「村上清明氏の調査による」



#### 後篇

### 日本古代文字の解明

#### (一) 考古学と古代文献を探る

日本人でありながら、旧来の国文学者や考古学者その他の学者が、日本の古代文字や古代文明の存在を否定したがるのは、その根底に日本が新しい歴史の国であるとの、固定した偏見があるためなのである。

わずか二十数年前までは、考古学上から見た日本は旧石器時代はないとされ、日本列島の日本人の生存も六千年から八千年が限度となっていた。そして日本民族の歴史は、せいぜい二、三千年前頃から始まつたとの見解が、学界の定説となつて牢固として存在していたのだ。

古代文字の起源を持つとされる諸外国の歴史が、四千六千となつていて。したがつ

つていたのが、日本文明外来说を頑として採りづける石頭の学者先生がたなのである。

ところが、日本の考古学の書き換えは、すでに昭和二十四年に始まっているのである。民間学者の相沢忠洋氏によつて、群馬県新田郡岩宿で一万年前の石器が発見されたのがきっかけである。がぜん日本各地に於て、旧石器時代の遺物類が発掘されるようになり、現在ではこの旧石器遺物だけでも数百点に及んでいる。

昭和三十年には、明大の杉原壮介教授が神奈川県横須賀の夏島で、「世界最古の土器」といわれる紀元前一万年前後の尖底土器を発掘している。また「最古の狩人たち」（講談社刊）によれば、栃木県星野刈層遺跡からは十万年前の石器が出土し、前記の岩宿遺跡からは十五万年の石器、また大分の早水台遺跡からは二十万年前の石器が出たことが書かれている。さらに新聞報道によれば、島根県八束郡玉湯町遺跡からは六十万年前の水晶石器が発見されたといわれ、佐渡島で六十万年前の人骨が大学生の手で発見されたことも報じられた。

林信次郎著「繩文文化と彌生革命」には、すでに昭和十年十月に、約十五万年前の米

の化石が釧路市オソツナイ海岸の岩石から発見され、北見市の展覧会で展示されたことが書かれている。また苗代清太郎著「古事記大鏡」には東京田無附近から先年、無紋土器と米の化石が出土した。放射線で分析の結果、今から五万年以前のことの由。これは国学院大学樋口清之博士の提供。北方系日本人が何万年の昔に、日本語を語り、米を食べて云々とある。

このように日本列島における人類史がたかだか六千八千年のものではなく、数万、數十万年に及ぶものであることは、もはや考古学上の古代遺物からも歴然としたことなのである。日本列島上の原住民が何らかの文字すら持たずに、この六十万年を生活してきたなどということは、とうてい考えられぬことなのだ。

また日本に古代文明の存在したことを証しするものとして、全国各地にあるいわゆる巨石遺跡がある。古代信仰上の遺跡として発見された神籠、天津磐境などは、全国に数百カ所もあることは、荒深道斎師を祖とし小島末喜師の所属する「道ひらき」の会で究明されていることである。これらの巨石遺跡は、少なくとも二万年から三万年のものであることは、それらに刻明された星座図などから判明している。

この種の巨石遺跡を ゴイヒ

原市の通称葺嶽山で発見した酒井勝軍という人もいる。(昭和九年)。その時の状況を氏は著書「太古日本のピラミッド」の中で書いているが、葺嶽山ピラミッドは約二万年前のものだということである。最近のこの種の発見としては、昭和五十一年九月に同じ広島県の広島市西郊「のうが高原」で、約三、四万年前の巨石跡が広島陽光クラブの手で見つかっている。百トンクラスの巨石はさらで、中には六百トン七百トンの巨石が、他の地域から運ばれキチンと積みあげられているという。現代科学でも不可能な運搬技術を持った、おろくべき超古代文明の存在を示しているのである。

このほかに日本の古代文明を示すものとしては、いわゆる超古文書といわれるものがある。「記(ウエッフミ)」「秀真伝(ホツマツタエ)」「宮下古文献」「竹内古文書」「九鬼文献」「東日流外三郡誌」その他数種類がある。漢字渡来、仏教伝来によつてしまいに圧迫を受けた古代文字による記録は、神道系の家柄の中で秘かに伝えられるに至つたのである。

全く別々の由緒ある家柄で、門外不出として伝えられたこれらの超古文書が、戦後の機

運の中でようやく陽の目を見るようになった。七百年から千五百年以上も前に、古代文字で書かれたものが、いまやつぎつぎと現代語で発表されつつあるのだ。

これらの古文書の内容に共通なことは、神武天皇以前にウガヤフキアエズ朝が一代ではなく、実に七十二代、つまり数万年に及ぶものであり、荒深道齊の靈言書によると天皇も五百代など、日本古代史が数十万年にわたることを記している点である。これらの古文書の学問的検討には、まだ時間のかかることであろうが、とにかく日本の歴史が二千年や三千年などというものでないことだけは、もはや疑う余地はないだろう。

このようなわけで、日本は歴史の浅い文明後進国であると思ひこみ、そのコンプレックスから出発して「日本に固有の古代文字などあるはずがない」と決めている学者先生たちは、もはや時代おくれと申し上げるしかないのである。

#### □ アヒル文字と諺文の類似について

日本の古代文字である「アヒル文字」を見せると、「朝鮮の字に似ていますね」という人が多い。アヒル文字は「諺文」に似ているのである。日本の学者の中にも、たとえば北

里博士のように「ナガ文昌ミテイ」。

本古代語音組織考」と論ずる人もいる。しかしそれは全く逆なのである。

史学者・白柳秀湖氏はその著「民俗日本歴史」の王朝篇で、谷森善臣の言を引用しながら、次のように述べている。

「天武天皇（六七九）白鳳八年十一月、新羅国から進調使、沙食、金若弼等に引卒されて三人の日本語伝習生が来朝した（丹代註・漢字や漢音なら新羅のほうが先進国だったが）。この伝習生たちは帰国後、直に新羅の新文王（天武ノ持統五年）に仕へていた碩学、葭聰（せつそう）に、日本語「日文」の骨法を伝えた。漢文の幣害に悩まされていた葭聰は漢字に利用することを工夫した。後世これをよんでも史道又は吏読（りとう）と云う。（中略）これは朝鮮文化史上の大功績だが、まだ朝鮮独特の音符文字の発明とまでは、なっていなかつた 中略。

その凡そ六百七十年後、朝鮮世宗の即位二十八年（後花園天皇一一四四六年安三年）に至り、改良されて初めて諺文と称へる国字が発明された。博学達識の王は、支那の借物である漢字の不便を感じ、ここに諺文局を設置、鄭麟趾、申叔丹、成三門、崖恒等に命じ

#### 国字の撰定に入った。

たまたま明の学者、黃鑽が京城にいたので字音を質すため、京城に行くこと十三回に及んだと云う。かくして朝鮮人の日常用語を、そのまま文字に綴る音符が出来上った云々」。

以上のようなわけで、朝鮮諺文は日本アヒル文字の孫文字に当っているわけである。親の代はともかく孫の代となると、伝えたほうも伝えられたほうも、共に忘れてしまっているのでから始末が悪いのである。そして忘れているばかりか、逆に伝えられたほうが本家本元のように、現在では受取っている状態である。しかもその元兇は、どうやら日本の学者らしいから皮肉な話だ。なお、諺文の日本起源説は、平田篤胤もその「神字日文伝」に述べているところである。

白柳秀湖氏の一文には、朝鮮が「漢文の幣害に悩まされた」とあり、それからの脱脚のために諺文が発明されたとある。漢字の難解に悩まされたのはひとり朝鮮だけではない。日本も同じことだったし、それ以上に苦しんだのは本家本元の中国である。そのため中国では中共時代になってから、しきりに漢字の簡略化が進められているが、まだまだ本格的脱脚には時間要することだろう。

日本でも漢字の弊害は、早くから騒がれていた。日本語ともつかず漢語ともつかない「万葉かな」なるものには、当時の人々はよほど苦しんだことだろうと察せられるのである。日本で早くから「片仮名」「ひら仮名」が発明されたのも、そうした事情からの脱皮現象である。しかもその脱皮現象は、今から千二百年も前にすでにに行なわれているのである。

問題は漢字輸入から間もない早い時期に、なぜ漢字の難渋さと不便を感じ覚ったかといふことと、そこからの脱皮をくわだてたとき、なぜただちに「片仮名」「ひら仮名」を発明し得たか、ということなのである。純然たる漢字国では、その脱皮は容易でないことは中国の例が示しているし、輸入国としても朝鮮のように決してらくことではない。朝鮮では漢字から吏讀へ、吏讀から諺文へと移行するのに、七百五十年以上を費やしているのである。

それなのに日本では、漢字が入って間もなく漢字のわずらわしさを痛感し、しかもすぐに別文字を創作できたというのは、日本には古くから固有の簡便な文字があつたからなのである。そしてカタカナやひらカナを見れば、それが日本古代文字と漢字との折衷文字で

あることを感じる所以であるが、古代文字研究者の中には、ヒラカナは日本古代文字から作られたものであるとする人もあり、その親文字を示しているほどである。

#### (二) 古事記からの発見

古事記・日本書記の書かれる以前には、日本に文字はなかつたというのが、これまで的一般常識である。たとえば平凡社発行の「日本語の歴史」の中に次のような記述がある。

日本の古代文化史に大きな足跡をのこした史（ふひと）らの重要な仕事として筆録がある。彼らが漢字の使用を伝えるまでは、日本に個別の文字がなかつたと見得るから記録がないのは当然である……（中略）……「古事記」はその序文で、おもな材料は「帝紀と旧辞」によつたことを明示している。六世紀頃までの国内関係の記録である、この「帝紀と旧辞」こそは、ふひとたちの手ではじめて筆録された古い伝承である云々つまり「日本語の歴史」の筆者は、古事記の親元である「帝紀・旧辞」が漢字で書かれたとの考え方述べているのだ。これは今までの学者一般の考え方である。

ところが古事記の序文に太安麻呂自身が書いたように、安麻呂は「稗田阿礼の誦むとこ

るの帝紀・旧辞」を手がかりとして、古事記を執筆編さんしたのである。記憶の天才であった阿礼の言葉がもとになっている。もし帝紀や旧辞が漢字で書かれたものであるならば、漢文の達人であった安麻呂がそれを自身で読めばすむことで、わざわざ阿礼の口を借りるまでもないことだ。

すなわち帝紀や旧辞は、阿礼には読めても安麻呂には読めない文字、つまり日本の古代文字で書かれていたことを意味するのである。<sup>ひえ</sup>稗田阿礼は古代文字と漢文の橋渡し役、いわば通訳として安麻呂のために働いたのだ。

このへんのところをもう少し具体的に、古事記の序文によつて検討してみよう。

「是於 天皇（天武天皇のこと）曰く朕聞く<sup>①</sup> 諸家之齋（もたらし）たる帝紀及本辭（＝旧辞）既に正実に違ひ多に虚偽を加ふ……中略……時に姓は稗田 名は阿礼と云う舍人あり<sup>とねり</sup> 歲二十八才、生来聰明で、どのような<sup>②</sup> 文章でも一度目で見れば暗誦し一度聞いたことは忘れない そこで天皇は 阿礼に命じて 帝皇の日繼及先代旧辞を読み習わせたり……中略……ここに天皇（元明天皇のこと）は帝紀及び旧辞の違いを正そうとして臣 安麻呂に命じて 阿礼が誦む所の 先帝（天武天皇）の御命令になられた

旧辞の類を撰録して 差し出すようと仰せられた云々」

この序文を見るだけでも、古事記以前に「文字あり」が十分にうかがえると思うので、少しく述べてみたい。

#### ① 諸家の齋たる帝紀・本辭

「帝紀・本辭」という文字が、古事記の序文中に九回も出てくる。これは天皇紀や国史の記録書であることは学者も認めている。史書である以上は当然のこと「文字」で記した書物であったことになる。

また「諸家のもたらした」というように、これらの史書、記録は五家や十家からのものではない。都近辺の豪族はもちろん、全国地方豪族、旧家から集納された沢山の史書である。安麻呂は「吾々は今、沢山の史書の中から、正しい個所を選んで古事記を作った」と述べている。

さらに安麻呂は「この帝紀・本辭は、私の読み得ない文字だから、稗田阿礼<sup>ひえあられ</sup>に誦んで頂き、私はこれを色々苦心して、漢字で書いた」とある。安麻呂の読みぬ字で書かれた沢山の史書があったとは、わが国に古代から伝わる文字があり、それによって書かれた書物が

全国にあったことを意味するのである。

## ② 文章でも

阿礼が幾千万語を述べたとて、それはコトバであって「文章」ではない、文章とは文字で書かれたものであり、ここでも「文字」の存在が明らかである。

## ③ 目で見れば

記憶力抜群だった阿礼は、「一度目で見れば覚えた」という。目で見るというからには、「文字」を見たことを意味することはいうまでもない。（古代文字）

## ④ 読み習わせたり

数年前に「津軽地方で、ヤマダイ国王の安日彦や長髓彦王の伝承の古文書が発表され、この中に「語部文字」が紹介された。語部文字の存在はわが国獨自で、「一八一」世界にも類例がない。それによって語部にも文字のあったことが判明したのだが、このことから稗田阿礼の語部としての在りかたも類推されるのである。つまり語部阿礼も、人のコトバを耳から入れて記憶したばかりでなく、やはり古代文字で書かれた物を記憶にとどめて伝えたのである。したがって「読み習わせたり」ということは、きわめて当然のことだったのだ。

## ⑤ 詠 よ む

大辞典を引いてみると

「詠むことは節をつけて読むこと。また事前に何かを読んでおいて暗記し、それを唱える場合に詠むといふ」とある。いざれにしても、文字で書かれた物を記憶したこと間に違はない。阿礼はそれを詠み聞かせたのである。世上に言う、決して口先丈の暗記力が強かった丈ではない。

## ⑥ 撰 錄

口で伝えたコトバを「撰録する」とはいわないだろう。文字や文章があつて、はじめて比較検討し、自分の欲する撰録ができるのである。かずかずの記録があり、伝説があり、和字、象形文字、語部文字（結繩文字）などがあつて、それらを阿礼が解読し、それを通訳しながら安麻呂に伝えたのもとに、撰録していくのである。

以上「古事記」の序文だけを見ても、その成立以前に「古代文字」のあつたことを、十分推察し得るのであるが、さうにここで「日本書記」によってそれを確かめてみたい。

#### 四 日本書紀からの解明

日本書記の欽明天皇二年三月の条に

帝王本紀多に古き字ともありて撰び集む人 しばしば遷り易わることを経たり 後人習い読む時 意を以て刊り改む 伝へ写すこと既に多にして 遂に舛雜(たがひまよう)（ひとたがひし）こと)を致す…… 一往識り難きをば 且しく 一つに依りて撰びて 其の異なることを註す 他も皆此に効(なづら)へ

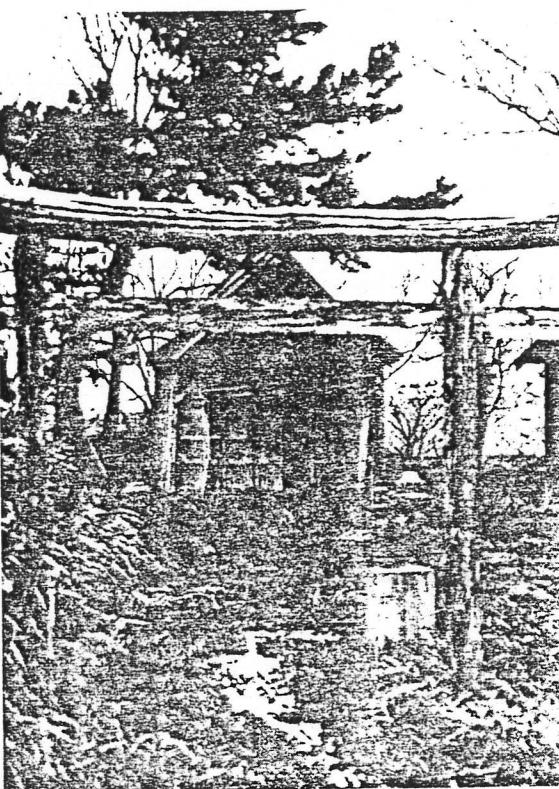
傍線の部分について、検討を加えてみると

① 多に古き字ともありて

たくさん、「古レ字」があつたというのである。日本書紀が漢字で書かれた時点で「古レ字」とは何か、漢字渡来以前の固有の文字を意味することはいうまでもないであろう。この短かい一文字は、日本に「古代文字あり」の有力重大な証明ともいえる。

② 読むとき③写すこと

「古レ字」で書かれた書物を後の人人が「読み」、それを自分の考えでげづつたり改めたりして、書き「写す」ことが何度も繰り返されるうちに、それらの内容が互いに違ってき

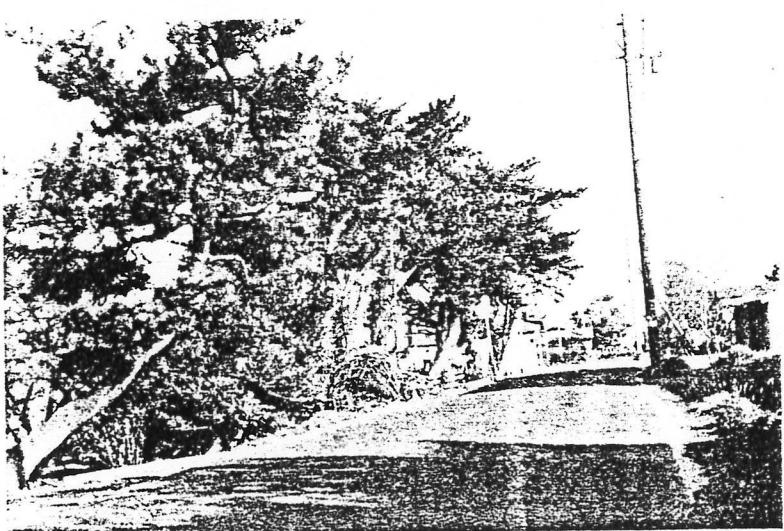


青森県北津軽郡稻垣村にある。

語村にある「語」神社

昔、語部があつた証拠

語部文字という文字あり



同「語村」の現状

昔、稗田阿礼が語部であつたといふ。

今も語村がある。

てしまつたといふのだ。全国各地の豪族や旧家に、保存された史書類がたくさんある。それらが少しづつ内容を異にした状況がうかがわれる。そしてたくさんの史書があつたということは、よほど古い時代から文字があり、書物として書きつがれたことが想像されるのである。

#### ④ 一つに依りて

全国から集納されたたくさんの中の史書類は、それぞれの内容に違つがあるので、「日本書紀」にまとめるときは、わかりにくくところはとりあえず一書を拠りどころにして、異説を註記したといふのである。「日本書紀」の中には、「一書に曰く」という表現が一二三一ヶ所に出てくるが、前記のように「書き写し」の過程で少しづつ異説ができてしまったのだ。その異説がたくさんあるということは、それだけ長い時代を経てることを明かしていることになる。此の「一書に曰く」は別本に曰くとか日本に曰くとか云つてゐる。

以上のようなわけで、「記・紀そのものを検討するだけでも、記紀以前に日本固有の古代文字のあつたことは、否定しようのない事実」ということがわかるのである。

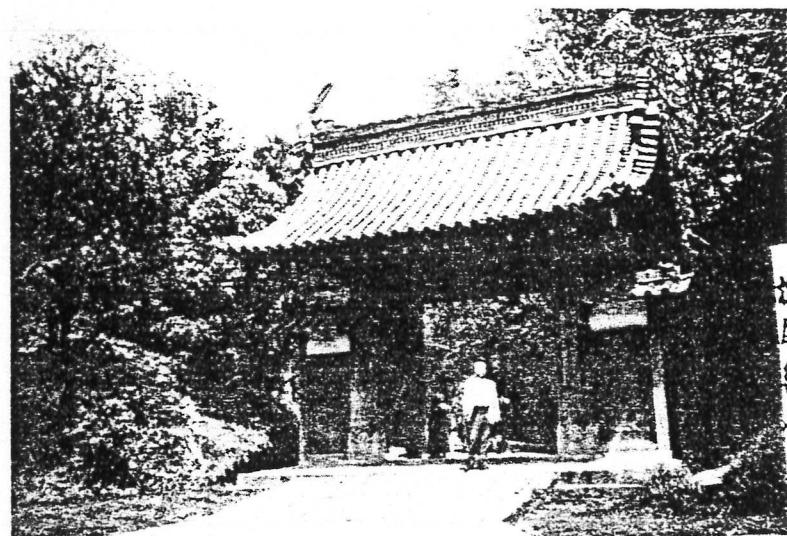
#### 五 神宮文庫について

神宮文庫沿革史（神宮司序編）によると、神宮に於ける神書記録収蔵の歴史は古く、称徳天皇（七六六）天平神護二年十二月、今日より一千二百年前に、内宮に文庫があり、又外宮にも鎌倉時代亀山天皇（一一六一）弘長元年六月には神庫の名がみえていた。この内宮文殿と外宮文庫とは、神宮文庫の源をなすものであつて、我が国の図書館発達史上に、大きな地歩を占めているものである云々——とある。

その後、各種文庫が献納されており、その主だったものとして、神苑会の宮崎文庫、岡田文庫、林崎文庫、旧久邇宮家下賜本、御巫本、八田家本、廉東文庫、三条家本、荒木田家本、山口家本、孫福家本、桃園文庫、花園文庫、神宮古事類苑編輯資料、微古館、農業館蔵書移管等がある。

こうして神宮文庫の蔵書が増加すると共に、古代より神宮に秘蔵せられ、または司家に襲藏せられてきた神宮や御鎮座祭儀、奉幣、造當、遷宮、法制、参宮等に関する、幾多の古記録をはじめ、神道、文学、史学等の広範にわたる珍籍奇書が収納せられた。それが今日では、総蔵書数約二十五万点となつたのである。

神宮文庫正門  
(立つてゐる人は小島末喜氏)



神宮文庫正面玄関

一般公開は明治四十年四月からで、その後、皇學館大学開校に当り、大学図書館の併置を見るに至った。学術振興上、まことに図り知れない貴重な宝庫といえるだろう。

閲覧、撮影は何人にも自由であるから訪れるがよからう。

（六）山田孝雄博士の否定論に反論する

本書でご紹介した神宮文庫の「神代文字」の写真を、ひとりごらんになつたかたならそれらの中から歴史の重みといふか、実在する一人ひとりの登場人物の気配とでも云うべきか、とにかく微妙な真実感を感じとられたことと思う。これらの染筆群を、根拠のない偽作物と考える人は、まずないのでなかろうか。

ところがおどろくことに、世に有名なある学者はこれらの古代文字を目して「偽作だ」と断じてゐるのである。その学者は神宮皇學館学長山田孝雄博士で、博士は昭和二十八年「芸林」二月、四月、六月号誌上で、「所謂神代文字の論」を発表し、漢字以外に古代文字などといふのは一切偽作であると称し、この神宮神字に対しても詳しく述べてゐる。

山田博士はすでに故人ではあるが、私も有縁によつてこの神代文字を全面模写し、しか

も一年余を費してその解説を果たしてきたり。博士の月論をそのまま放置することは、古代文字実在に対し、事実に反する観念を生む結果をもたらすと考えるので、簡単ながら反論を加えておきたいのである。

山田孝雄博士は皇學館大学の学長をされ、神宮文庫の館長も務めており、この神代文字を調査した結果、「文字は墨で雙鈎にした所謂籠字にしたもので（中略）、その紙質、墨色を見るに明治の初年頃を下るものであろうが、それを上ることのないのは明らかである」として、それらを偽作物であると断じてゐる。

山田博士の云うように、たしかにこの「神代文字」は明治初年頃に、新しく書かれたものであろうことは私も認めるのである。しかし、あの古代文字が新しく書かれるには、元のものがなくてはならない。それを無視して新しく書かれたから、それは偽作というのは論が粗雑すぎはしないだろうか。

私は昭和四十八年末から一ヶ月余にわたって、これらの「神代文字」を書写したが、これを山田流にいえば、昭和に書いたから偽作だということになってしまふ。しかし、私はもと

のものがあつて、その上に透明な紙をのせ原字を忠実にフチどりしていくのである。私は忠実な「書写し」を行なつたが、「偽作」はしていない。根拠のないものを、全く新しく作り出したわけではないのである。

山田博士はさらにいふ。「これらは何を基にして写したのかも分からぬ。とにかくこれらは神宮教院で製したもので……」と。山田博士は偽作と称しながら、「何を基にして写したのかも分らぬ」と、ここでは原字の存在がなければ出来ないはずであることを、暗に物語つてゐるのである。語るに落ちるとは、このことではなかろうか。

また山田博士は「神宮教院で製したもの」と書いてゐるが、もしそれらが偽作といふならば、神宮教院ではこのような大がかりな偽作を許したことになる。ごらんいただければわかるように、染筆者名は五十八名になつておらず、書体なども千差万別といいたいくらいであるから、偽作にたゞさわったものが一人や二人では済まないことになる。

「神宮百年史」（神宮司庁発行）によれば、明治政府の政令により明治五年に大教院が設置され、教宗には当時総理大臣以上の格の朝彦親王が任命されている。伊勢神宮が聖域として、いかに嚴重な監督下にあつたかを考えれば、その中の大教院で大がかりな偽作集

団が活動するなど不可能なことであるし、また何のためにそれまでして古伊勢神の仕事しなければならないか、およそナンセンスとしかいよいのがない。

山田博士はまた、自分の論文は「伊勢神字を読んだ結果」書いたものだと云っているがもしほんとうに原文を読んだとすれば、その解説の力は一体どこから得たというのだろう。古代文字は長年の研究がなければ、とうてい解説など出来ぬものである。げんに私は十年間も古代文字を研究し、しかも二年以上かかるてなおかつこれら伊勢神字の全部を、完全には読解できなかつた。同じ古代文字でも、一人ひとり書きぐせというものがあつて、「神字日文伝」の模範字体を読むようなわけにいかないのである。察するに山田博士は、伊勢神字の二十八葉に符着してある、漢訳の文字を読んだに過ぎないのでなかろうか。本文を読めずに読んだふりをしたとすれば、それは甚だ学者らしくもない態度である。またもし事実全部を読んだとすれば、それだけの研究をした経験があつたことになり、研究対象になる古代文字の存在を否定するわけにはいかないだろう。

いざれにしても、山田博士の論文は、まことに矛盾鐘着のはなはだしいもので、それは自己本来の「古代文字否定論」を、無理にも押し通そうがためであつたとしか考えようが

ない。

私自身はこれら九十九葉の染筆に接して、そこにいかなる作為を感じなかつたのである。九十九葉の作品が九十九人の名でなく、五十八名の染筆者となつてゐるのも自然さを感じる。一人の人物が三点、四点の作品を書いていたり、また藤原秀郷は二百十八字、藤原忠文のごときは一百七十四字という長文を、終始整然とした書体で書いているなども自然な感じである。

偽作の魂たんなら、一人の人物名で何点も書くことや、敢えて長文の作を遺すなど無意味な労力でしかないだろう。ましてわざわざ無署名の偽作などを作ることが、果たして何の役に立つというのだろう。

しかも書体や筆勢はそれぞれ異なつており、永年にわたつて熟練した人の筆先きもあれば、雄渾とも云えるものあり、また女性はいかんも女性らしく、あるいは書き馴れぬたどたどしい文字もあるなど、一人ひとりの特長は今もなお歴然としている。何度か書き写された末の明治の染筆でさえ、そこにそれぞれの人物の特長が遺つてゐるくらいだから、原染筆はどんなに生き生きていたかとの想像すら刺激されるのである。

また現存の染筆の真実味を感じさせるのは、文字の欠落や虫喰いの跡がそのまま空けてあることだ。以前のものが時代を経たため、虫喰いになり字の欠けた部分があったのを、そのまま忠実に再現したことが、そこから素直にうかがえる。私も模写に際しては、そのまま写しとったものである。

山田博士の偽作論に対する反論はまだいろいろあるが、最後に一つだけあげて終ることにする。その一つは他でもない染筆者の中に太安麻呂、稗田阿礼あれ、舍人親王の名前のあることだ。しかも、この三人は「古事記」が朝廷に上納される五年前に、これらの染筆を奉納したことがその署名年月日からわかるのである。

記・紀以前に、日本固有の文字はなかったというのが一般的の常識である。偽作をしようといふほどの者が、その常識を敢えて犯して、しかも記・紀成立の五年前の日付で書くなどということが考えられるだろうか。偽作論がいかに無根拠なものであるか、この一筆からだけでも知られるのである。

さらに山田博士はこれらの神代文字を評して、「いわば無邪氣な氣まぐれなすさびとも

いふべきもので……」などと書いているが、染筆者の中には後醍醐天皇や後龜山天皇の御名まで見えるのである。天皇の尊厳がかつてないほど説かれた明治時代に、果たして天皇の御名を使ってまで、「氣まぐれなすさび」の偽作を書く勇気の人物がいたであろうか。しかもそれを神宮教院の中で実行し、神宮文庫に保存するような狂氣じみた集団が存在し得たであろうか。そのようなことは、戦後の日本ならざ知らず、当時の情勢下の日本ではとうてい考えられることではない。年輩からいっても、また神宮文庫の館長という職にあったこともある点から考えても、明治といふ時代がそうしたことの不可能なことを充分承知のはずの山田博士が、なぜこのような軽薄としか云いようのない暴論を書いたのかまさに地位と権威を笠にきたゴーマンな処置といふべきである。

(七) 「古語拾遺」の解釈を学者は誤った

「日本には古代、文字なし」と後世の学者、学界は定説となっているが、その原因はほとんど「古語拾遺」と「新撰姓氏録」にある。

即ち、齊部広成が、その著「古語拾遺」の序文で、

「藍し聞く、上古の世、未だ文字あらず、貴賤老少口々に相伝え、前言往古して忘れず書契以来 古を語るを好まず」とあり、萬多王編述の「新撰姓氏錄」には

「神世 是不開 書き写すもの 伝えるなし」とある等の事から、之を錯覚して促えた事により、「記紀を編述した当時の三善清行の改元の勘文」に辿りつく。

即ち、「古語拾遺の序文に云う位だから、古代に文字はなかつたといえる。従つて古代に書いた記紀の時代も日本に文字はなかつたのだ」と謳歌する。本居宣長も否定した。然らばその誤を指摘する。「先づ「藍し聞く」と云うからには「分らない他人が言つてゐる」のであって自分が決定したのではない。之を後世は広成が言つたと押しつけている。之を後世では広成の決定とされている。

又、広成が生れたのは、聖武天皇の神龜二年（七一五）年で、古事記完成との年代の差は僅か十三年である。姓氏錄でも、古事記との差は一〇三年しかない。

即ち「僅か百年前の昔を上古とか大昔、神世」と云う人はない。広成にとっては「古事記の出来る直前は現代であり上古ではない」のである。広成の言う「上古」とは後世から言えば数万あるいは十万年以上の上上古である。広成を相手にせず、彼と万年と違わない、

古事記作成の稗田阿礼の書が初めて此書で見つかつたから気がつくのだが、彼から考えるとよく判る。阿礼が古代文字を書いているから「自分達の現代は文字があり、後世に言う古代は此の時代を誤つて含めている」のだ。

即ち、広成の言う「上古の世」は彼直前をさしたのではなく、太古や上上古、神世」であり、日本民族発祥の頃をさしたものである。最近の遺物の出た頃を考古学から推定して、六十万年前後と見てよい筈である。此の大昔には文字はなくて、「後世言う古代、文字無し」は上上古には正しいが、近古たる阿礼時代ではない。

古語拾遺から百年前で古事記の成立時は上古ではない。然し「古代、文字なし」は「広成直前を含む」と云う。宛も歴史に暗い、年代の正確に分らぬ後世の学者は「上古も上上古も同じ」にしたので「此の上古を広成直前以前の昔」としたのだ。宛も水平線を見れば、一里向うも、万里向うのアメリカも同じ水平線の向うに見えるのと同じである。依つて水平線と古代を相似とするとよい。上上古も上古も古代も一つにしてゴッチャにしたのだ。之を後世の学者は誤つて「古語拾遺にも上古の世、文字なし」と言つてゐるのではないか。上上古にはなかつたから上古にもなかつた。上上古と上古を合せて古代である。故に古代

に文字なしとなる。私達の言う上古とは阿礼の直前の時代だ。即ち、古事記の直前には文字はなかった。

即ち、日本の古代には固有文字がなかったから、漢字を輸入して初めて文字を使う様になつたのだ。」と。

之は後世の学者及学界の上古の決め方の間違いから起つた事で、古代の中「古事記以前一萬年間は文字は実存した。」「古代日本には、文字はあった」のである。此の書が示す通り、阿礼と十三年しか違わない広成以後にも約百枚の古代文字が神宮文庫に実存している。之を実証せんが為の此の度の出版である。此の奉納文は各分野の生きた証拠である。

稗田阿礼（古事記完成）

13年

己部広成誕生  
同（古語拾遺）

95年

新撰姓氏錄

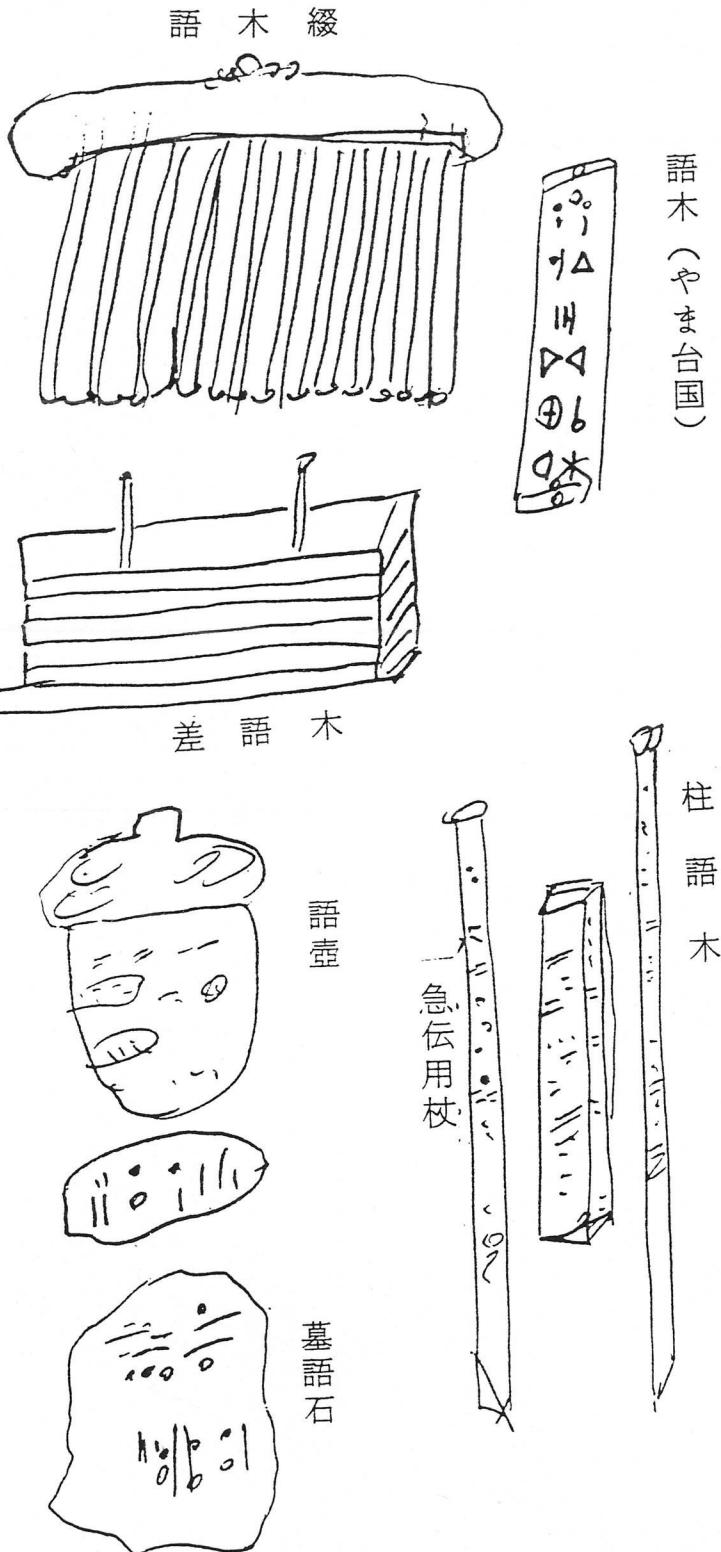
後生の学者  
昭和

103年  
上古  
上上古

-180-

実例、語部文字多し

——市浦村誌より——



あ  
と  
が  
れ

考証を抜きにして、解説其の他に不備を承知で「かかる貴重なる宝物が事実存在する事を一日も早く全国に知らせたい」ために、取あえず出版した。今後、之を皆様が訂正し、各見地より取上げて頂きたい。

終りに吾郷清彦先生、林信一郎先生、青森考古学会の皆様の絶えざる御支援に感謝する。染筆崩壊寸前に、全量模写し得た感激に浸りつゝ終りに坂本弘氏が原稿整理に大いに助力されたのに、感謝の意を表する次第である。

(終)

主たる参考文献

敬称略著者又は発行所	書名	書名	古代文字	古代文字	古代文字	古代文字	古代文字
以呂波問弁	伊勢神宮の原像	大なる邪馬台国	開闢神代曆代記	鳥越憲三郎	全	僧諦忍	日向数夫
古事記大鏡(二冊)	古事記全講	古事記外	岩木町々誌	群書類從	公卿補佐	公卿辭典	吉澤
古代人名大辞典(七冊)	書き改るべき日本歴史	岩木町々誌	九鬼文書の研究	成田末五郎(代表)	沖野岩三郎	吉川弘文館	吉澤
苗代清太郎	苗代波書店	尾崎陽殃	吉川弘文堂	三浦一郎	坂本清和補訂	吉川弘文館	吉澤
神字考	神代正語	市浦村誌	四魂学(外)	新撰姓氏錄	神字日文伝	古語拾遺	吉澤
今井直孝	今井居宣長	(竹内)	市浦村役場	荒深道	萬多親王	平田篤胤	高津繁春
				斎	齊部廣	橋本成	技誠記
				吉	吉	吉	吉

神字考	酒井勝軍	日本歴史	岩波講座
人皇正統記	三輪義熙	日本上代史の研究	津田左右吉
神代の文字	(民俗)日本史	日本社会文化史	白柳秀湖
新葉和歌集	日本古代史発掘	日本語の歴史	講談社
糸日本記	日本古代文書考	日本古代文書の謎(外)	"
先代旧事本紀	日本書記(二冊)	日本書記(二冊)	凡社
上代仮名遣の研究(外)	万葉集(四冊)(日本古典文学全集内)	万葉集(四冊)(日本古典文学全集内)	岩波版一社
尊卑分脈	南北朝虚像と実像	南北朝虚像と実像	
神代文字の論	日本神代文字	日本神代文字	
日本神代文字論	ホツマツタヘ	ホツマツタヘ	
「にっぽん字の発掘」	田多井四郎治	田多井四郎治	鈴木貞一
日本上代史の研究	山田孝雄	山田孝雄	落合直澄
大日本全史	酒井由夫	酒井由夫	平凡社
大日本神名辞典	岡本茂夫	岡本茂夫	岩波版一社
天皇の歴史	梅田義彦	梅田義彦	山閣
天津教古文書の批判	ねずまさし	ねずまさし	松善之助
日本古代国家論	狩野亨吉	狩野亨吉	吾郷清彦
	津田左右吉	津田左右吉	吾郷清彦

(参考文献終)

## 附録

神字彙

かむなたぐひ

- 『神字彙』の解説  
岩崎長世篇(註漢読は神字彙)  
石見別 吾郷清彦  
いわみわけ あこう  
かむなたぐひ

『伊勢神宮の古代文字』が再々版されるにあたり、著者の一人、小島末喜氏より、是非『神字彙』を附録したいので、解説文を書いて欲しいとの依頼があつた。

本著の序文にあるごとく、アヒルクサモジは、伊勢神字九十九点中、五十七点もあり、六〇%近いシェアを占める。しかも、アヒルクサモジは草書体にして、同形類似のものが多く、判読に苦心することは、両著者述懐のとおりである。

ここにおいて、判読の基準となるものに岩崎長世編著の『神字彙』があることを見逃してはならぬ。

岩崎長世の履歴は、今のところよく判らない。ただ本彙の序(此書造れるゆゑよし)から推して、『神名日文伝』の著者平田篤胤の門弟であること、そして本彙を著わした頃は、

\*大伴の御陣の浜屋に住んでいたことを知るのみだ。（註\*大伴とは現制の何県何郡にあるのか目下不詳）

さて本彙は、ヒからヶまでの四十七字が、各字ごと十三種づつ表示されている。うち二字は、アヒルモジのタテ組・ヨコ組。従つてアヒルクサモジは十一種類となる。

これは慶応元年（一八六五）に刊行された。従つて本彙は、神字日文伝（文政二年・一八一九）より四十六年後に上梓された訳である。十一種のアヒルクサモジを集めるに当り、長世は当時として随分苦労したに相違ない。それ故私たちは、彼の努力に敬意を表し、彼の功績を大いに讃えねばならぬ。此の本程文字をよく集めた本は他にない。

私たちは、彼の労作によつて、アヒルクサモジで記された諸誌料が判読できるのである。その意味で、『神字彙』が本著の附録として加えられることは、神の思召しと喜ばずにはおられない。

近江国犬上郡鷄冠井今村の里長寺村忠勝の嫡子明敏は『神字彙』を、平田篤胤・同門人の著述収蔵庫たる『伊吹遷屋文庫』に納むべく刊行したと、この跋文に記している。

この寺村明敏の善行もさることながら、本彙が、輝かしい『伊勢神宮の古代文字』の附録

として、再び脚光を浴びることは、大いに意義あることだ。きつと泉下の岩崎長世も「わが意を得たり」と喜んでいることと思う。また本著を手にする諸賢も深謝するに相違ない。この神字彙は、一般に『シンジキ』と読まれているが——名著『神字日文伝』も『カムナーヒフミノツタヘ』と訓読みするのが正しいごとく——『カムナノタグヒ』と訓むべきで、それが編著者長世の真意であろう。

此の附録が世に出るのは初めてであり、今後古代和字の解説は一挙に前進するであらう。

本著の再々版を祝しつつ、本彙の解説を終る。

昭和五十四年六月十一日 記

かみなみだら  
神字彙 全

此書造(つき)るゆゑよし

一 あた吾師平田翁の著されある。神字日文傳によりて。  
其神字もて物かゝると爲る時、又みる見出安のらち  
めじあめに其十三文の同し字を、一一部ニミ寫し纂  
えて、やがて如斯<sup>カ</sup>名づけあるなり。其遺文どもの出自  
まもいさゝう首めに集免記して合圈と云

一 師翁ハノミに訂正して古史本辭經<sup>アラタ</sup>載し給へる。五  
十連音が眞字<sup>マツシテ</sup>。まゝ此日文十二體の草字中より。且安  
く書た安うらちの筆を以五十連音<sup>アラタ</sup>寫し轉めて。

○ 神字彙

手習ひの爲<sup>ハ</sup>えじめに記しつ。神字うき習ハまくた  
もとむ人<sup>ア</sup>づ此<sup>ハ</sup>一體の五十連音を。難波津淺香山  
と思ひとらう。

一 第四文大和國法隆寺<sup>ス</sup>傳ハれる。聖德太子の御眞蹟  
といへる一體。本編<sup>ハ</sup>ハ縮字を出され<sup>ハ</sup>るを。今ハ其  
臨寫といへる方を載<sup>ハ</sup>し<sup>ル</sup>。本編<sup>ト</sup>ナ<sup>ト</sup>なるを勿  
あやしこそら慶應<sup>ハ</sup>元めの年<sup>乃</sup>さはも第<sup>アリ</sup>。大伴  
の御津迺濱屋<sup>ハ</sup>はりと山崎長世<sup>シロ</sup>しる



文庫本を以て其の後之の後  
又新鶴巣村今村乃里長寺村達勝之  
子久山源氏のたる者也

アラモの歴史

卷之六

本題之解法，當以四水之形為基準，則其一端之水，必與其對角之水，同屬一形。故此題之解法，當以四水之形為基準，則其一端之水，必與其對角之水，同屬一形。故此題之解法，當以四水之形為基準，則其一端之水，必與其對角之水，同屬一形。故此題之解法，當以四水之形為基準，則其一端之水，必與其對角之水，同屬一形。

天保癸酉紀元百七十八萬五千百年、昭和四十二年二月十六日(推葉國見仇佐)天降"白宮"小島才吉

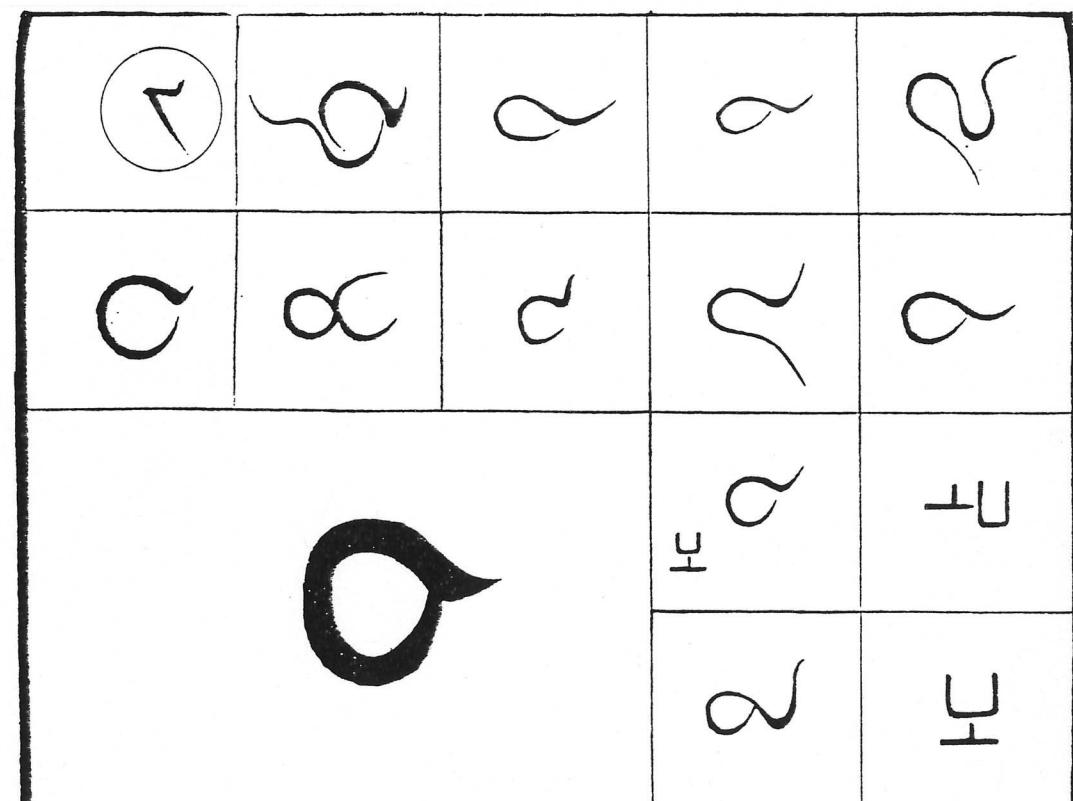
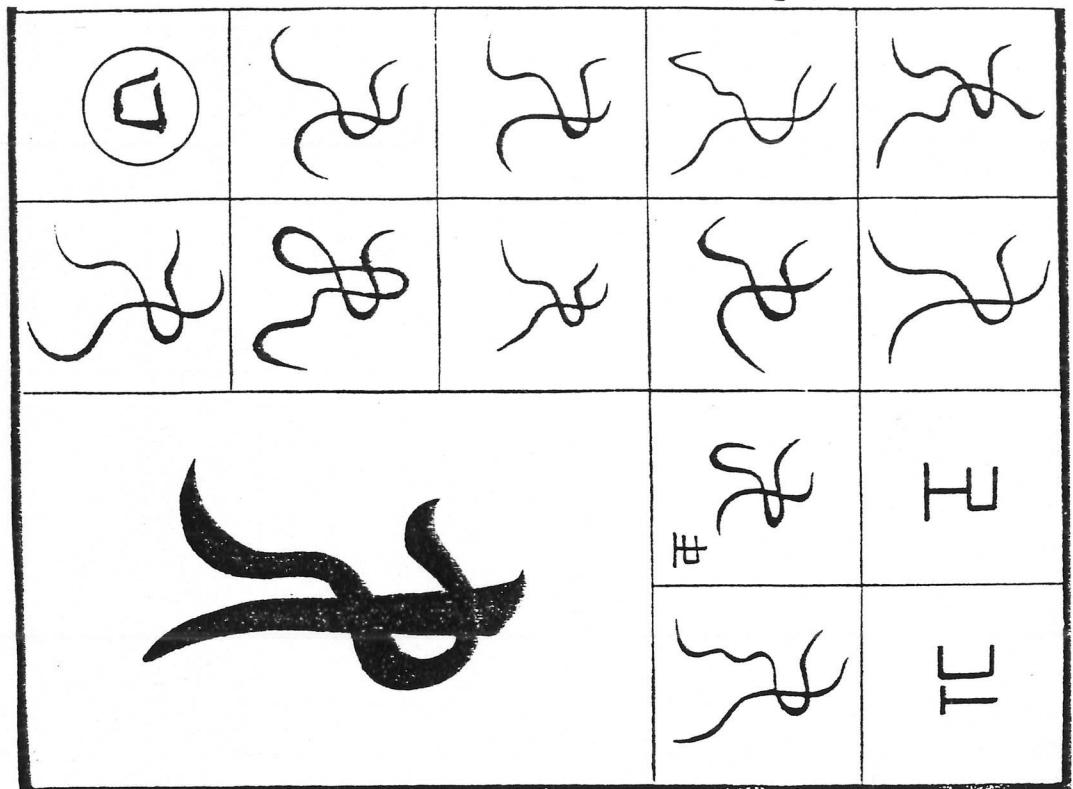


○神字彙

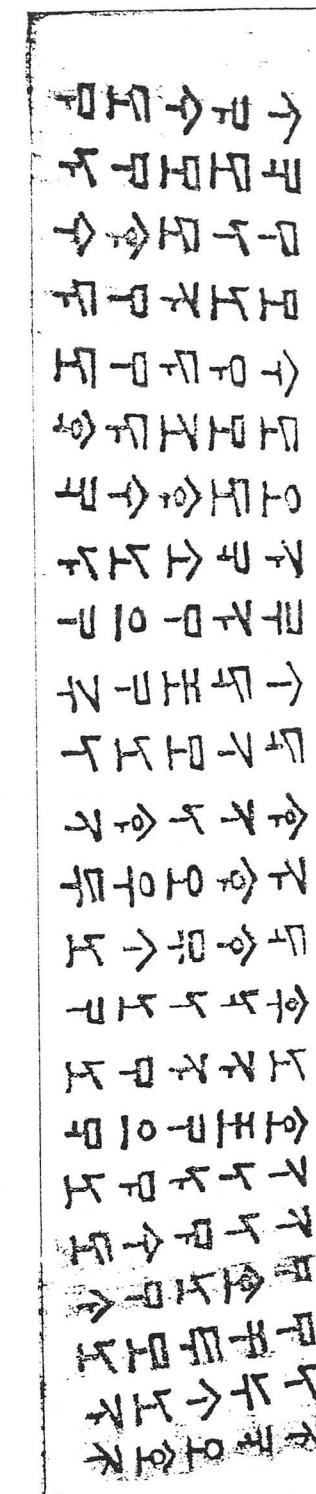
易之也。故曰：「君子以厚德而薄言，以行己而後言。」  
子曰：「君子有三变：望之儼然，即之也溫，聽其言也厲。」  
子曰：「君子不重，則無威；學問不切實，則無智；事理不審，則無明。」  
子曰：「君子不重，則無威；學問不切實，則無智；事理不審，則無明。」

○  
跋

新字彙の裏に  
神字曰文等のいと遡れ事ある度に之  
い事更に何處か見てもかく字彙の

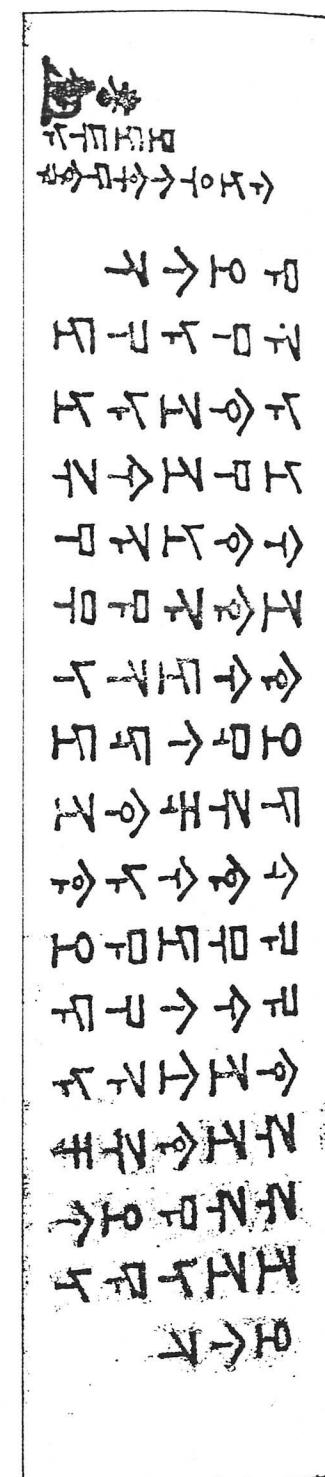


(54) 藤原基綱 (一一〇〇)



かれおほくにぬしかみえつものみほのみさきにますと  
ほよりあめのかかみのふねにのりてひむしのかわをうつはきにはき  
てきものにしてよりくるかみありかれそのなをとはすれともこたへ  
すまたみとものかみたちにとはすれともみなしらすとま  
ここにたにくくまをさくこはくえひこそかならすしりたらむとまを  
せはすなはちくえひこをめしてとはすときにはかみむすひのかみ  
のみこすくなひこなのかみなりとまをしき

「佐野大人・藤原基綱書花押」



(故) 大国主神  
天の鏡の船に乗りて  
寄り来る神あり  
問わすれども皆  
久延昆古そ必ず  
斯は神皇産靈神の  
「佐野大人 藤原基綱 書花押」

出雲の三保の  
鵝の皮を  
故其の名を問わすれども 答えず また 御供の神達に  
知らずと申しき ここに多邇具久 申さく斯は  
知りたらむと申せば 即ち 久延昆古を 召して問わす時に  
み子の少名彦名神 なりと申しき)

藤原基綱については不祥。この長文は古事記の中の一節で、大国主神の國納めの協力者、神皇產靈神のみ子の少名彦神の出現の様子を述べたものである。

卷之六

著者紹介

丹代 貞太郎

明治四十年生

農業・古代文字研究家

昭和五十二年十一月一日 発行

丹代 貞太郎

相馬市図書館蔵書

(〒〇三六一〇一)  
青森県南部平賀町新屋  
電話 ○一七二四四一ニ五四三

著者 小島末喜

(〒一四五)

海軍兵学校卒  
日本钢管製鉄所、造船所下請

東京都大田区田園調布四一三七一六  
電話 ○三一七二一一四六二五

道ひらき会員

天降り日の宮座主（天孫降臨の国

小島末喜

(〒一四五)

運輸会社社長

印刷所

東京都千代田区神田司町二丁目十一  
電話 ○三一九三一八四七三

見岳）荒深道齊著書約二十種出版

発行者

小島末喜

有限会社 三信孔版

限定出版。 売価 三千円（送込）

「藍し聞く、上古の世、未だ文字あらず、貴賤老少々に木石々、無事々」

書契以来 古を語るを好まず」とあり、萬多王編述の「新撰姓氏錄」には

「神世 是不開 書き写すもの 伝えるなし」とある等の事から、之を錯覚して促えた事により、「記紀を編述した当時の三善清行の改元の勘文」に辿りつく。

即ち、「古語拾遺の序文に云う位だから、古代に文字はなかつたといえる。従つて古代に書いた記紀の時代も日本に文字はなかつたのだ」と謳歌する。本居宣長も否定した。

然らばその誤を指摘する。「先づ「藍し聞く」と云うからには「分らない他人が言つてゐる」のであって自分が決定したのでない。之を後世は広成が言つたと押しつけている。之を後世では広成の決定とされてゐる。

又、広成が生れたのは、聖武天皇の神龜二年（七一五）年で、古事記完成との年代の差は僅か十三年である。姓氏錄でも、古事記との差は一〇三年しかない。

即ち「僅か百年前の昔を上古とか大昔、神世」と云う人はない。広成にとつては「古事記の出来る直前は現代であり上古ではない」のである。広成の言う「上古」とは後世から言えば数万あるいは十万年以上の上上古である。広成を相手にせず、彼と万年と違わない、

古事記作成の稗田阿礼<sup>ひえ</sup>の書が初めて此書で見つかつたから氣がつくのだが、彼から考えるとよく判る。阿礼が古代文字を書いているから「自分達の現代は文字があり、後世に言う古代は此の時代を誤つて含めている」のだ。

即ち、広成の言う「上古の世」は彼直前をさしたのではなく、太古や上上古、神世<sup>じんせい</sup>であり、日本民族発祥の頃をさしたものである。最近の遺物の出土頃を考古学から推定して、六十万年前後と見てよい筈である。此の大昔には文字はなくて、「後世」いう古代、文字無しは上上古には正しいが、近古たる阿礼時代ではない。

古語拾遺から百年前で古事記の成立時は上古ではない。然し「古代、文字なし」は「広成直前を含む」と云う。宛<sup>あたか</sup>も歴史に暗い、年代の正確に分らぬ後世の学者は「上古も上上古も同じ」にしたので「此の上古を広成直前以前の昔」としたのだ。宛も水平線を見れば、一里向うも、万里向うのアメリカも同じ水平線の向うに見えるのと同じである。依つて水平線と古代を相似と考えるとよい。上上古も上古も古代も一つにしてゴッチャにしたのだ。之を後世の学者は誤つて「古語拾遺にも上古の世、文字なし」と言つてゐるのではないか。上上古にはなかつたから上古にもなかつた。上上古と上古を合せて古代である。故に古代

つた阿礼の言葉がもとになっている。もし帝紀や旧辞が漢字で書かれたものであるならば、漢文の達人であった安麻呂がそれを自身で読めばすむことで、わざわざ阿礼の口を借りるまでもないことだ。

すなわち帝紀や旧辞は、阿礼には読めても安麻呂には読めない文字、つまり日本の古代文字で書かれていたことを意味するのである。<sup>稗田</sup>阿礼は古代文字と漢文の橋渡し役、いわば通訳として安麻呂のために働いたのだ。

このへんのところをもう少し具体的に、古事記の序文によつて検討してみよう。

「是於 天皇（天武天皇のこと）曰く朕聞く<sup>①</sup> 諸家之齋（もたらし）たる帝紀及本辭（<sup>ノ</sup>旧辞）既に正実に違ひ多に虚偽を加ふ……中略……時に姓は稗田 名は阿礼と云う舍人あり 歲二十八才、生来聰明で、どのような<sup>②</sup> 文章でも 一度目で見れば暗誦し一度聞いたことは忘れない そこで天皇は 阿礼に命じて 帝皇の日繼及先代旧辞を読み習わせたり………中略………ここに天皇（元明天皇のこと）は帝紀及び旧辞の違いを正そうとして臣 安麻呂に命じて 阿礼が誦む所の 先帝（天武天皇）の御命令になられた

旧辞の類を撰録して 差し出すようにと仰せられた云々」

この序文を見るだけでも、古事記以前に「文字あり」が十分にうかがえると思うので、少しく述べてみたい。

① 諸家の齋たる帝紀・本辭

「帝紀・本辭」という文字が、古事記の序文中に九回も出てくる。これは天皇紀や国史の記録書であることは学者も認めてくる。史書である以上は当然のこと「文字」で記した書物であったことになる。

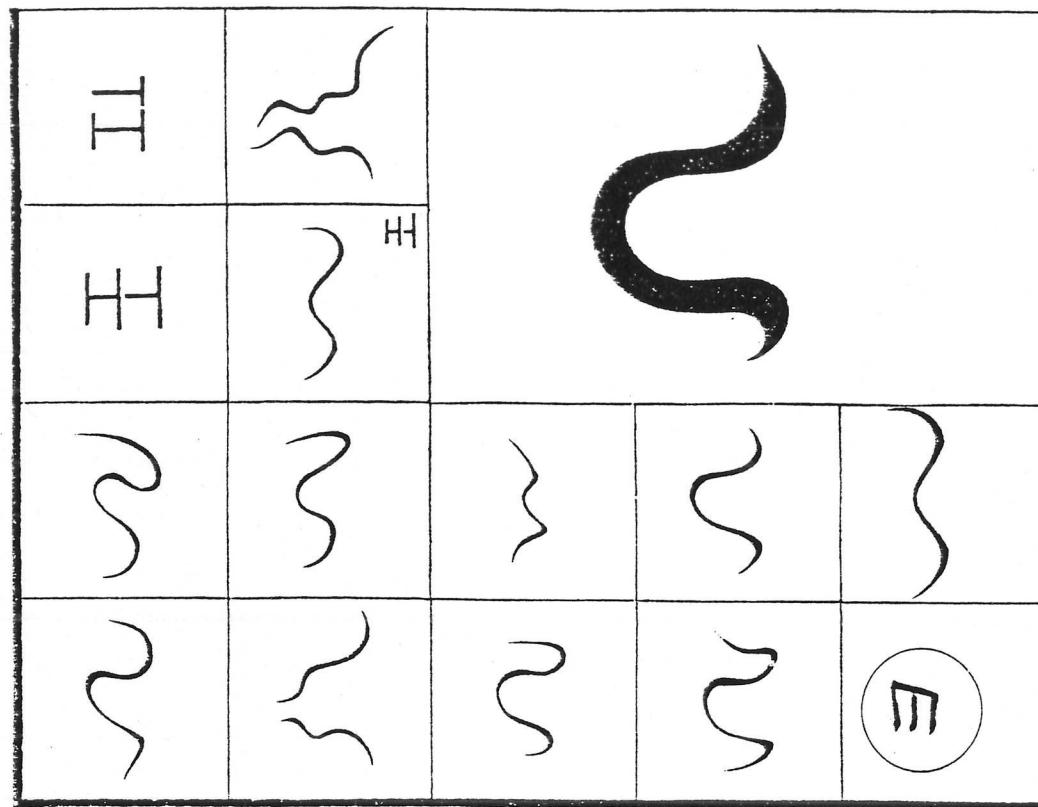
また「諸家のもたらした」というように、これらの史書、記録は五家や十家からのものではない。都近辺の豪族はもちろん、全国地方豪族、旧家から集納された沢山の史書である。安麻呂は「吾々は今、沢山の史書の中から、正しい個所を選んで古事記を作った」と述べている。

さらに安麻呂は「この帝紀・本辭は、私の読み得ない文字だから、<sup>稗田</sup>阿礼に誦んで頂き、私はこれを色々苦心して、漢字で書いた」とある。安麻呂の読みぬ字で書かれた沢山の史書があったとは、わが国に古代から伝わる文字があり、それによつて書かれた書物が

○ 神字裏	留	○ 神字裏	留
11	留	11	留
11	留	11	留
11	留	11	留
11	留	11	留
11	留	11	留
11	留	11	留
11	留	11	留
11	留	11	留
11	留	11	留

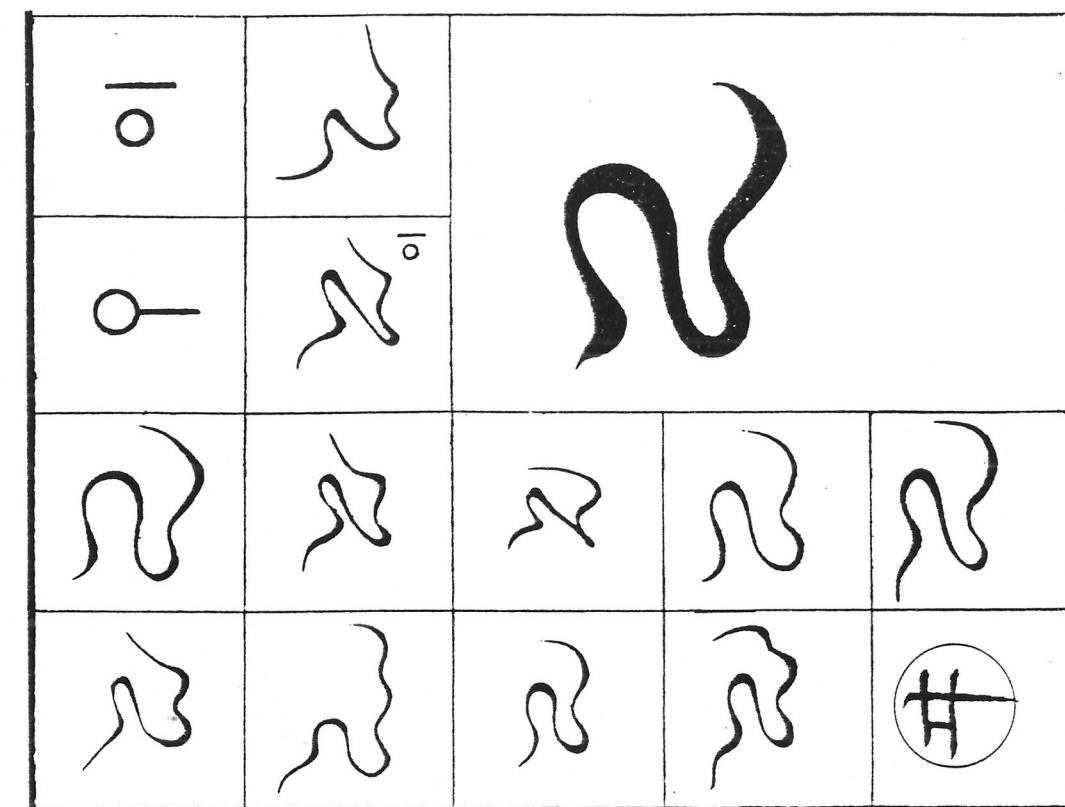
○ 神字裏	遠	○ 神字裏	遠
7	遠	7	遠
7	遠	7	遠
7	遠	7	遠
7	遠	7	遠
7	遠	7	遠
7	遠	7	遠
7	遠	7	遠
7	遠	7	遠
7	遠	7	遠

## ○ 神字筆 余

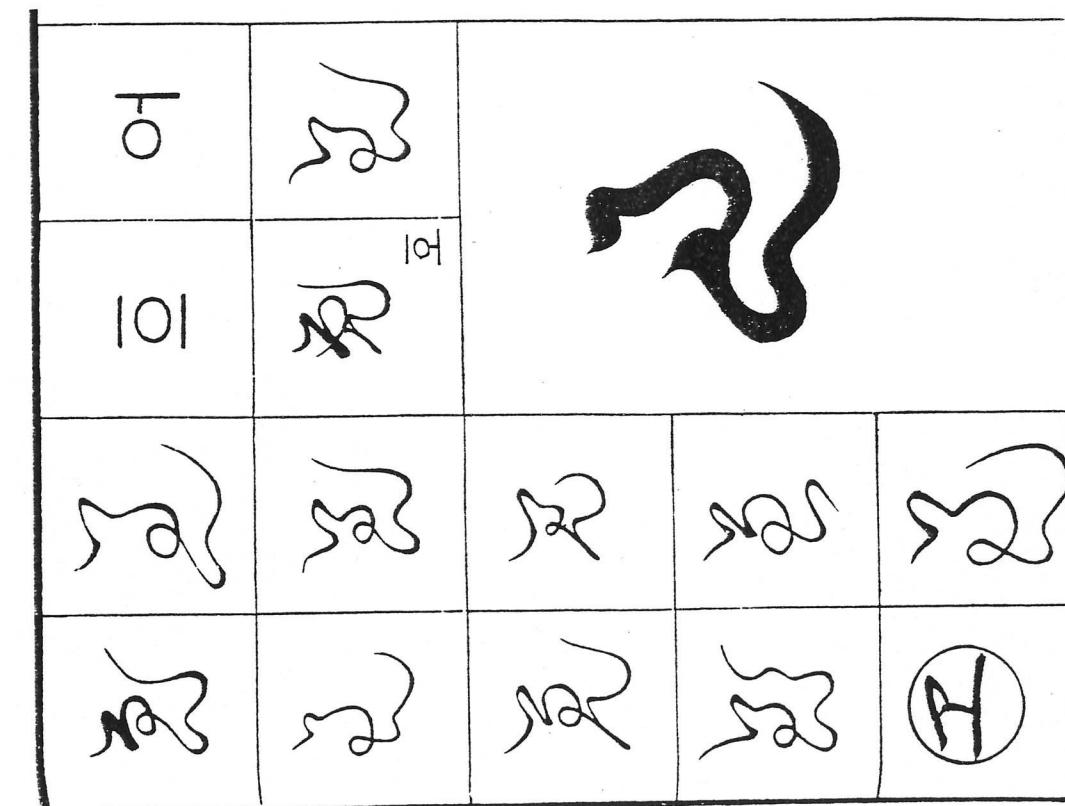


## ○ 神字筆 和

## ○ 神字筆 韓

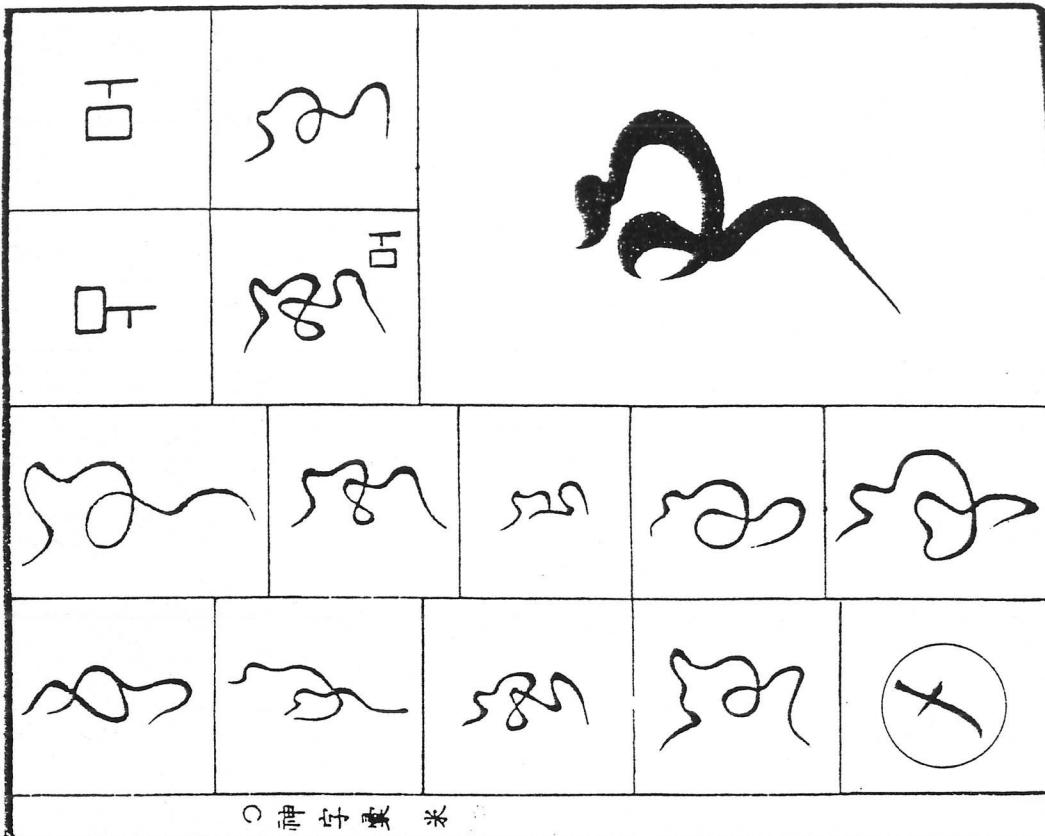


## ○ 神字筆 韩

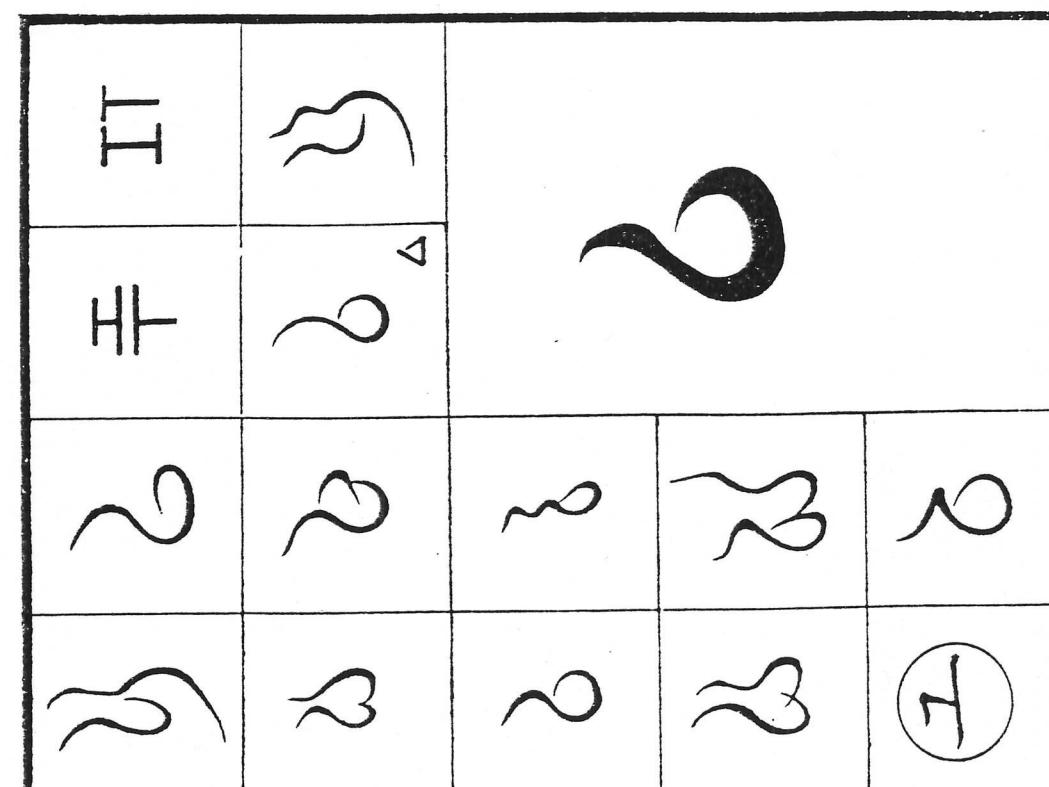
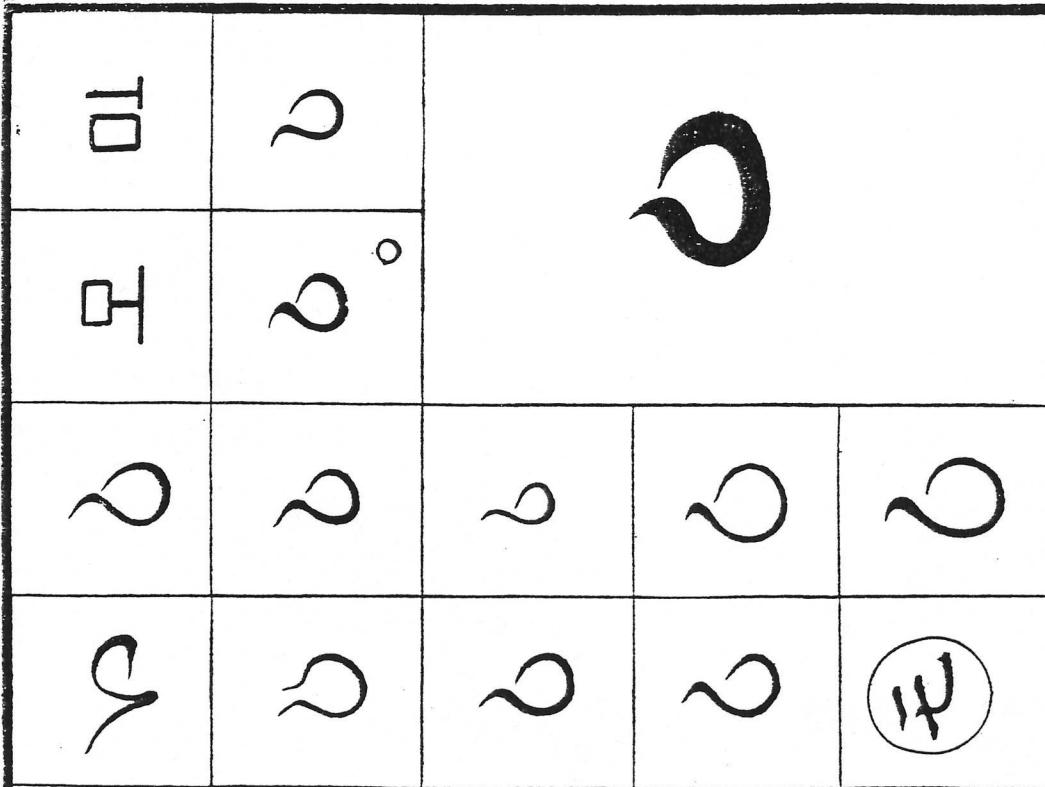
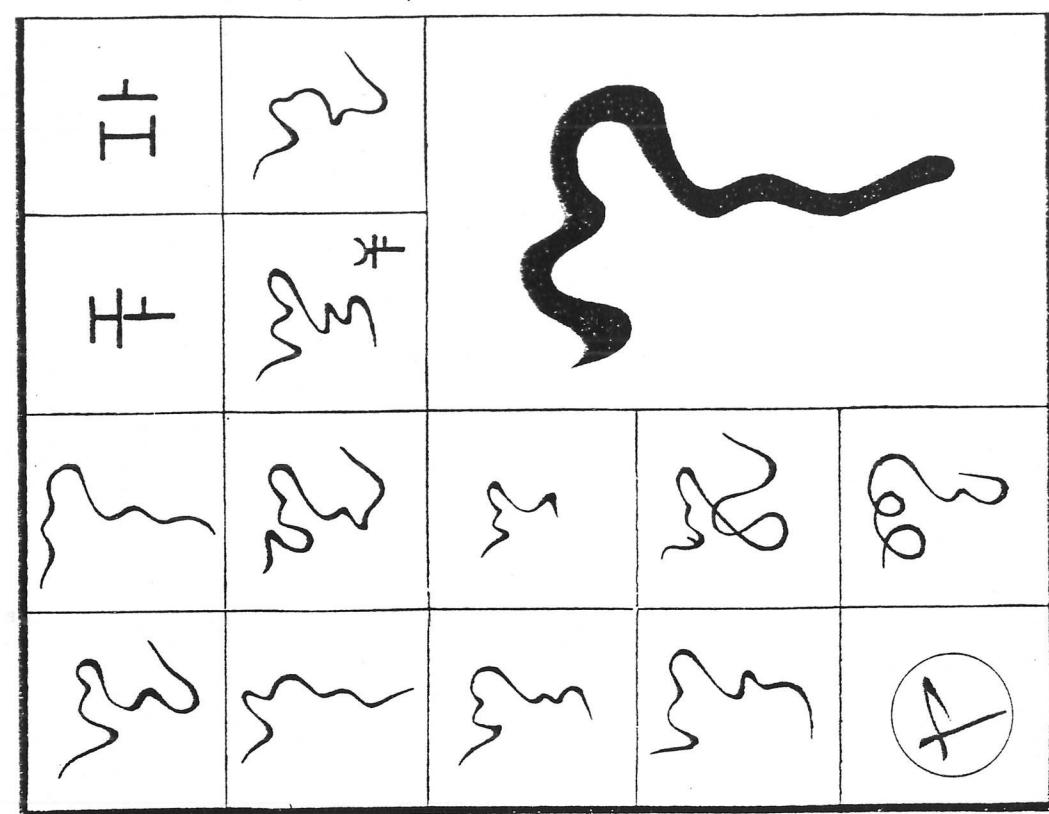


## ○ 神字筆 韩

○ 神字彙毛



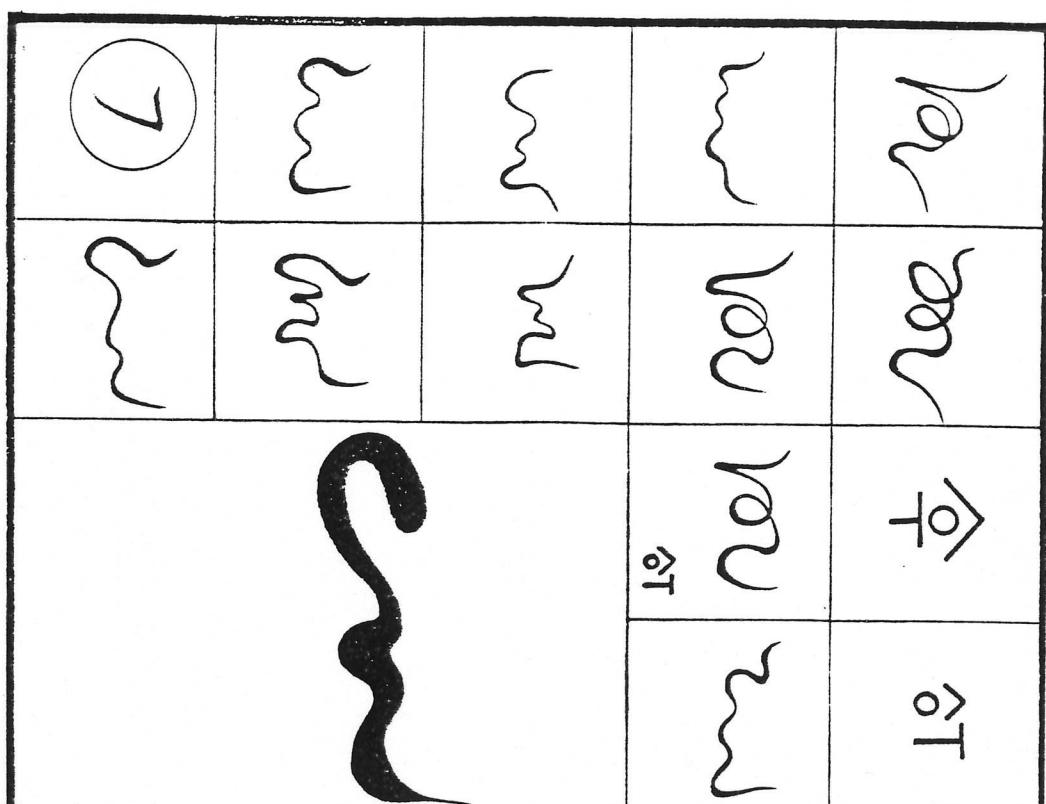
○ 神字彙 由



○ 神字彙 占			
	ム	ム	ム
	ム	ム	ム
ム	ム	ム	ム
	ム	ム	ム
	ム	ム	ム
ム	ム	ム	ム
	ム	ム	ム
	ム	ム	ム
	ム	ム	ム

○ 神字彙 麻			
	マ	マ	マ
	マ	マ	マ
マ	マ	マ	マ
	マ	マ	マ
	マ	マ	マ
マ	マ	マ	マ
	マ	マ	マ
	マ	マ	マ
	マ	マ	マ

○ 神字彙表	101	102	103	104	105
○ 神字彙表	106	107	108	109	110
○ 神字彙表	111	112	113	114	115
○ 神字彙表	116	117	118	119	120
○ 神字彙表	121	122	123	124	125

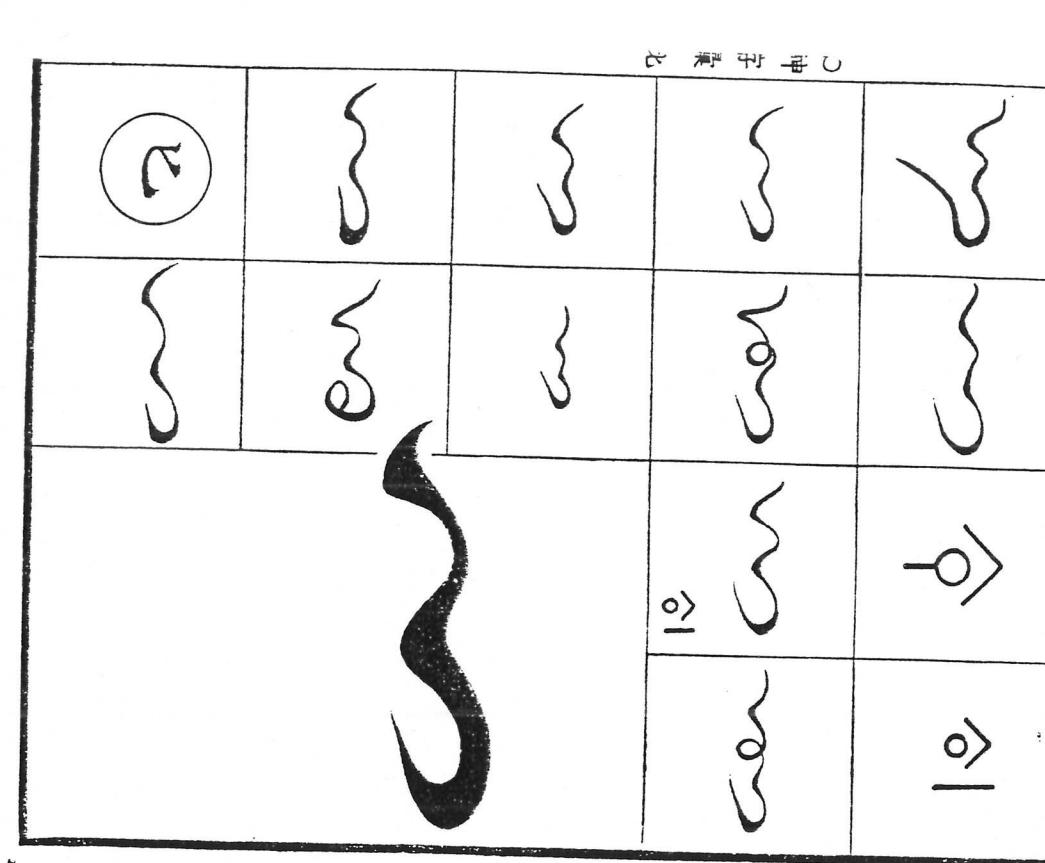


○ 神字彙表

○ 神字彙表	101	102	103	104	105
○ 神字彙表	106	107	108	109	110
○ 神字彙表	111	112	113	114	115
○ 神字彙表	116	117	118	119	120
○ 神字彙表	121	122	123	124	125

○ 神字彙表

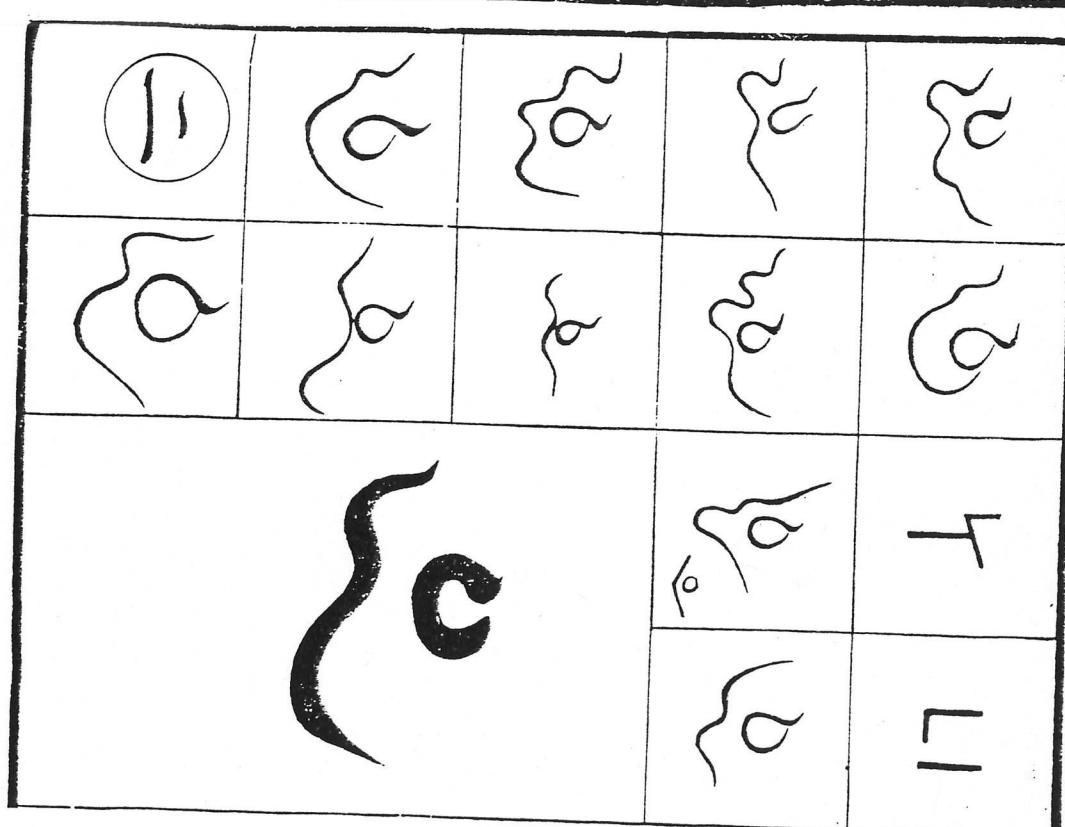
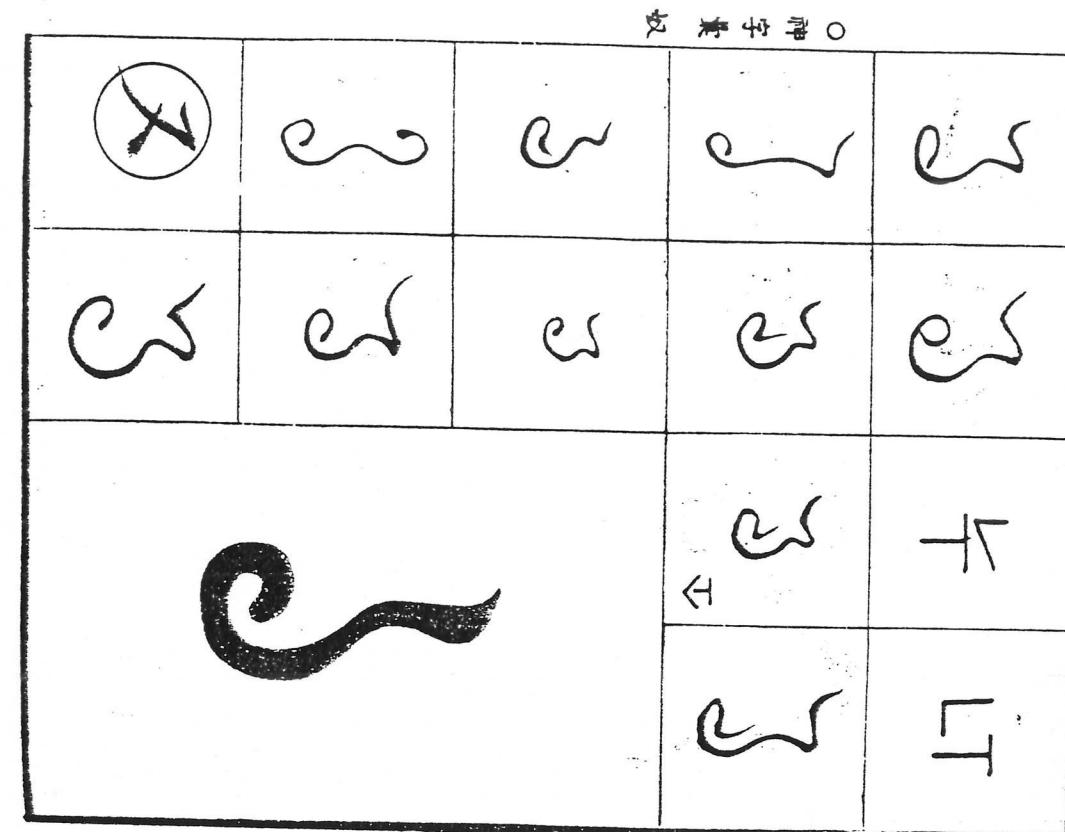
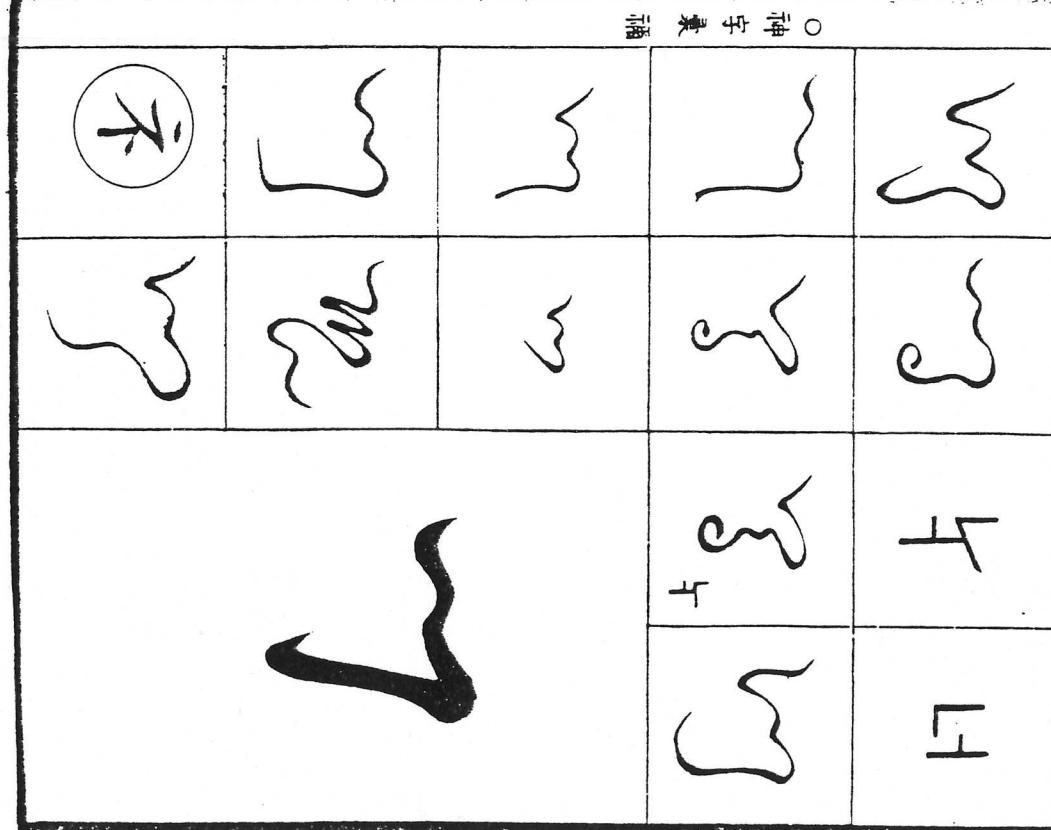
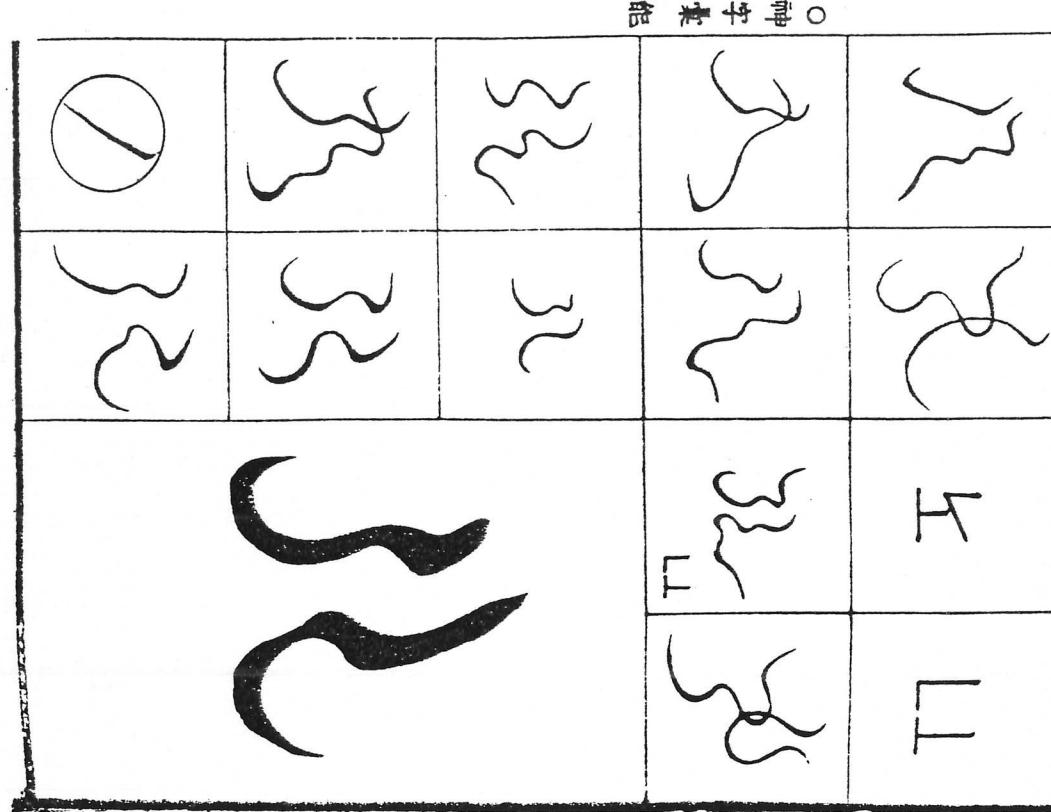
○ 神字彙表	101	102	103	104	105
○ 神字彙表	106	107	108	109	110
○ 神字彙表	111	112	113	114	115
○ 神字彙表	116	117	118	119	120
○ 神字彙表	121	122	123	124	125

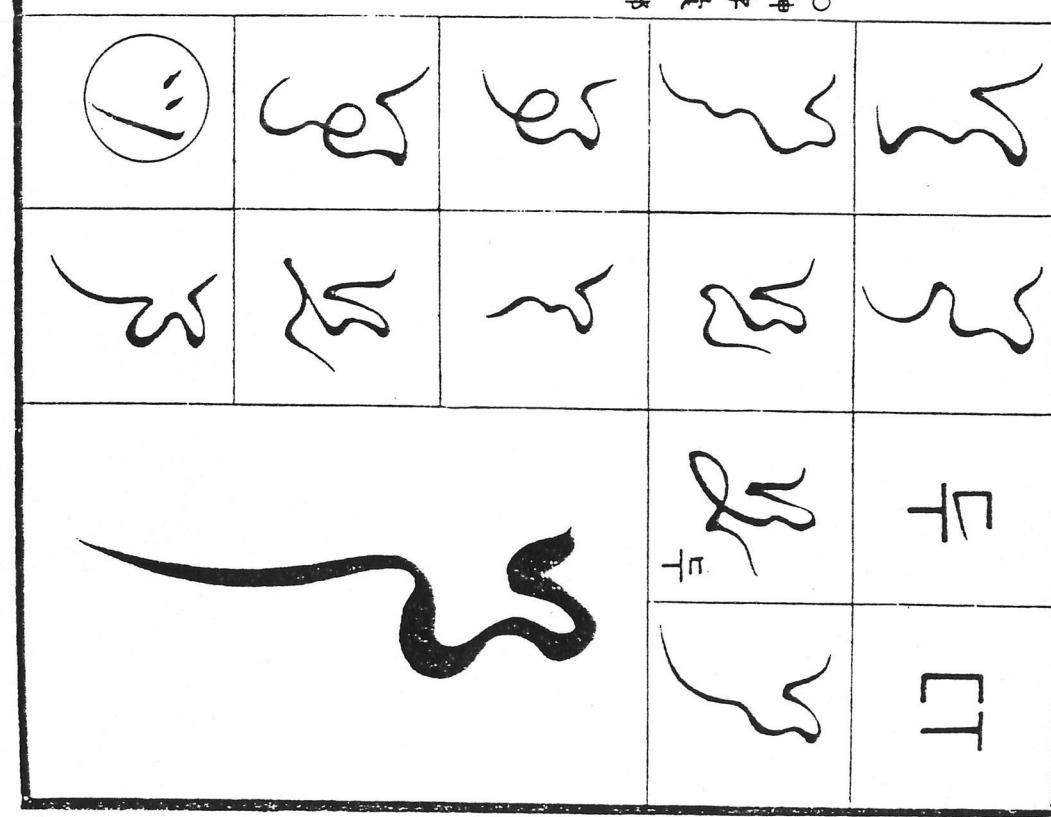
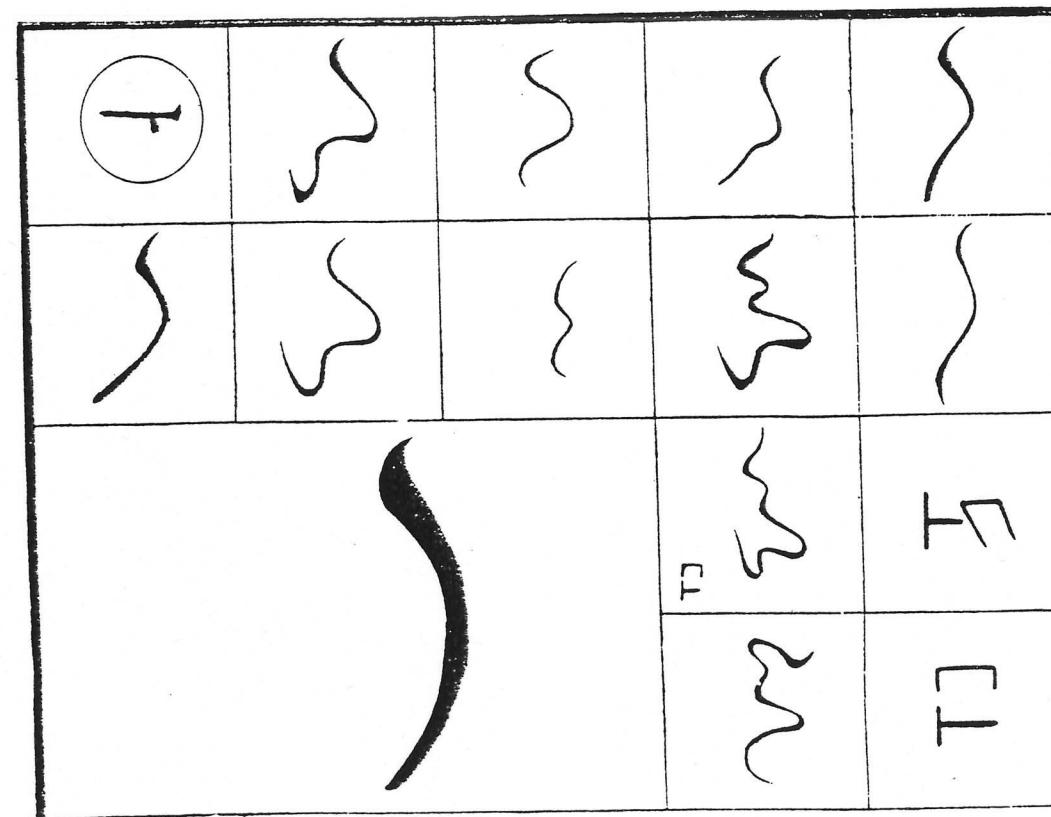
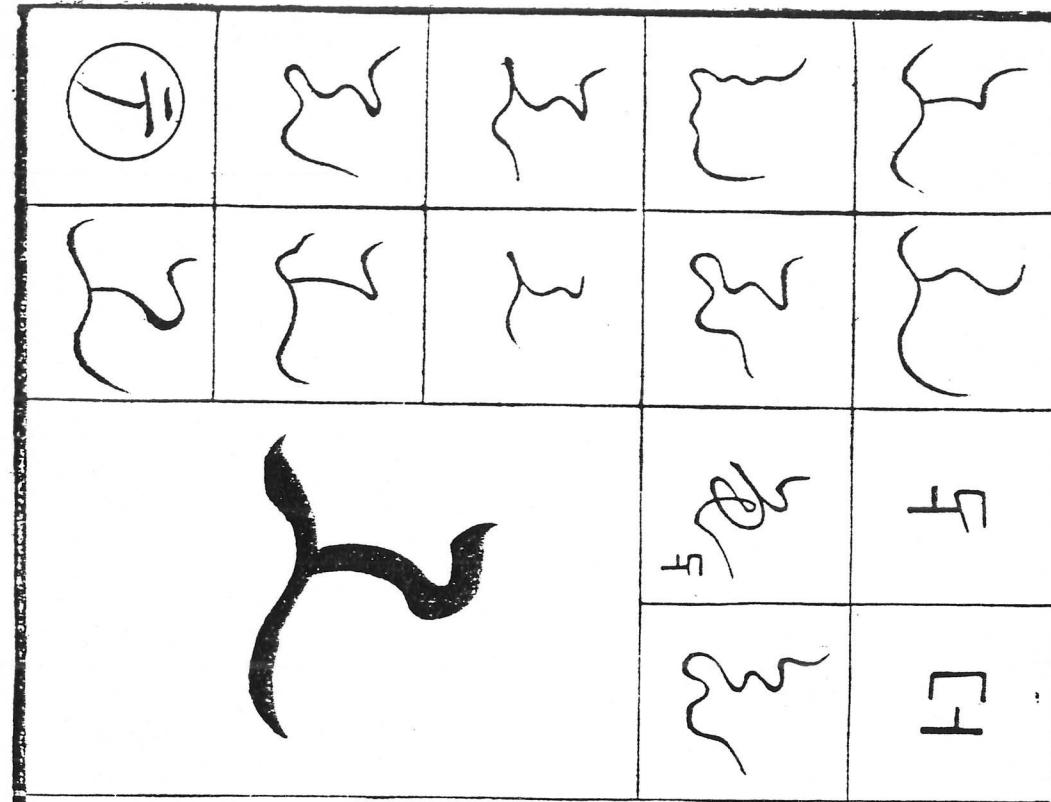
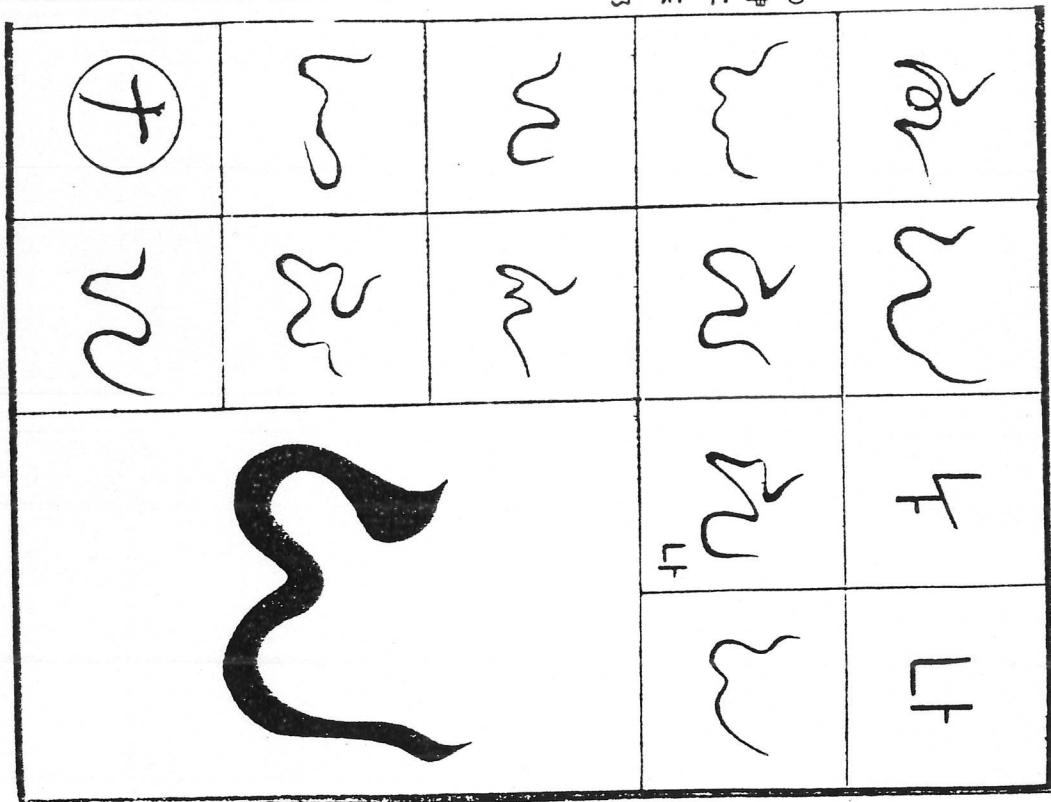


○ 神字彙表

○ 神字彙表	101	102	103	104	105
○ 神字彙表	106	107	108	109	110
○ 神字彙表	111	112	113	114	115
○ 神字彙表	116	117	118	119	120
○ 神字彙表	121	122	123	124	125

○ 神字彙表








中文字型				
七	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇
𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇
𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇
𠂇	𠂇	𠂇	𠂇	𠂇

○神字彙 佐

フ	フ	フ	フ
フ	フ	フ	フ
フ	フ	フ	フ
フ	フ	フ	フ

ツ	ツ	ツ	ツ
ツ	ツ	ツ	ツ
ツ	ツ	ツ	ツ
ツ	ツ	ツ	ツ

○神字彙 佐

ア	ア	ア	ア
ア	ア	ア	ア
ア	ア	ア	ア
ア	ア	ア	ア

ツ	ツ	ツ	ツ
ツ	ツ	ツ	ツ
ツ	ツ	ツ	ツ
ツ	ツ	ツ	ツ

○神字彙 佐

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ア

ツ

ツ

ツ

ツ

ツ

ツ

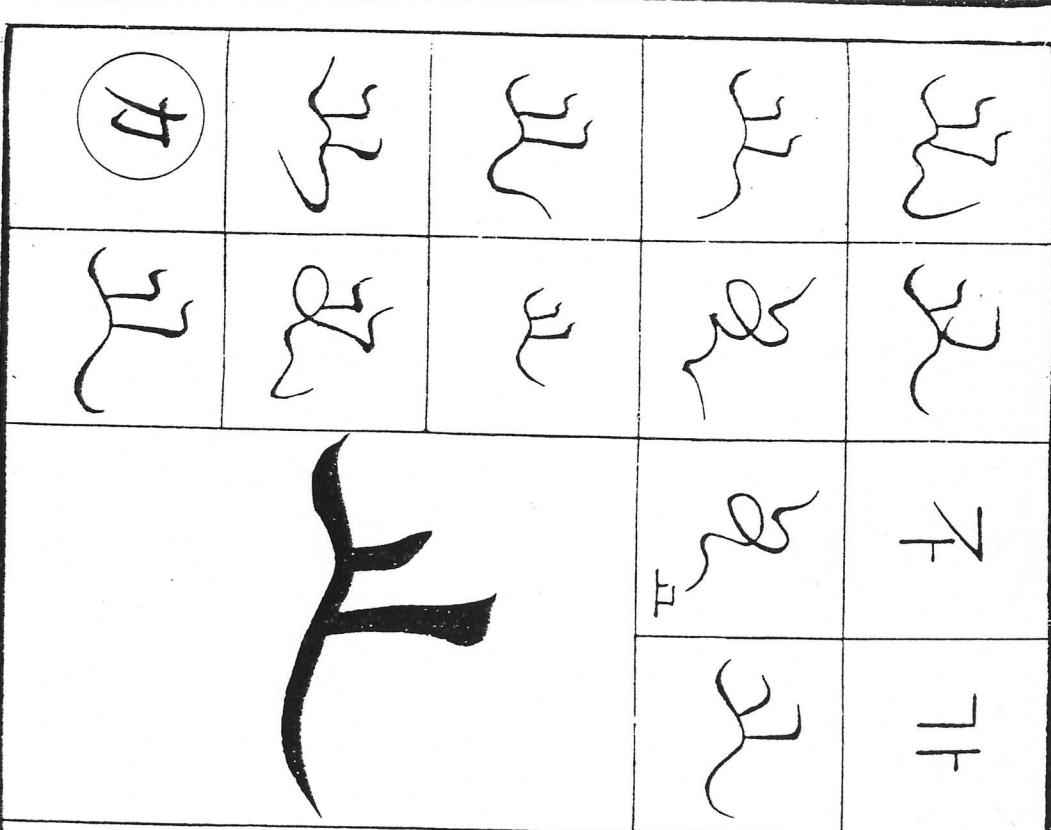
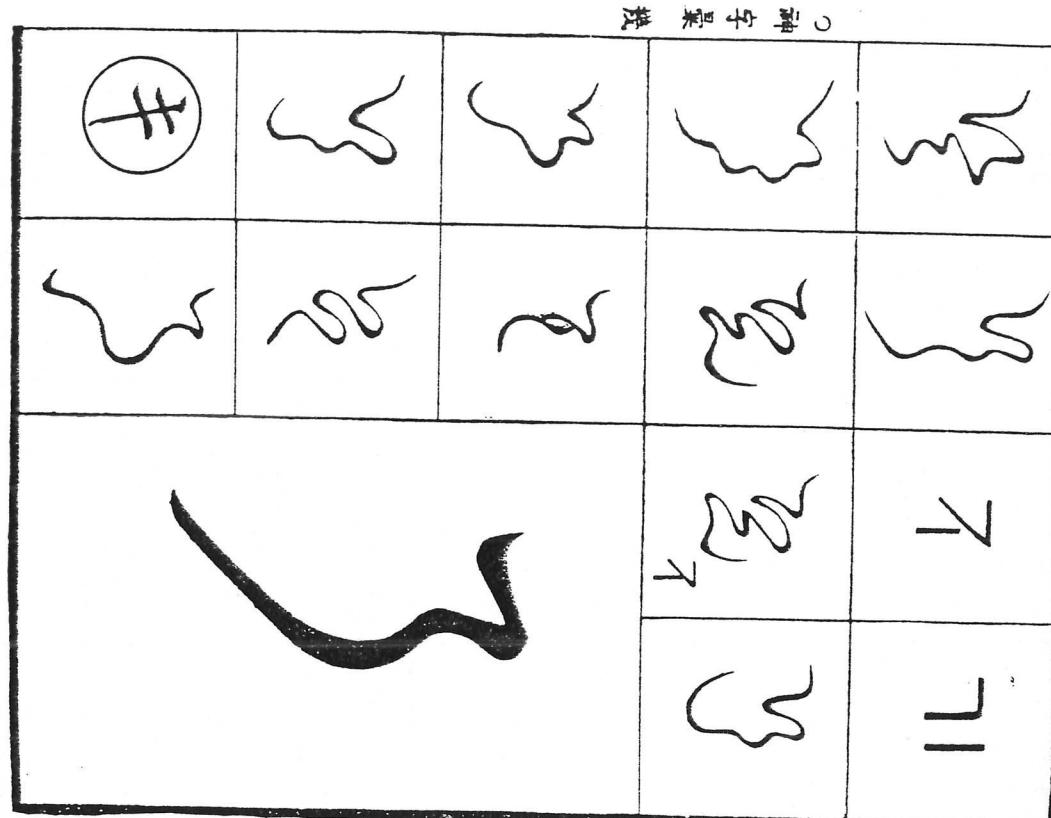
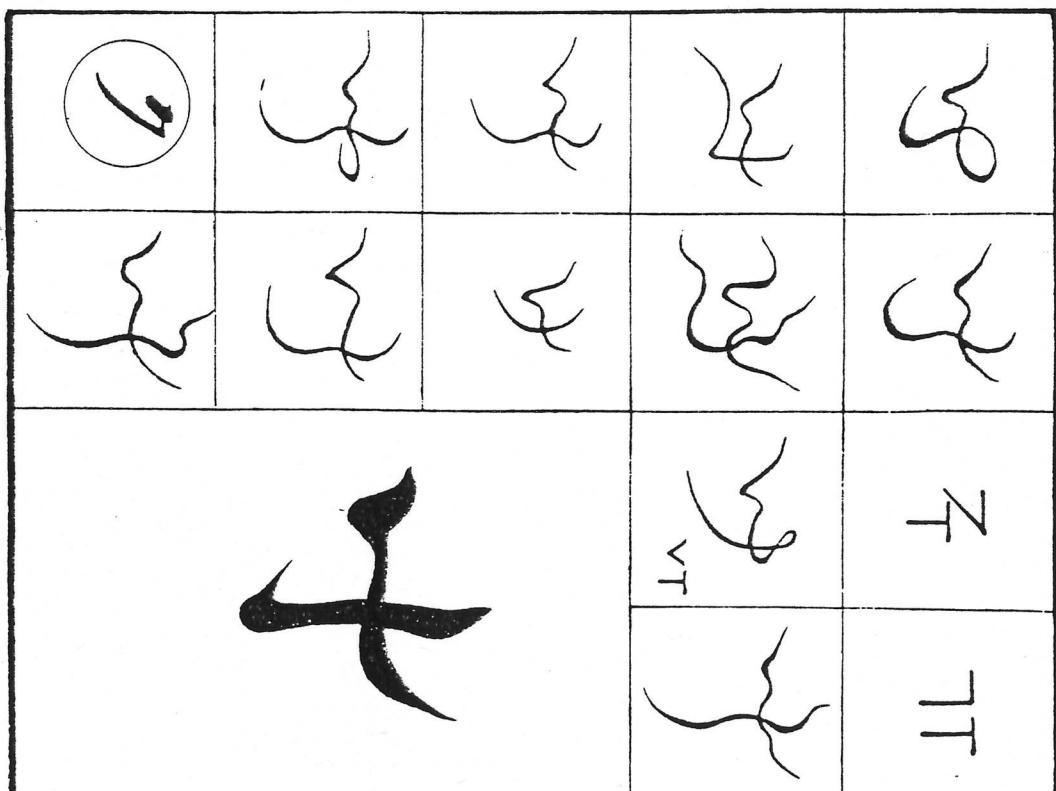
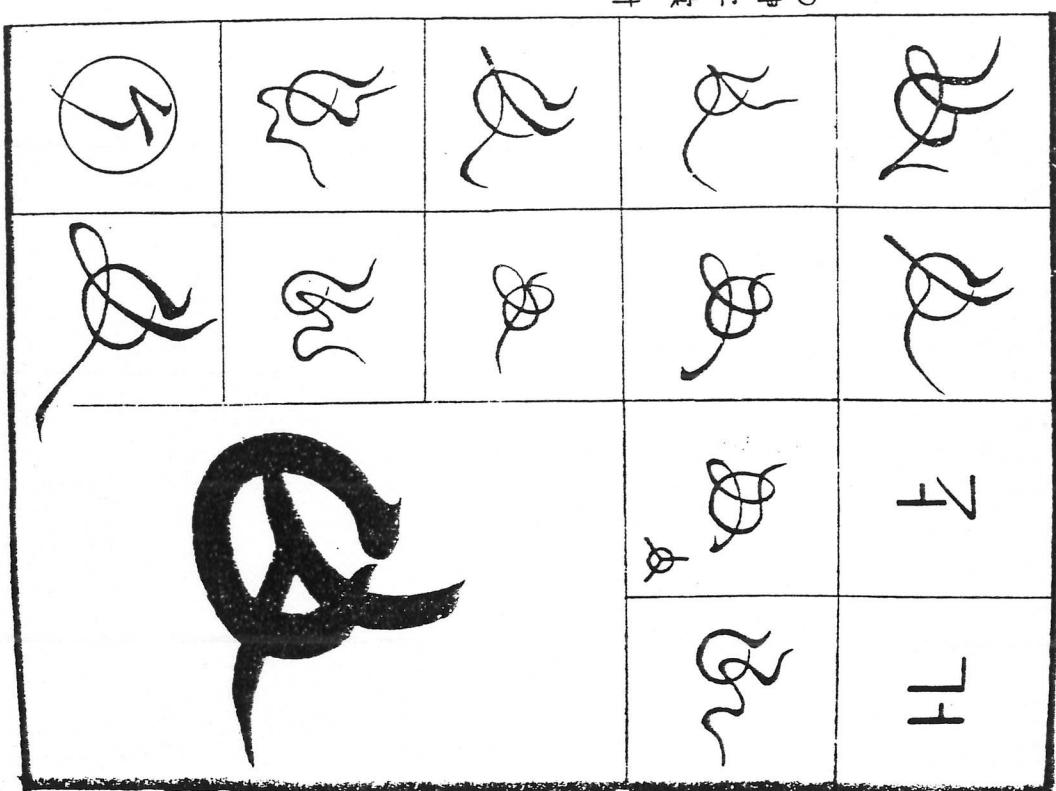
ツ

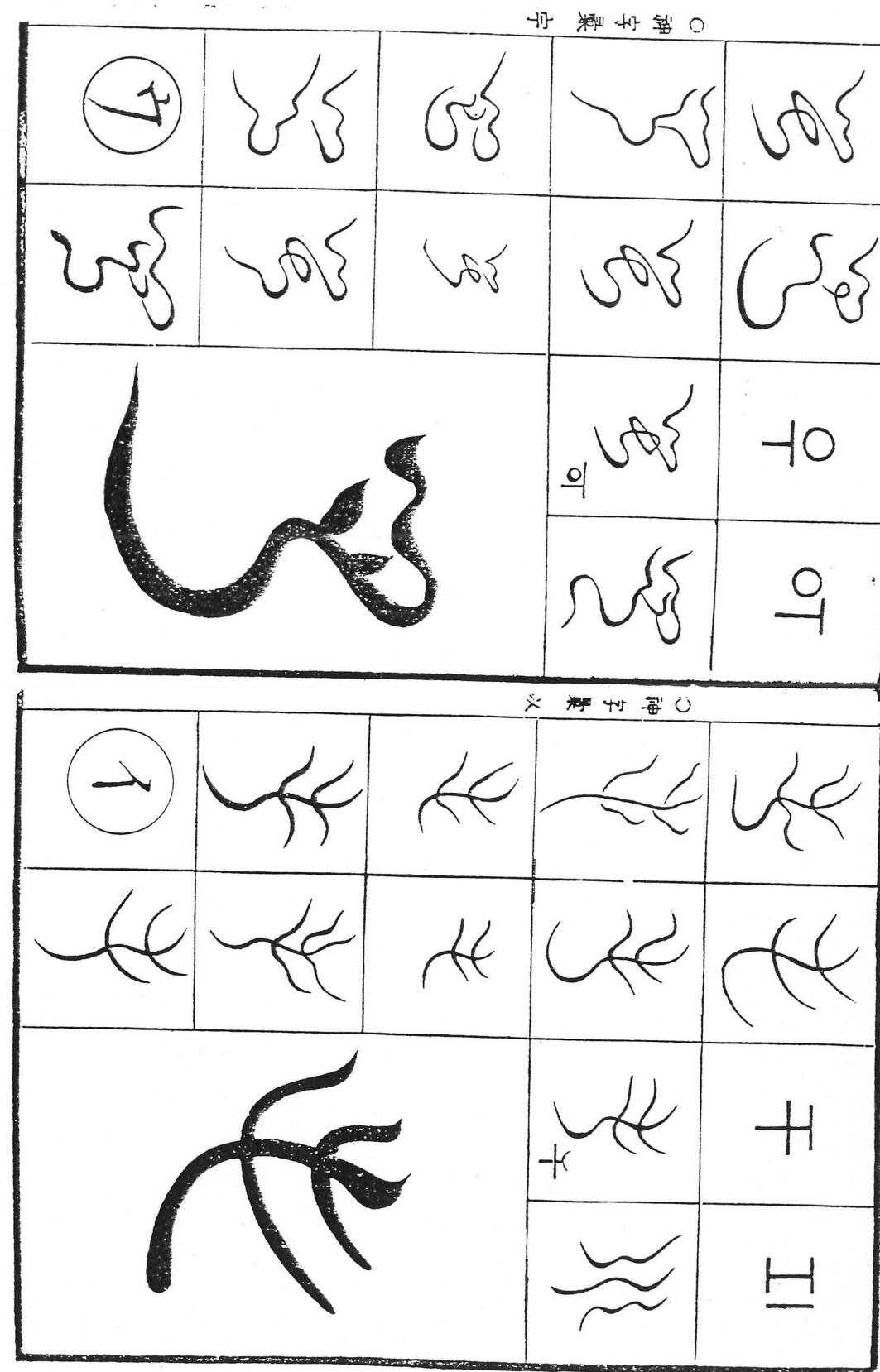
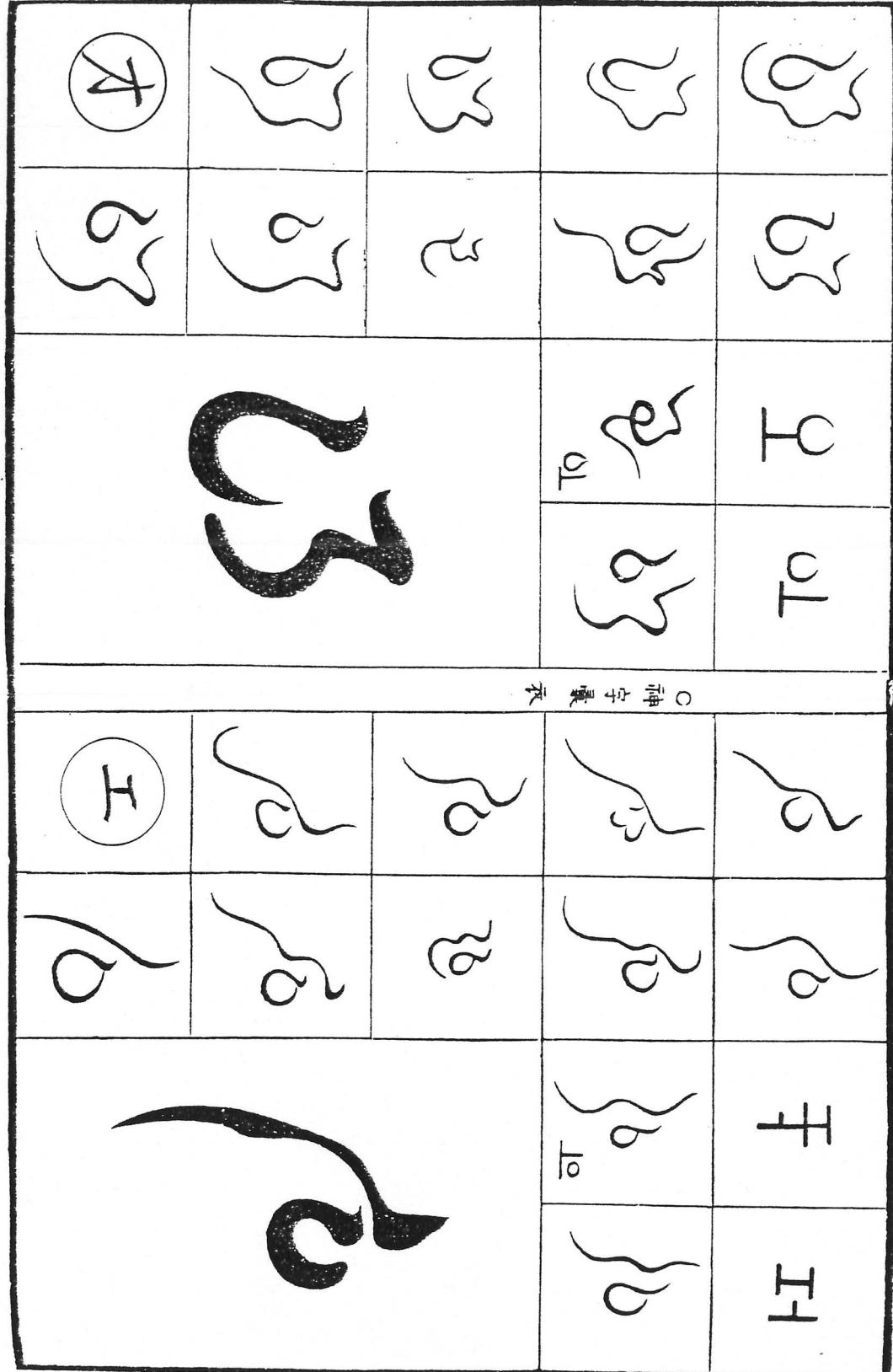
ツ

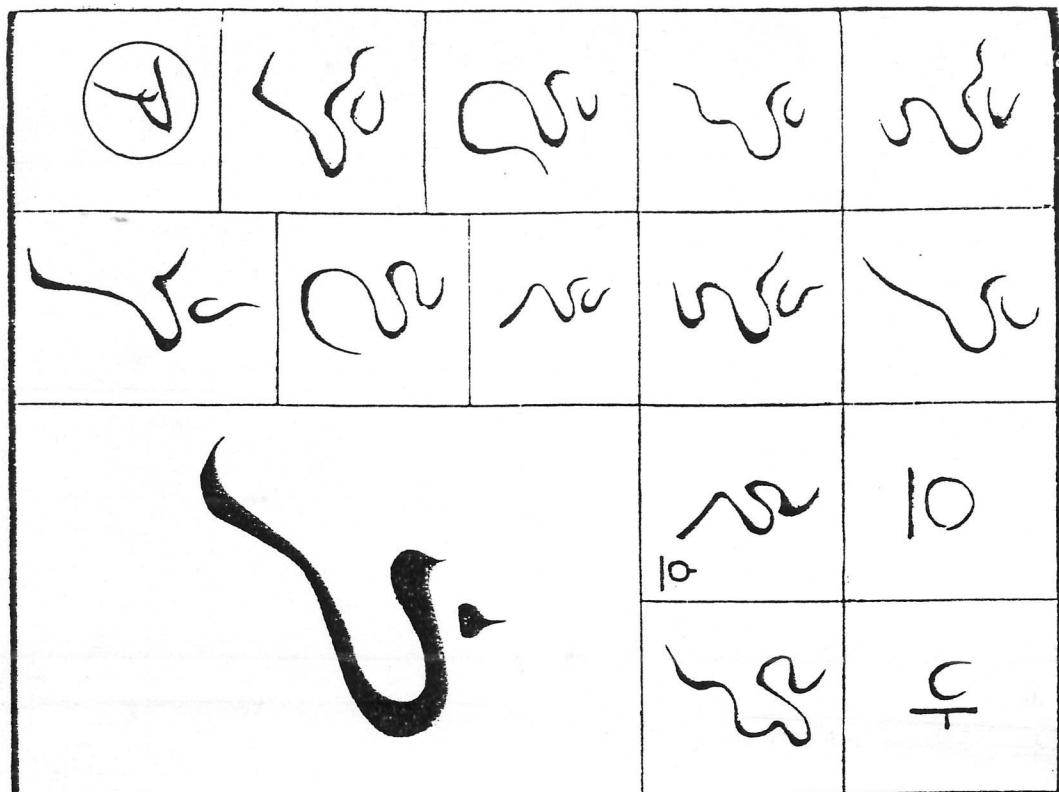
ツ

ツ

ツ







須	衣	達	幾	古	比
14	11	10	12	14	22
阿	爾	=	多	登	布
14	20	17	31	19	日
世	佐	波	由	毛	美
16	14	22	27	26	索
惠	里	久	章	余	余
29	31	13	29	17	余
保	閉	米	都	以	布
24	23	26	18	32	美
豐	氐	力	口	弓	索
32	18	12	28	10	文
言	能	守	奴	年	比
13	21	10	20	21	古
麻	於	曾	那	夜	達
24	11	16	15	27	幾

所傳 郡大宮神社 阿波國名 芳相模國鶴岡 常陸國鹿嶋 越後國彌彦	第五文 不傳出自四 所傳 第五文 媚堂所得	同于右文 下 第三文 所傳 第六文 神祇伯王家	傳 阿比留氏所 對馬國卜部 同于上 第二文 所傳 第七文 周防國攻珂	同于右文 下 第三文 所傳 第八文 近江國蒲生	萬四文 大和國法隆寺所傳
所傳 郡加茂神社 郡綿向神社 神社所傳 第九文 大和國三輪	第六文 萬七文 萬八文 萬九文	所傳 第七文 萬八文 萬九文	所傳 第八文 萬十二文 萬十三文	所傳 第九文 萬二文 萬三文	所傳 第十文 萬十文
所傳 郡大宮神社 阿波國名 芳相模國鶴岡 常陸國鹿嶋 越後國彌彦	第六文 萬六文 萬七文 萬八文 萬九文	所傳 第七文 萬六文 萬七文 萬八文 萬九文	所傳 第八文 萬十二文 萬十三文	所傳 第九文 萬十一文 萬十二文	所傳 第十文 萬十文
所傳 郡大宮神社 阿波國名 芳相模國鶴岡 常陸國鹿嶋 越後國彌彦	第七文 萬七文 萬八文 萬九文 萬十文	所傳 第八文 萬六文 萬七文 萬八文 萬九文	所傳 第九文 萬十二文 萬十三文	所傳 第十文 萬十一文 萬十二文	所傳 第十文 萬十文
所傳 郡大宮神社 阿波國名 芳相模國鶴岡 常陸國鹿嶋 越後國彌彦	第八文 萬八文 萬九文 萬十文 萬十一文	所傳 第九文 萬七文 萬八文 萬九文 萬十文	所傳 第十文 萬十二文 萬十三文	所傳 第十文 萬十一文 萬十二文	所傳 第十文 萬十文

○神字彙

(P)

所傳 郡大宮神社 阿波國名 芳相模國鶴岡 常陸國鹿嶋 越後國彌彦	第五文 不傳出自四 所傳 第五文 媚堂所得	同于右文 下 第三文 所傳 第六文 神祇伯王家	傳 阿比留氏所 對馬國卜部 同于上 第二文 所傳 第七文 周防國攻珂	同于右文 下 第三文 所傳 第八文 近江國蒲生	萬四文 大和國法隆寺所傳
所傳 郡加茂神社 郡綿向神社 神社所傳 第九文 大和國三輪	第六文 萬七文 萬八文 萬九文 萬十文	所傳 第七文 萬六文 萬七文 萬八文 萬九文	所傳 第八文 萬十二文 萬十三文	所傳 第九文 萬十一文 萬十二文	所傳 第十文 萬十文
所傳 郡大宮神社 阿波國名 芳相模國鶴岡 常陸國鹿嶋 越後國彌彦	第六文 萬六文 萬七文 萬八文 萬九文	所傳 第七文 萬六文 萬七文 萬八文 萬九文	所傳 第八文 萬十二文 萬十三文	所傳 第十文 萬十一文 萬十二文	所傳 第十文 萬十文
所傳 郡大宮神社 阿波國名 芳相模國鶴岡 常陸國鹿嶋 越後國彌彦	第七文 萬七文 萬八文 萬九文 萬十文	所傳 第八文 萬六文 萬七文 萬八文 萬九文	所傳 第九文 萬十二文 萬十三文	所傳 第十文 萬十一文 萬十二文	所傳 第十文 萬十文
所傳 郡大宮神社 阿波國名 芳相模國鶴岡 常陸國鹿嶋 越後國彌彦	第八文 萬八文 萬九文 萬十文 萬十一文	所傳 第九文 萬七文 萬八文 萬九文 萬十文	所傳 第十文 萬十二文 萬十三文	所傳 第十文 萬十一文 萬十二文	所傳 第十文 萬十文